
カオス・オブ・ヴィーナス

シャイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・オブ・ヴィーナス

【Nコード】

N6992M

【作者名】

シャイン

【あらすじ】

あの戦いからどれほどの時間が経ったのだろうか。

多くの世界がこの世の中から消え去ろうとしたとき、少年は自分の世界と自分の身を犠牲にして世界を救った。

しかし、危機は去っていなかった。

今度はもっと多くの世界が消滅の危機に立っていた。

そして、少年は仲間たちと世界を救うべく世界を行き来する……

原作が多いので何を原作にしているかはこの小説の第零章を読んで

第零章 原作（前書き）

多過ぎて書ききれなくなったので……
増える度に更新します

下の文字の羅列はきにしないで下さい
文字数制限が通らないので救済処置です

第零章 原作

クロス？オブ？ヴィーナス

東方Project

キノの旅

ロックマンゼロ

とある魔術の禁書目録

学園キノ

魔界戦記ディスガイア

涼宮ハルヒの憂鬱

らき☆すた

僕殺天使ドクロちゃん

キングダムハーツ（オリキャラのみ）

Get Backers―奪還屋―

コラボ

人修羅の旅

「こう見てみると……随分多いな……」

まだまだだよ

俺のより多い人いるよ（多分）

「ま、お前が書いているんだから好きにすればいいだろ」

そっか、それもそうだな

「で？これは一体何なんだ？」

緊急的な処置だよ、ツカサ君

「どういう事だ？」

文字の数が足りない為にこうやって稼いでいるのさ！（キラッ！）
「うざいことこの上無いな……」

仕方ないだろ

原作名は百字以内って制限があったからさ

こんな感じでやらないと足りないんだよ

「だから原作名の最後に“ など”とか付けたんだな」

そゆこと

「それにしてもまだ増えるのか!？」

当然!

「収拾つくのか……?」

やってみせるさ!

「さいで……」

ちなみに原作名はキャラが出てきたら書くのでご了承下さい

後、この小説についての感想やリクエスト、ここをこうした方が良
い事等を貰えると作者は非常に嬉しいです!

「……もはや催促してんじゃねーか」

……やっぱそう思う?

あ、後、感想ページを見るのは全部読み終わってからの方が良いと
思います

見たら後悔するかも……

「なんだその思わせぶり」

新規さんには一応……ね

「ま、お前の原動力になるのは確かだからな。気が向いたらで良い
ので書いてやって下さい」

よし!これで文字数は何とかなっただろう!

「確かに……初見の人に何?コレ?みたいな事を言われそうだしな
……」

でわ、ツカサ達の戦いを見守ってやって下さい……

第一章 始まり（前書き）

どうも、はじめまして、シャインと言います。

原作のゲームをやっていたらもっというんな世界のキャラを入れてみたかったので衝動的に書きました。

小説を書くのは初めてで、表現力やいろんなものが無い上にキャラの性格が壊れていたり、独自の解釈が多く、自己満足のための小説ですが

それでも読みたいと言う方だけ読んでください。

原作では主人公に名前が無い（自由に付ける）だったので自分が使っていた名前にしました。

あと、もし読んでこうしたら良いというコメントはもらえると、とても嬉しいです。

では、よろしくお願いします。

ちなみに原作名はキャラが出た時点で書くので、大体その辺で出ると考えてください

最初の方に書かれている作品ほど早く出てきます

第一章 始まり

第一章 始まり

俺の名前はツカサ、苗字は気にしないでほしい

幼馴染のキズナの突飛な行動で夜の学校に行こうとしている
しかしまさか……

あんな事に巻き込まれるとは思いもしなかった……

「遅い！何やってたの！」

こいつの名前は春日井 キズナ（かすがい きずな）
何の縁なのか俺の幼馴染である

「うるせえ、俺の勝手だろ」

夜中に呼び出されてイライラしてるんだからな

口調も悪くなるのも当然だ

「でもまあ、来てくれてよかった。と、言うわけで、学校に行こう！」

「断る」

「何で？」

「何でもだ」

さすがにこいつの行動を止めるように担任に言われている

こいつの突飛な行動は学校でも有名なほどだ

そしていつの間にか俺がこいつのお目付け役みたいなものになっている

しかし……

「そっか、じゃあれつつご」

「俺の話聞いてんのかお前は！」

このように人の話を聞こうともしない

「いごいごー！」

「手を引つ張んじゃねー!」

この行動癖が治るようにいつも天に願ってはいるのだが……
十年もかけて成果は零

あんまりだ……

「到着!」

目的の学校に着く

家から二十分ほどで着くのでなかなか助かっている

こいつがいない、もしくはこの癖が治ればもっといい生活を送れる
ような気がする

そして何のためらいもなくキズナが鍵を開けようとするが……疑問
が一つ

「……なあ、一つ質問だ、鍵はどっから調達したんだ?」

物凄い笑顔でこっちに振り向きこう言った

「禁則事項です♪」

「蹴り殺すぞ」

とりあえずいつもの反応をした

「じよ、じょーくですよ、じょーく」

「じゃあ何でだ?」

「うちのお父さん鍵屋やってるの知ってるよね」

「ああ」

「頼んだらちよちよいのちよいつて」

「OK、警察に行こうか」

携帯を取り出し番号を入力

よし、いつでもコールOKだ

「た、タンマタンマ!これにはひじょーに深いわけがあるんだよ」

「次、ふざけていたら、アレやるからな」

「真面目に答えます」

アレとは……いや、言わないでおく

世の中知らない事があった方がいい事もある

「よろしい」

「では……明日で休み終わりだよね」

「正確にはもう終わってるけどな、十二時過ぎてるし」

「宿題を全部教室においてきたのだ！」

その言葉から推測するに……

「宿題を取りに来たと」

「ざっつらいと！」

「……アホ」

「自覚してるもん！」

自覚してんだったら直せ

「……ハア、じゃあさっさと取りにいくぞ」

「おろ、いいの？」

「……今回だけだ」

「やたー！」

まったく、何だかんだで結局こいつの言う事を聞くのか
未だに俺は自分自身でも理解できない

「しかしまあ、夜の校舎内って雰囲気独特だな」

「そうだね」

「……」

「……あ、ツカサ」

「なんだ？」

「お化け怖い」

「……さっさと教室に行くか」

そんな音符マークが付きそうなほどの笑顔で言われたらどんな素人
でも嘘をついているとわかるわ

「ひどい」

そんな雑談をしていると教室についた

「本日二度目の到着！」

「じゃあさっさと入って……ん？」

「どしたの？」

「中に誰か…いる？」

「え、まさか、騙したいのは分かるけどそこまで酷い嘘に引っかかるキズナさんでは……」

「……じゃあ、ドアの隙間から見みな」

「？分かった」

そして言われた通りにキズナが目近づけたそこには

「この世界にいるのか、その“鍵”の一つは」

「ええ、間違いないわ」

「今更だがそれを集めて何をする？」

「それは私にもわからないわよ」

「なぜ協力を？」

「面白そうだからに決まっているじゃない」

「……」

黒いコートを着た人物が二人で話をしていた

「どうだ？」

「……ツ、ツカサ」

「そうだな、宿題は諦めて逃げるか……」

流石に俺もビビった

しかしばれなかったら大丈夫

そして元気よく方向転換した先に

「そんな事、できるならね」

さっきの黒ずくめの人物がいた

「な……！」

「悪いが話を聞かれたみたいだからな」

「ひ……！た、たすけてツカサ……」

「キ、キズナ！？」

後ろを振り向くともう一人の黒ずくめに捕まっていた

「あら、その子……」

「ああ、“鍵”のようだな」

「じゃあ、お願い」

「分かった……」

「な、何を言って……」

「帰還する」

「ツカサ！」

「キズナ！」

そして、その男とキズナは消えていった

「な……」

「さてっと、後は……このゴミの始末かしら」

ゾクリ、この時ほど背筋が凍ったことは無いと断言できるだろう

「じゃあ……死んで」

顔は見えなかったがそいつは絶対に笑っていた

恐い、恐い、恐い！

誰か助けてくれ！

「さようなら」

「！」

その黒コートがナイフを投げてきた

俺の人生もこれまでか……

母さん、父さん、先立つ不孝を許してくれ

キズナ、助けてやれなくてごめんな

そんな遺言を脳内で送っていたがいつまでたっても痛いという感覚

が襲ってこない

いくらなんでもおかしい

そう思って目を開けた

そこには

「悪いけど……この子を殺されるわけにはいかないわ」

大きな傘と扇子を持ったおばさ……

（ニコッ）

綺麗なお姉さんが目の前にいました

「あら、なんの用かしら？」

「今言ったでしょう、この子を殺させはしないわ」

「じゃあ一緒に死んでもらおうかしら……とと……」

黒コートは懷からケータイみたいなものを取り出した

「はいはい……ええ？すぐ？今良いとこなのに、残念」

するとそのケータイみたいなものを仕舞った

「じゃあ、失礼させてもらうわ」

「ちょ、ちょっと待て！」

「バイバイ」

そんな事を言った瞬間、その場から消えた

「……撤退してくれたみたいね」

「あの……あなたは一体？そしてあいつらは！？キズナは一体どうなったんだ！」

「説明している暇は生憎無いわ」

するとこつちを向いて真剣な顔でこう言った

「世界を……守って」

その言葉の後に自分の下に穴が開いた

「え？ええええええええええええ！？」

そのまま俺はそこに呆気無く飲み込まれていった

「お願いね……ツカサ」

第二章 ツカサの旅（前書き）

小説二話目です。

読んでくれている人はたぶんいないでしょうが……
自己満足のためのものなので仕方が無いと思います。
では、どうぞ

第二章 ツカサの旅

チュンチュンチュン……チチチ……

「う……うん……」

朝……なのか……？

俺は確か学校に行っていたはず……

夢か

「早く起きないと遅れるな……」

そうして起きてカーテンを開けようと窓に手を伸ばした
はずだった

「？」

いくら頑張ってもカーテンに手が届かない

ベッドから転げ落ちたのかと思い周りを見渡した

「……………」

部屋なんてものは無くただただ木が生えていた

「何じゃこりゃああああああ！？」

俺の絶叫は空しくこの森に響いただけだった

ここにいても何も始まらない

とりあえずこの森を抜けようと思った

こんなことになっても冷静な自分に少し驚いた

これもキズナの突飛な行動に慣れていたからだろう
しかし

「結構歩いたけど……出口が見えないな……」

いくら歩いても出口が見えない

同じような景色があるだけだ

「まったく……」

歩くだけでは何も解決できそうにないので一旦状況を考えてみる
キズナが謎の黒コートに捕まり

その黒コートに俺が殺されそうになった
しかし、謎の女性に助けてもらい助かった
そして説明も無くここに飛ばされた

「どんなゲームとか小説の世界だよ……」

しかしそれも事実だ

と、言っても信じたくは無い、が……

「キズナ……」

幼馴染が捕まった

大切なものは手から離れて初めて分かったと言うがその通りだった
何だかんだ言っても俺の大切な人の一人だったのだと

「ねえ、見える？」

「ああ、見えるよ」

ツカサが居る所からそう遠く離れていない場所からそんな会話が聞こえた

そこには旅人としては珍しい若い子供がいた

「でもさーこんなあやしい仕事良く受けたね」

「報酬が良いからね」

そして旅人は会話をしてはいるが、周りには誰もいない

「ほとんど説明もされていないの？」

「依頼って言うのはそういうものだよ」

「ふうん」

「……」

「まあ頑張っってね、いってらっしゃい」

「ああ、行ってくるよ」

「……」

キズナは一体どうなったんだ
生きているのか？それとも……

そんな事を考えてしまったが首を振って忘れる

あいつの事だ、何だかんだで生きているはず

「だったら、この状況を何とかしてあいつを助けなきゃな」

そこから移動しようとした時、何かを感じた

そして俺は反射的に後ろに下がった

下がった瞬間に空気を切り裂くような音がしてそれは来た

自分がさっきまでいたところに寸分の狂いもなく

「な、なんだ……？」

それを拾って見た

詳しくもないが知らなくても分かる

銃の弾丸だった

「……やりますね」

その人物はツカサを狙ったと思われるライフルを仕舞った

「狙撃はもう無理かな……」

余程鈍感な人物以外なら一度の狙撃で場所が割り当てられる

「………」

その人物はそこから移動しながら腰から銃を取りだした

「……しかし、何故だろう」

その人物は移動しながら言葉を呟いていた

「あの人……知っているような気がします」

「この方向から飛んできたと思うんだがな……」

飛んできた方向に向かって俺は移動していた

俺はこの狙撃をしてきた人物に接触しようと思っている

俺は黒コートの人物に殺されかけた

そして今、狙撃されていた

二度も殺されそうになる、それは俺が狙われているという事

つまり今俺を狙っている人物はあの黒コートと繋がりのある可能性が高いからだ

「ここだな……」

人が寝そべっていた跡があった

ここからライフルを使って俺を狙ったんだろう

「今思えば良く避けれたな、俺」

普通は狙撃されている事に気付かないまま弾丸を放たれ死ぬはずだ
そう、普通は

しかし、俺は避ける事が出来た

何故、そんな人間離れた事が出来たのか

頭の中で色々考えていた

自分の脳をフルに回転させ、思考していると

「……動かないでください」

不意にそんな声が聞こえた

このタイミングでこんな事を言う人物は一人しかいないだろう

「……あんたが俺を狙っていたのか？」

「そうです」

「……そっち向いてもいいか？」

「ええ、構いません」

そして俺は後ろを振り向き狙ってきた相手の顔を見て驚愕した

「な……!!」

「何ですか？ボクの顔に何か付いていますか？」

そこには俺がよく知っている人物がいた

「キ……キノ!？」

そう、俺も読んだ事のある小説の主人公がそこには立っていた

第二章 ツカサの旅（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

いやいや始まりましたよ、あとがき

「……何でこんな事始めたんだ？」

何となく

「……せいっ！」

グハッ！……痛いじゃん

「手加減はした」

これで？頭がパーになったらどうしてくれるの？

「もともとパーだろ、お前」

キャラが作者より上なの！？

「当たり前だろ、この前のテスト」

わーわー、聞こえない聞こえない

「……作者が壊れたのでこの説明を始めようと思う」

「ここは作者とキャラが無駄話をする場だな、簡単に説明すると」

「なんでも小説を書いたらやってみたいと思っていたそうだ」

「今までも話ができているのは俺だけのようだがな……」

聞こえない聞こえない……

「お前はいい加減戻ってこいよ！」

グハア……

あ……あとがき……劇場……終わり……ま……す（ガクッ）

「こんな奴だがよろしくお願いします」

第三章 記憶（前書き）

ようやく投稿できました……

研修旅行とか言う訳わからんもので三日も書けなかった……
内容も良くないと思いますが今回もよろしくお願いします

第三章 記憶

「……………」

「……………」

しまった……

冷静さを欠いていて気付かなかったがこっちが一方的に知っているだけだ

「……何故ボクの名前を？」

こんな時どう答えればいいんだ!?

君は本の主人公なんだ

こんなことを言ったら頭のおかしい人物だと思われるだろうだからと言ってこのまま黙っていても良い事は無いだろう
どうすれば良いんだろうか……

「……旅人の間で有名だからな」

嘘八百を並べてみた

これで納得してくれればいいが……

「嘘をつかないでください」

……やっぱり無理だったか

「何で分かった？」

「……でしたら目を反らさずこっちを向いて言ってくれませんか」
昔から苦手だったからな……

キズナにまでばれていたからな

「理由は言えない」

「……………そうですか」

「やっぱり俺を殺すのか」

「ええ」

キノらしい短い返事だった

「聞きたい事があるんだが、良いか？」

「拒否させてもらいます」

その言葉の後、またあの感覚が来た

反射的にその感覚から逃げるように動く。次の瞬間に
ドンッ！！

銃声が聞こえた

「……！」

少しだけ分かってきた

この感覚は自分の身に危険が迫ったとき感じるものだ

「油断していたわけではありませんが……まさか避けられるとは思
ってはいませんでした」

「……そいつはどうも」

立て続けに銃声が聞こえてきた

いくら来るのが分かっている、でも恐怖が無いわけではない

「クソ！」

「避けているだけではボクには勝てませんよ」

それは分かっている

ただ俺には戦う方法が無いに等しい

その辺の石や木の棒を使うぐらいしか思いつかない

キノの銃、カノンは威力が高いが弾の数が少なく、リロードにも時
間が掛かる

森の人と言う銃もあるが今は腰に差してあるはず

「あと二発……！」

カノンを森の人に持ちかえた瞬間が勝負か

木々の中を移動しながら数える

「あと1……」

「……」

「0！」

このタイミングで間から全力で石を投げ……

「油断しすぎです」

「え！？」

なめすぎていた、キノを

いや、自分がキノの言葉の通り油断していたのだろう

カノンを撃つと同時に森の人を取りだすという事を考えていなかった

「しまっ……」

「終わりです」

森の人から弾丸が発射された

避ける事が出来そうに無い

防ぐ

なにで？

石、棒、剣

剣？

剣

……………

次の瞬間頭が真っ白になった

「え？」

キノらしくない素っ頓狂な声で現実に戻ってきた

「は？」

そして俺も驚いた

それは驚くだろう

何故なら自分の手にいつの間にか巨大な剣が握られていたからだ

その剣が森の人から発射された弾を防いでいた

この剣の出現によりますます自分と言う人間が分からなくなってきた

そして混乱している俺にさらに追い打ちが来た

「ツ……ツカサ……さん!？」

キノがいきなり俺の名前を呼んだ

頭で処理しきれなくなった俺はそのまま意識を手放した

「う……うん……」

「起きましたか？」

「ああ……」

返事をして声の主を見るとキノがいた

「ッ！」

思わず身構える

「安心してください、貴方を狙う事はもう無いです」

「……信用して良いのか？」

「それは貴方が決める事です」

キノらしい返答だった

「しかし……会えるとは思っていませんでした」

「なあ、キノ」

「何ですか？」

一番の疑問をぶつけてみた

「なんで俺の事を知っているんだ？」

「……ボクの事を覚えていないのですか？」

「いや……知ってはいるんだけどな……」

説明が難しい上にキノ本人に会った覚えも無い

どうやって説明すれば良いんだろうか……

そう思った矢先、自分の近くに穴が開いた

「な……」

その穴には見覚えがあった

「ツカサさん、あれは何ですか？」

いきなり俺をキノのもとに送り込んだ穴

そして

「説明もなしに送り込んでごめんなさいね、ツカサ」

全ての元凶のババ（ニコッ）

お姉さんがそこから出てきた

……心を読むのをやめてほしい限りだ

「……説明をしてくれんだろうな、俺の事、敵の事、そしてキノとの関係性を」

「……ええ、でもその前に自己紹介をさせてもらおうわ、良い？」

「ああ」

「私の名前は八雲 紫、幻想境の妖怪よ」

第三章 記憶（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「ようやく俺以外のキャラが出てきたな、作者さんよ」

ようやくですよ……と言う訳で今回のゲストはキノです

「……どうも」

「なあ、なんでそんなテンション低いんだ？」

「この小説でボクが若干おかしい様な気がします」

まあ、仕方ないじゃん

「……キノ、諦めろ」

「確かにそうですね、この作者に求めるのが間違っていましたね」

……やっぱお前ら俺の事嫌いだろ

「それにしてもようやく始まったって感じだな」

「そうですね」

無視！？酷くないですか！？

「しかし、風呂敷がどんどん広がっているような気がするが大丈夫なのか？」

……

「隅っこに行きましたね」

「いつもの事だ」

「そうですね、ボク達だけで進めますか」

「ああ、キャラは今の所少ないが作者の予定では増えていくらしいぞ」

「しかし百％作者の趣味で決めるらしいですので注意してください」

「今度はいつ投稿するか分からないが待っててくれ」

「それではまた今度会いましょう」

「「ありがとうございます」」

第四章 説明（前書き）

相変わらずどんどん意味が分からなく……

しかしこれでやめる自分ではありません

頑張っ続けていきます！

それでは、どうぞ

（あとがきを知る人は分かるネタがあります。読むときは注意してください）

第四章 説明

「妖怪、ね……」

「あら、驚かないの？」

「今更妖怪ごときで驚いてどうしろと。今まで散々な事があったんだからな」

「それもそうね」

紫は小さくほほ笑んだ

しかしその笑みもすぐに消え、説明を続けた

「まずは……貴方について話そうかしら、ツカサ」

「そうしてくれるとありがたいな」

とにかく今は自分を知りたかった

自分の事が分からないというのは怖いものだと思った

「簡単に説明させてもらうわ」

そしてどんな言葉が紡がれるのかと思ひながら聞いていた

「貴方は世界を救ったのよ」

………はい？

「すいません紫さん、もう一回言ってくれませんか？」

「だから貴方は世界を救ったのよ」

……俺がいつ世界を救ったんだ！？

また頭が回らなくなった

「ちょっと待って下さい」

キノが話に割り込んできた

「何故貴方がその事を知っているんですか？」

そしてまた混乱する様な言葉を放った

「私は色々な場所に行く事が出来るからよ」

「では……見ていたのですか？」

「中々面白かったわよ、貴方達の戦い♪」

「………」

「……紫さん」

「何？」

とりあえず単刀直入に聞こう

「世界を救った覚えは無いんだが……本当なのか？」
すると、また変な返答が返ってきた

「貴方ではない貴方が世界を救ったのよ」

「……どう言うことだ？」

「貴方はその戦いの後、今、貴方のいた世界に生まれ変わったのよ」
少しだけ分かってきた

「俺の……前世？」

「そう言う事」

紫さんは俺について説明してくれた
世界を行き来し

仲間とともに世界を救いつつ

絶夢と言う存在と戦ってきた事を

「なるほど」

「まあ話にも出てきたけど其処にいる彼女も一緒に戦っていたのよ」

「そうか……悪かったな、キノ」

「いえ、仕方無いですよ、それを見るまでボクも貴方の事を忘れて
いたのですから」

それ？この大剣の事か？

「そうですね、それが貴方のトレードマークみたいな物でしたから」

「でも、記憶は消えていた筈じゃ無いのか？」

そうだ、俺の元々いた世界は消えてその世界での記憶は消えるはず

「記憶を無くしても心は覚えている」

「紫さん？」

「本当に大切なことはね、どんな事があっても忘れないものよ」

「……俺も思い出せるのか？」

「そう遠くないと私は思うわ」

出来るなら早く戻ってきて欲しいと思う

自分を深く知るために

「じゃあ次、敵の事について教えるわ」

一呼吸置いて始めた

「貴方の幼馴染をさらった彼らの名前はミストと言う集まりよ」

「ミスト？」

「仮の名前だけどね」

私が付けさせて貰ったわ、と続けた

「どうして霧と言う名前に？」

「ボスの名前も不明、そのメンバーの数も不明だからよ」

「前、俺を襲った奴らは？」

「私も初めて会ったわ」

敵に関する情報は意外と少ないらしい

「でも、何をやろうとしているのか、それは分かったわ」

「前のように物語を改ざんしてしまう事ですか？」

「平たく言えばそうね」

困ったような顔をした

「じゃあ改ざんを止めればいいのか？」

「それもあるけど」

「何だ？」

「物語の種を集めて欲しいの」

「種？」

言われてもピンとは来なかった

「……世界の根源を集める事にどんな意味があるんですか？」

なるほど、根源、だから種か

「相手の出方が分からない以上、その世界を一度封印させてもらわ」

「封印、ですか」

「正確には世界を種の中に入れてしまうのよ、こうするとその世界が狙われる事は無くなるわ」

「なるほど」

俺は軽く頷いた

まあ、これで大体の事は分かった

そして俺は本題を聞いた

「キズナは一体何なんだ？」

キズナについて、だ

奴らは鍵、とか言っていたが

「キズナさんがどうかしたのですか？」

「さらわれた、奴らに」

「……そう、ですか」

「過ぎた事を気にしても仕方ない、今は話を聞こう」

「……ええ」

良いかしら？と話を再開した

「その事もあまり分かっているのよ、でも……」

「でも？」

「鍵を奴らに集めさせてはいけないのは絶対ね」

それはそうだ

奴らにとっては重要なもののだとは考えるのは簡単だ

集めさせてもロクな事には使わないだろう

そして結論を述べさせて貰った

「……情報少くないか？」

「……」

紫さんが明後日の方向を見ていた

「奴らの情報は分かったら貴方達に伝えるところで……」

「おい！」

「では、さよなら」

「待てよ！」

そう言い残すと穴をあけそこに入って行ってしまった

「……逃げた」

「そうですね」

二人でそこに立っていると足元に手紙と謎の物体が置いてあった

「……破りたいんだが」

「我慢して読みましょう」

そして衝動を抑えつつ手紙を読み始めた

『忘れていたので手紙で伝えるわ。種を見つけたらその水晶を使って元の貴方の世界に戻ってきてね。貴方の世界を私の結界で囲む事によって安全な場所にするのと、私がここから貴方達を世界に送るようにするからよ。中心になるような場所を作っておけば行き来も楽になるし、私もそこに結界を集中させやすいからよ。私は貴方達の手伝いしかできないけれど……お願い』

「……何だかよくわからない人ですね」

「ああ、そうだな」

彼女が一体何を考えているのか分からないが、悪い人ではない俺の直感がそう伝えた

「では種を探しますか？」

「そうだな、まずはキノの世界の種だな」

「ええ」

少しずつでも良い

奴らを倒してキズナを助け出す

待ってろよ、キズナ

ここはとある世界

ツカサを襲った黒コートと誰かが会話をしている

「あゝあ、せっかく良い所だったのに何で呼び出しをしたのよ」

『予定が狂い始めている、“鍵”を早急に見つけて確保しろ』

「ふーん、その予定って言葉が気になるけどまあ良いわ」

『その事は他のメンバーにも伝えろ』

「はいはい、分かりましたよ」

では、失礼しまゝす、と言葉を残して黒コートは消えた

『……創作物が…俺の邪魔立てをするな……！』

同時刻、会話があった所から少し離れたところにて

「見つかったか!？」

「いや!そっちは!？」

「こっちにもいないぞ!」

兵士らしき人物たちが慌てふためいていた

どうやら誰かを探しているらしい

「一体どこに……」

「ここだ」

「「「え……」」」

次の瞬間三人は真っ二つに一閃された

「……遅くなるだろうが絶対に助ける、それまで待っていてくれ」

黒コートを着た人物は光り輝く剣を懷に仕舞いその場から消えた

「ちょっと待って下さい」

「何だ？」

「二枚目があります」

二枚目？

まあ見えなかったんだろう

「読みあげてくれないか？」

「はい、『P・Sその世界の種は私が回収しておいたから帰ってきても大丈夫よ♪』だそうです」

俺はすぐさま手紙を破り捨てた

「それを先に言えーーーーー!」

俺の叫びは森の端にまで響いたらしい

第四章 説明（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

ヒヤッホウ！イヤッハ〜！

「作者がいきなり訳わからんテンションで申し訳ないが説明させてもらうと……」

イイイイイイイイイヤッホウ！

「こんな駄文でも読んでくれる人がいたかららしいぞ。俺も少しうれしい」

「少ないけれどやっぱり読者がいてこそその小説よ」

「あ、今回のゲストの紫さんだ」

「今更の説明ありがとうね、そして……」

ウイイイイイイイイイイイイイイイイ！

「うるさいから彼、移動させるわ」

ハッハッハッハ？アアアアアアアアアア……

「ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして」

「そして物語の事についてなんですけど……これ大丈夫なんでしょうかね」

「さあ？何とかするでしょう。それより……」

「それより？」

「私もキノ同様に変わらないかしら？」

「前も言いましたがこの作者に求めるな、って事です」

「そうね」

「ちなみに作者、キノは原作も持っているのに東方に関してはネットの中途半端な知識だけらしいぞ」

「かなりの冒険ね」

「良くやるよ」

「そしてあの黒コートは……」

「一応原作があるキャラだそうだ。作者の書き方で分かった人は天才すぎると思われれます。ちなみに某王国心とは関係ないそうだ」

「そうなの。じゃあ私は情報収集に戻るわね」

「これって本編とつながってんの!？」

「細かい事は気にしない、気にしない♪」

「本当に帰ったよ、あの人」

そしてこれからの事です

「うおお!？どうやって脱出した!？」

気合い？

「気合いであそこから脱出できたら今頃気合いで地球温暖化解決できわ！」

話を戻すけどさ

「もう疲れた」

俺の嫁出します!

「…………へへ」

反応冷たっ!別に良いじゃん!出したって!

「まあ、頑張れば良いんじゃないのか？」

うん、頑張る

「ちなみに出す予定は？」

九章位に

「丸分かりだな、それ」

分かんないって!大丈夫、大丈夫!

「……まあ良いか、それではこの辺で終わりにしようか、作者」

そだな、投稿が何時になるか分かりませんがまた会いましょう

「ありがとうございました」

第五章 帰還（前書き）

ネタというかなんと言いますか……

とりあえずごちやごちやした事はあとがきで書きます
では、どうぞ

第五章 帰還

「お帰りなさい♪」

「ああ、帰ってきたよ！」

「あらあら、かなり怒っているわね」

「これが怒らずにいられるか！」

「落ち着いてください、ツカサさん」

「つく！」

ただいま俺たちは俺がいた世界に帰ってきている

あの水晶には帰ってくるための力以外は無く、一方通行の移動手段らしいからだ

「紫さん、貴方が回収したと言っていた種を見せてはくれませんか？」

キノがそんな言葉を口にした

確かに、集める俺たちが形状などを知っていなければ意味がない

「ええ、そのつもりよ」

そして懷からそれを出した

それは言葉では表現できないものだった

簡単に説明すると

それ自体はただの水晶みたいなものだ

しかし見つめていると途端に分からなくなる

喜び

悲しみ

怒り

楽しみ

色々な感情が一気に流れ込んできて自分が今何を考えているのか分からなくなってくる
そんなものだ

「う……気持ち悪い……」

「……」

キノも顔には出してはいないがあまり気分は良くないらしい

「物語の全てが結晶のようなものに形を為しているのよ。見ているとその世界での出来事が一気に頭の中に入ってくるようなものね」だから、と紫さんは続けた

「長く見る事はあまりお勧めしないわ」

と、種を仕舞ってくれた

この事はとてもありがたかった

もしこのまま見つめていたら自分の事が分からなくなっていただろう

「形は分かった。そしてこれを見つける目印のようなものはあるか？」

それを聞くと紫さんは少し苦い顔をした

「……目印、そんなものはないと思うわ」

「どうしてですか？」

「世界によって種の形は違うのよ。結晶は分かりやすい例ね」

「なるほど」

つまり、ほとんど自力と変わらないってことか

「そう言うことになりますね」

「……貴方達にはとても大変なことを押し付けて申し訳ないと思っているわ」

「いや、紫さんも良くやっていると俺は思うよ」

「そうですね、貴方がいなければ世界の崩壊はもっと早くなっていたかもしれませんし」

「……そう言ってくれると嬉しいわ」

「……一つ聞いても良いですか？」

「ええ」

俺はここで一番気になっていた事を聞いてみた
色々あったから聞く機会が無かったしな

「紫さんの世界は……一体どうなったんですか？」

ここで彼女は悲しい顔をしながら答えてくれた

「……最初に奴らに攻められたわ」

「な……！」

「……………」

俺とキノは絶句した

「私たちの世界、幻想境と呼ばれていたのだけど……奴らはこの世界が一番厄介だと思ったのでしょうね。私たちはそれに対抗する準備ができていなかったのよ」

「じゃあ、紫さんの世界はすでに……種を回収する間もなく……？」

「少し語弊があったかもね。正確には種は回収できたのよ。でも……」

そこからさらに顔が暗くなりこう続けた

「うまく封印できなかったせいで……私の友人や住民たちは違う世界に飛ばされたのよ……」

俺はこの言葉を聞いて思った事を口にした

「……その住民は強い奴らか？」

「……ええ、そこの奴らよりはよっぽどね」

「でしたら問題は無いと思います」

簡単な事だ

その住民たちが強いのならこれで解決する

「種を探すついでにそいつらも探せば良い話だろ？」

「……………」ありがとう

「こっちも十分に貴方に助けられています」

「これで貸し借り無しみたいなもんだろ」

そして俺たちはしばらくの間笑っていた

「ううん……」

暗い部屋の中でキズナは目を覚ました

「およ、ここは何処かな？」

動き回って部屋を散策するキズナ

「さっきの黒コートさんに捕まってこの部屋に入れられたのかな？」

「それで間違いないわ」

キズナがその声に振り向くと金髪で髪を一つにまとめている少女がいた

「あなたは誰？」

「私の名前はシエルよ」

「私はキズナだよ」

二人の簡単な自己紹介が終わる

「シエルさんはどうしてここに居るの？」

「貴方と同じ、黒いコートを被った人物に連れてこられたの」

「ふん」

「……………」

「……………」

沈黙を破るようにキズナが話し始めた

「私たちはどうして連れてこられたのかな？」

「分からないわ」

「そうなの？」

「でも今このデータベースにハッキングをしてデータを入手しているの」

「すごい事できるんだね」

「入手ができたデータを分析すれば少し情報がつかめるからね」

「頑張ってるね！」

「ええ」

二人は意外と冷静だった

何故なら彼女たちには自分を助けてくれると信じている人物がいるからであった

「そう言えば」

ポンッ、と紫さんが手を叩いた

「貴女の世界の住民で腕が立ちそうな人とか勝手に連れてきたわ」

「そうですか」

「良かったら次の世界に行く前に話してみたらどうかしら？」

「そうですね、会っておこうかと思います」

「じゃあ私はあっちに居るから準備ができたら声をかけてね」
そう言うのと紫さんは歩いて行った

「キノの知り合いで腕の立つ人、か」

考えても一人ぐらいしか思いつかなかった

「またすごい事に巻き込まれてしまったね」

ほほ笑いながらそう話してくるシズさん

「そうですね、それにしてもこんな所で再開するとは思いませんでした」

「ああ、そうだね。そして君は……」

「お久しぶり、と言えぱいいですかね？」

「そうだね」

「そしてお前も久しぶりで良いのかな、陸」
俺は目の前にいた犬に話しかける

「そうですね、お久しぶりです、ツカサさん」

「できれば会うことが無いままの方が良かったんだけどな」

「確かにそうですが仕方のない事でしょう」

「そうだな」

そんな再開を喜んでいるのか分からないが話をしていた
ちなみにキノなんだが……

さつきから陸に抱きつきながら話している

シズさんが不憫だ

そして話こそしていないがエルメスもここに居る
……寝てる

「では、そろそろ行きます」

「もう行くのかい？」

「ええ、時間もそんなに長くは無いと思うので」

「そうか……頑張れ。留守は私たちに任せて」

「いつてらっしゃいませ」

二人(?)に見送られながら紫さんのもとへ俺たちは歩き始めた

第五章 帰還（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

すいませんでしたあああああ！

「いきなりどうした作者」

いえあのですね、話を広げすぎたせいで会話をどうしようか悩んでいたら……

「こんな文ができてしまった、と」

ええ：話についてきてくれている人は天才だと思います、はい

「じゃあゲスト呼びます。今回のゲストは……」

「ツカサの幼馴染ことキズナちゃんです！」

「ちよっと待て作者！」

何？

「捕まってるんじゃないのか！？」

ここでは常識は通用しないぜ！

「細かい事は気にしない、気にしない」

「気にしようよ！」

と、言う訳で進めて行こうと思います

「お〜」

「……………」

実は話に詰まっています

「それは分かるよ。だって今回今までで一番変だって自分でも思っているんですよ？」

はい……しかあああああし！

「うお！ビビった！何、何なの作者！？」

すごい先の事になると思うのですが……頭の中ではいくつかのバトルシーンとか色々な事が考えてあります！

「ほうほう、それは面白そうだね〜」

……それを何時放出しようかが悩みどころなんだよね

「ガンバ！」

伏字で書かせてもらおうと……

○○ ○○対○○○○ ○○とか

「なるほど」

そんなこんなでかなり遅く更新されつつあるこの小説ですが読んでくれている人には感謝してもしきれません

「アクセス数が多くなってきたら何か記念にやるかも、とも言っています」

ちょ、勝手に決めないで……

「あと、作者が知っていたらですがキャラの希望があれば出すとの事です」

待って！どんどん辛くしないで！それじゃ俺死んじゃうよ！

「じゃあしゃべりたい事しゃべったんで私帰りまゝす」

……

「……頑張れ」

うん………ありがとう

「作者がいじけ始めたのでここらへんで終わります」

ありがとうございます……

「流石に同情するよ……」

第六章 科学と魔術（前書き）

……積もる話はあとがきにて話します
では、どうぞ

第六章 科学と魔術

「来たわね」

「ああ、次は何処に行くんだ？」

「次は科学と魔術の世界に行ってもらおうわ」

「禁書目録の世界か……」

いきなりヤバそうな世界だな

「そこでボク達は何をすればいいのですか？」

「そうね……インデックスを保護してもらえるかしら」

何でインデックスを？

「私の勘なんだけどね、彼女は狙われそうな気がするのよ」

「狙われる、か」

何となくわかる気がする

十万三千冊もの魔導書の知識があれば奴らに狙われてもおかしくは無い

「準備は良いかしら？」

「良いぞ」

キノは首を振って返事をした

「では……いつてらっしゃい♪」

「！まさか！？」

「どうしました？」

キノは気付かなくても仕方ない！

この言葉の後、俺は……

「やっぱりかああああ！」

下に落とされたのだったよな

今頃思い出しても遅いか

とりあえず

「紫さんのバカヤロー！」

捨て台詞(?)を吐きながら穴に引き込まれて行った

「……………」

「どうかなさいましたか、シズ様」

「……少し用を足しに行ってくるよ」

「分かりました」

そしてトイレへ向かったシズ

「にしても王子様、この世界に来ていきなりトイレに入るってどうしたんだろう。便秘かな」

「黙れポンコツ、私たちは主人の帰りを待てばいいのだ」

「うるさいスケベ犬、いちいち突っかかってくんない」

「……………」

「……………」

二人(?)は言い争いを始めた

止める人物も居らずエスカレートしていく

このシズの行動がどうなるのかも知らずに……

出口が見えてきた、そして俺は

「へぶっ！」

地面に見事なキスをしてしまった……

痛い……

「とと………」

キノは見事に着地

まあこれが経験とかの差なんだろうな

「大丈夫ですか？」

「何とかな………」

そして周りを見渡してキノが呟く

「着きましたね」

「ああ」

ここが禁書目録の世界か……

「とりあえず移動するか」

「そうですね」

俺たちは街の中を歩いていた

「しかし、一体どこに行けば居るんでしょうか？」

「多分すぐに手掛かりが見つかると思う」

「何ですか？」

「勘」

昔から俺の勘は良く当たっていた

このまま歩き続けた

そして次の角を曲がろうとした時

「ギャアアアア！助けてくれー！」

「今度こそ逃がさないわ！」

見たことがあるような二人が走って目の前を通り過ぎた

「……なあ、キノ」

「はい」

「当たったな、勘」

「そうですね」

俺達もその追いかけてここに参加させて貰った

「待てー！ー！」

「待てと言われて待つバカが何処に居るんだ！」

結構な時間走り続けているが終わりそうな気配が無い

「なあ、何時まで続くんだ、これ？」

「……分かりません」

キノも流石に辛くなってきたようだ

俺に至っては限界に近い

「待ちなさいってば！」

と、彼女が電撃を放つ

「うおっ！危ねえ！」

すかさず右手で消す彼

これ而走りながら何セット続いた事か……

「そろそろ終わって欲しいものですね……」

「まったくだ……」

「あー！何でいつも当たらないのよ！」

向こうもそろそろイライラがピークに達してきたみたいだ
懐からいくつかコインを取り出して……

「ヤバくないか、これ」

そんな事を俺が口にした途端

彼女の超電磁砲が炸裂した

……周りの住民は大丈夫なのだろうか

「ちっ！また逃がしたみたいね……」

煙が晴れるとそこには彼女しかいなかった
超電磁砲に紛れて逃げたみたいだな

「次こそ必ず……」

そんな事を言いながら彼女は去って行った

「ようやく終わった……」

「そうですね」

体力は限界だがそうも言ってはいられん

「探すか、まだ近くに居ると思うしな」

「ええ」

その時ふと思った

「なあ、キノ」

「何ですか？」

「この世界じゃその格好目立たないか？」

「確かにそうですね……」

そう、キノの服装の事である

俺は制服だからまだ変に目に留まる事は無いはず
しかしキノの格好はどうしても目立ってしまう

「まあ、この事は後で紫さんにでも相談するか」

「そうですね」

これも大事なことだがそれよりも今はインデックスの保護が先だ、
と思う

とりあえず後に回して探すのを再開した

「そして今に至る訳か……」

彼、上条 当麻に今までの事を話した
しかし……

「それにしても久しぶりだな、ツカサ、キノ」

「何で俺たちの事覚えていたんだ？」

キノですら俺の剣を見るまで忘れていたのに彼は覚えていたのだ

「断言はできないけどな……」

そう言いながら右手を動かした

「俺の幻想殺しの力の所為だと思う」

「なるほど」

まさか世界改変の力まで打ち消すとは……

相変わらず無茶苦茶な力だ

「で、インデックスが狙われているから保護をしたい、って事で良
いのか？」

「ああ」

「とりあえず俺の家に行くか、ついでだから飯も食べていけよ」

「もうそんな時間か」

時計を見ると一時を過ぎていた

「ごちそうになります」

「良いつて良いつて」

「「……………」」

今、当麻の部屋の玄関の前にいる
いるのだが……

「なあ、当麻……」

「何だ……」

「ドアの向こうから凄い殺気が来てるんだが……」

「このドアの内側に誰がいるんですか？ 貴方の家には殺し屋が普通に居るのですか？」

「……開けたくねえ」

そう言いたくなるのも頷ける

怖い一言に尽きる

「……た、ただいま」

意を決したのか当麻はドアを開けた

「お~~~~そ~~~~い~~~~……」

玄関の前で座っていたその人物が恨めしそうな声で言った

「いや、待てインデックス、これには色々あったんだって……」

「言い訳は聞きたくないよ！」

そしてダイブ、当麻におんぶ、そして……

「ギャアアアアアア！」

噛みついた

空腹って人を狂わせるんだな〜とここで俺は学んだ

横を見るとキノは若干顔が引きつっている様にも見えなくは無い

とりあえず保護対象は発見

しかし……

「不幸だ~~~~~！」

まず目の前の事が収束しないといけないらしい……

当麻、不幸なのはお前だけじゃ無いぞ……

第六章 科学と魔術（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「さあ、説明してもらおうか、作者」

……ナンノコトデショウカ

「な・ん・で、こんなに遅れたんだ！今は時間がたっぷり有るんじゃないのか！？」

話す話す！だからその手に持っているものを仕舞って！

「ハア……で？」

前の時キズナが言ってた事……

「あれか？キャラの募集みたいな奴」

それ……

「あれがどうかしたのか？」

早速感想に書いてあったから作者は頑張った

「ああ」

本屋に行って読んでいた

「ほう」

結構面白くて長い時間読んだ

「……」

そして家に帰る、課題が、課題が、課題ガガガガガ

「……駄目人間」

うるさい！

「ハア……でもそれだけなのか？」

うんにゃ、まだある

「……」

怖いから手に持っているものを仕舞ってね、頼むから

「……結局何なんだ？」

いや、この第六章を書いていてふと思ったんだ

「何を？」

なんか変な所あるなって

「いつも変だろ」

黙らっしゃい！

「ヘイヘイ」

で、最初から全部書き直した、結局良くなったかは分からないけど

「意味あんのか、その書き直し」

俺的にはあった

「そうか……こんな事があったらしいです。読者の皆様」

すみませんでした

「アイディアもあまり浮かんで来なくなってきたらしいですが、次の投稿を楽しみにしてください」

それではまた次回で！

「あれ？俺の出番は？」

あ、上条さん、居たんだ

「当麻、何時からここに？」

「最初からここに居たわ！作者がゲストで呼ぶとか何とか言ってたから！」

「……作者」

上条さん、ドンマイ

「不幸だーーーーー！」

第七章 探索（前書き）

今回は微妙に短いです
そして相変わらず読みにくいと思います……
では、どうぞ

第七章 探索

「で、この人たちは誰なの、とうま？ おかわり」

噛みつき事件も収束し、今はご飯をごちそうになっている

「昔の知り合いだ、ホイ」

一人暮らしが長い所為か意外とおいしい

「彼女もしばらくしたら思い出すでしょう。すみません、おかわりを」

「そうだな……気長に待つか。ホイ」

「思い出すってどういう意味？ おかわり」

「今は深く考えんな。ホイ」

キノは剣を見せたらすぐに思い出したようだが彼女はすぐには思い出せなかった

まあ、記憶が無くても問題は無いけどな

「しかし……世界改変を起こす、か……」

「前より規模はでかいけどな」

「大変な事だなそれは……」

「今は改変を防ぐことに集中しといた方が良いみたいだからな」

「狙いが分かれば良いのですが……すみません、おかわりを」

「ま、何とかなるだろ。前もそうだったからな。ホイ」

「話がぜんぜん分からないよ、とうま……おかわり」

「機嫌を悪くするなよ、インデックス。ホイ」

「とりあえず目的の一つは達成しました。後は種を探すだけですネ、ツカサさん。すみません、おかわりを」

種、か

一体どこにあるんだろうな

この世界にいる人でも分からないものを探す

どんな難しい宝探した

「種ねえ……良かったら手伝っても良いか？ ホイ」

「良いのか？」

「こんな時ぐらい手伝っても悪くは無いだろ？」

「すまん、ありがとうな」

まあ、人手が増えても見つかる確率は変わらないと思う

しかし、地理的知識が無いので当麻のこの提案はありがたい

「とうま、また出かけるの？おかわり」

「そうなるな。ホイ」

「でもインデックスさんはどうします？すみません、おかわりを」

「狙われているかどうか分からない以上置いて行くのは危険だな…

…ホイ

「連れていくのか？おかわり」

「まあ、そうなるな。ホイ」

「ご飯を食べた後は動くのは嫌だよ、とうま。おかわり」

「狙われている可能性があるのにのんびりしてるなインデックスさ

んよ…ホイ」

「しかも動かないと太るぞ。おかわり」

「そうですね。すみません、おかわりを」

「う…それはそうだけど…とうま…おかわり——」

「と言うかお前らは家の食料を根こそぎ持っていく気か!？」

当麻がいきなり怒り始めた

俺は少しからかっていたが二人は別らしい

「とうまが遅いのが悪いんだもん!おながが減って死にそうだったんだから!」

「だからと言って家の家計の事情を考えないで食うのはやめろ!そしてキノさん!」

「何ですか？」

「貴方は何杯目ですか!？そのご飯は!」

「すみません、覚えていないです。ごちそうになる時は遠慮をしないもので」

「……………」

当麻は口から魂が出てきそうな勢いで顔が真っ白になっていった
それにしても……良く食うなこの二人
チャレンジメニューとか軽くいけそうだな、と思いつつ当麻を放置
して三人で食事を続けた

食事を終えた俺たちはとりあえず町の探索をしていた

「しかし……情景だけを見ると俺の世界とあまり変わらないな」

「ま、超能力とかは目に見えるものじゃ無いからな」

「そうだな」

ただ……

「当麻、前に居るこの変な生き物は異常だと思っていいいか？」

「良いと思うぞ」

そう、俺たちの前にはやる気が無さそうな目をし、後ろから羽が生え、お腹の方にポーチミたいなものをぶら下げた此処とは不釣り合いな変なペンギンが居た

「お前がツカサで間違いないッスか？」

しかも喋った

なんだこの生物は

「ああ、そうだ」

そう俺が答えるとペンギンはどこかへ走り去っていった

「何だったんだ？」

「さあ？でも……」

「でも？」

「悪い事が起きそうな気がする」

「気がするじゃ無くて起きると俺は思う」

「でも、かわいかったよ。とうま」

あれがかわいい……ねえ……

この子は少し美的センスがずれているのかな
と、思っていたら

「分からないでも無いですね」

キノもかわいいと思ったらしい

……女って分かんないな

「とりあえず、此処には無いみたいだから移動して——」

「ちょっと待つッス！」

あのペンギンが帰ってきた

しかも数が増えている

「何の用だ？」

「あんたを抹殺しろって言われたッス！」

そのうちの一匹がそう言ってきた

ミスト繋がりか？

どうにかして情報を聞き出せば良いが……

難しいだろうな

「此処で死ぬのは御免だから抵抗はさせてもらおう」

剣を出して構える

「俺の友人を殺すとか軽く言わないでほしいな」

当麻が横でそんな事を言っていた

一触即発の空気

今、戦いの火蓋が切られ——

「……少し良いですか？」

ちよっとシリアスな感じになってきたところでキノが話に割って入

ってきた

「何だキノ？折角いいムードだったのに」

「すみません、しかしどうしても聞きたい事がありました」

「早くしろよ」

そう言って俺たちはお預けを食らった

「ペンギンさん」

「俺たちの名前はプリニーツス！」

あのペンギン、プリニーって名前だったのか

別にどうでもいいが

「すみません、ではプリニーさん」

「何ッスか？」

「貴方達はツカサさんを殺しに来たのですよね」
「そうッス！」

「では、何故狙撃をするとか不意打ちをする等をしなかったのですか？」

「「「「！！！！！！！！！」」」」

……………確かに

キノも最初俺を狙撃してきた
殺す、という行為で済むのであればわざわざ殺しに来ました」と言
いに来る必要性が無い

そんな事するのは余裕で始末できるという強者か、もしくは…………

「……………バカ？」

インデックスさんが代わりに言ってくれました

「俺もバカだと思う。強そうには見えないからな」

「当麻、お前もそう思ったか」

そして向こうのプリニー達と言えば…………

（どうするッスか！？）

（どうするもこうするもやるしか無いッス！）

（しかし、多分向こうは凄い腕前ッスよ！）

（不意打ちとか思いつかなかったッス！）

（力は多分無いだろうから大丈夫ッス！）

（お前の根拠は当てになった事が無いッスよ！）

何だか頭の悪そうな会話をしていた
パン！

「「「「「！！！！！！！！」」」」」

「早く質問に答えてくれませんか？」

「こ、答えるわけ無いッス！」

「何故ですか？」

「それはあんた達を此処で始末するからッス！」

そしてポーチミたいな物から二振りの剣を取り出し臨戦態勢に入った

「何か気が抜けたけどやっぱ戦うのか……」

「そうみたいだな……」

俺と当麻はやる気がかなり無いまま戦闘が始まった

第七章 探索（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

今回は自分なりに笑わせようと努力しました

「その結果、こうなったと」

何だかどんどん退化している気がする

「せめて現状維持にしてくれ……」

と、言う訳で今回のゲストは……

「前回に引き続き俺、上条 当麻と」

「インデックスだよ」

「人数が増えてきたな」

まあ、話が進んでいるって事だよ

「早速だが作者、俺とインデックスってこんなキャラか？」

作者的解釈

「今回のキノのキャラは？」

作者的解しゃパンツ！

「スキマから射出された弾丸により作者が撃たれました」

「とうま、何でわたしの目を防ぐの？」

「見ない方が良いからだ」

「作者が死んでいるので俺達で進めまゝす」

「「お」」

「作者、此処で出すキャラを考えていたらしい」

「悩んだ結果プリニーになったと」

「ああ」

「って事は他のデイスガイアのキャラも出るのか？」

「作者はしたいと思っているらしいが、作者は2しかプレイした事が無いらしい」

「そうなの？」

「ああ」

「出せるキャラが限られそうだな」

「それが作者の心配事らしい」

「まあ、作者の事は知ったこっちゃ無いけどな」

「自業自得だな」

「そろそろ終わった方がいいと思うよ？」

「そうだな、ではこれであとがきを終わります」

「」「ありがとうございました」「」

「なあ作者」

何？

「俺と当麻の喋り方似てて訳わかんなくなる人多くいそうな気がするんだが……」

……しまった

「考えなしかお前は！」

ギャア！

「少しは考えて書け……」

第八章 目的（前書き）

書いていて思ったけど

サブタイトルはあまり関係ない様な気がする……

難しいな考えるのって……

第八章 目的

「どうしてこうなった……」

俺の目の前にはプリニーとか言うペンギンが丸焦げで倒れていた
そして巻き込まれるように当麻が倒れていた

説明するのも馬鹿げているような気がするが……

この現場だけを見て分かる人物はそうそういないような気がする
簡単にだがこうなった経緯を説明しようと思う

説明スタート

「アホ面してんのに意外と強え!？」

「プリニーをなめるなッス！」

「当麻！」

「「よそ見はいけないッス！」」

「つく！」

予想以上に苦戦している

まあ、当麻は魔法だとかそう言うものに対しては強いけど基本肉弾戦
俺もほとんど戦闘は初めてなので有効打はキノの射撃くらいだ

「ツカサさん！」

俺に襲いかかっていたプリニー達をキノが撃ち落とす
助けられっぱなしだ

「サンキュ、助かった……」

「いえ、しかし……分が悪いですね」

キノの銃も強力な事は強力だがそれも対人戦
決定打とはならない

まして数も3対5

逃げながら戦えばまだ勝機はあるだろうが……

「？」

インデックスが居るのでそうにもいかない

「どうしたッスか？それで終わりッスか？」

笑ってんのかどうか判別は出来ないが挑発してくるようになってきた俺たちの方が弱いと言わんばかりに

「クソ！」

このままじゃ数や体力的な関係でじわじわと追い詰められるだろうキノのカノンも後数発だろう

ここからどうすれば……

「ごちゃごちゃ考えてても仕方ねー」

「当麻？」

「俺が隙を作ってみる」

「な……お前！」

「心配すんな、俺なら大丈夫だ」

そんな言葉を残して当麻は単騎プリニー達に突撃した

そしてそのうち一匹を捕まえた

「な、何ッスか！？」

「問答無用！」

そして当麻はプリニーをそのまま一本背負いにし、地面に叩きつけた

「「「あ……………」」」」

投げられた奴以外がそんな声を出した

「よっしゃあ！ツカサ！このままこいつを——」

その言葉が聞こえた瞬間

プリニーが爆発した

「とても仕組みが気になりますね」

爆発現場を見てキノはそう言った

まあ、生きて動いているものがいきなり爆発するなんて思わないもんな

しかもかなり凄い爆発だ

これでクレーターとかが出来ていないから不思議だ

「どうまゝ？」

インデックスは当麻を指先で触っている

こんな爆発に巻き込まれて当麻は生きているのか？

「…………し、死ぬ」

生きていた、これは尊敬に値するな

「大丈夫か当麻」

「そう見えるなら俺の口座に俺が一生困らないほどの財産を入れてくれよ……」

とりあえず全員無事という事か

訳わからん奴らに邪魔されたがこれで種を探すのを再開出来るな

「じゃあ再開するぞ」

「そうですね」「そうだね」

そして歩きだす俺達

「ちょっと待てよ！」

「ん？なんだ当麻」

「ここに怪我人が居るのに何で再開しようとしているんだよ！？」

「早く見つけないといけないので」

「キノさん！？」

「倒れてる暇があったらさっさと探すぞ」

「ツカサ！？」

「どうま早く」

「…………」

諦めたのか当麻は怪我をしたまま移動を再開した

……悪乗りしすぎたか

でも俺以外は素で言っているから怖いんだよな

「周辺はこれで全部探し終わったと思うぞ」

一日中動き回って成果はゼロ

「やはり簡単には見つかりませんか」

「ま、焦ってもしようがないだろ」

とりあえず当麻の家に帰宅

「それにしても」

そう言いながら当麻の背中を見る

「頑張ってくれていたな」

そこには疲れて寝ていたインデックスが居た

「お前たちの事も思い出していないのにな」

笑いながら当麻が言った

「こんなことを真っ向から否定せずに手伝ってくれたのはうれしいですね」

「確かにそうだな」

全員で笑いながら当麻の家に入った

「さあ猫ちゃん！こっちにカム、オン！」

「フシャーーーーー！」

居間にリングを頭にのつけた白いマントを着た男とスフィンクスが居た

「ハッハッハ！そんなに怖がらなくても良いじゃないか！そらそら！」

「フギャーーーーー！」

……………誰？

横を見て二人の反応を見てみた

当麻は口をポカンと開けてアホみたいな顔をしていた

俺もそんな感じだったのだろうか

そしてキノは……

「……………」

無言でカノンを構え

狙いを定め

何のためらいも無く

発砲した

そしてその男に直撃し赤い液体が――――

「ってオイ！」

当麻が大声を出した

「キノさん！俺の家を殺人現場に仕立て上げるつもりですか！？」

「すみません。あの人を見ていると何故か無意識に手が動きまして」「だからって撃ち殺す事は無いだろう！？」

「しかしあの男ですけど無断に貴方の家に上がっていましたか」

「それも大切だけど話が違う！」

そんな事を二人が話していると打ち抜かれたはずの男がきちんと正座していた

「あんた……誰？」

とりあえず今一番知りたい事だ

「私か？私の名は――」

すると変なポーズを取りながら

「弱きものの声がすればすぐに駆け付ける！（女の子なら光速も超えるスピードで！）愛と勇気の戦士！サモエド仮面なり！」

そんな自己紹介を終えると何処からか変な音が聞こえてきた
そしてその音源らしきものを全てキノが破壊した

「ああ！なんて事をするんだ！結構セツトに時間がかかったのに！」

そんな事を言う変態

自己紹介のセリフの中に早すぎて聞こえなかった言葉もあったが気にしたら駄目だろう

むしろ聞く価値の無い事だと思う

「早くボク達の前から消えてくれませんか？」

キノが……笑っている……

怖え……

当麻も震えているのが目に見える

「そんな事を言わないでくれよ、かわいい女の子なのn『パン』」

「次は当てますよ」

あれ？何だろう？震えが止まらないよ？

「そ、それよりあんた……頭打ち抜かれて無かったか？」

そう言えばそうだ

何でこの変態は生きているんだ？

すると変態はポケットに手を入れた
そしてそこから取り出したのは

「トマト？」

当麻と声が被ったが変態の手にあるのは綺麗で非常においしそうな
トマトだった

「これで銃弾を受けとめた。だから無傷で済んだ」

人間なのかこいつは！？

「……」

キノが顔をゆがめている

それもそうか

自分の一番威力のある銃による攻撃を野菜で防がれたもんな

「ハア……とりあえず……用件は何なんだ？」

何故此処に居るのか知りたいからな

「ん……何となく？」

その言葉を発した瞬間

俺は剣を首筋に当て

キノはカノンと森の人を持ちながら背後を取っていた

「ハッハッハ！冗談が通じないのかな？」

うん、こいつとは会話するだけ無駄なような気がしてきた

「まともに会話をしないのなら此処からさっさと出て行け」

「ん……それは困るな」

するといきなりそいつから出されていた空気が変わった

「流石に少し真面目になるかな」

「「……」」

最初からそうしておいてくれよ

この場に居た全員が思っただろう

「少しヒントを君たちに授けに来たんだ」

「ヒント？」

一体何のヒントだ？

「種」

……一体何者だ、こいつ

敵なら速攻で排除した方が良いでしょうがわざわざヒントをくれる人物だ

敵ではないだろう

……変態だが

「灯台もと暗し」

「はい？」

「探し物は近くにあるもの、ただそれに気付けないだけさ」

「……」

「ではこれで私は失礼するよ！しーゆー！」

そんな言葉を言った後に、その場から変態は消えた

「一体何なんだあいつ」

「……」

「ふざけた野郎だが……あいつは多分強い……俺達より遥かにな」
当麻の言葉にも頷ける

あのまottoっていた空気の変わり方は異常だった

敵対はしたくないな

「いつか……必ず……」

横ではキノが決意を固めているような言葉が聞こえた

一体何の決意かは考えない方が良いでしょうな

しかし、あのヒントが本当なら俺たちの近くにあるって言う事か？

あの変態の言葉、記憶の片隅にでも一応置いておくか

「とりあえず今日は疲れただろ、やめにしようぜ」

インデックスを布団に置きながら当麻がそう言った

焦る事は無いのか……？

他の世界では改変されつつあるのかも知れないのに

「ツカサさん」

キノが話しかけてきた

「何だ？」

「難しく考えるのはやめた方がいいと思います」

「だけど……！」

「ボク達は神様ではありません。やれることとやれない事があって当たり前です。世界を全て救う事は大切ですが今は目の前の事を一つ一つ解決していくことが重要だとボクは思います」

「………」

「受け入れられないかもしれませんがそれがボクの考え方です」
俺は何を言えば良いのか分からなくなった

「ボクは疲れました。先に眠らせて貰います」

「……ああ」

そして本当に布団に包まった

「当麻」

「ん？」

「お前は思う？」

人の意見は皆バラバラだが何となく聞こうと思った

「俺か？俺は………」

「俺は？」

「……分かんねえな」

まさかの分からないだった

「確かに守れるのなら守りたいが……自分の近くで起きていないのだったら何もできないのと変わらないんじゃないのか？」

「……そう、か」

「ツカサ、あんたがどんな行動を取っても文句は言わねえ。ただ、俺達を悲しませるような事だけはやめてくれ」

俺は……一体どうしたいんだ？

「お休み」

「……ああ」

頭の中がぐちゃぐちゃで眠れそうにも無かった

悪いと思ったが夜の散歩に出た

夜風が気持ちよかった

公園のような場所に着き、ベンチに座って空を見上げた

星がいくつも綺麗に輝いていた

星座なんて洒落たものはほとんど分からないがあれだけは分かる

「夏の大三角、か」

デネブとアルタイルとベガが創りだしている三角形

キズナが何故かとても好きで夏になるたびに見に行っていた

「今頃大丈夫なのか？」

そんな事を思っていると一つの光が動いているのが見えた

「流れ星か？」

願いが叶うと言う伝承は嘘だと分かっていたが今は素直に願った

(キズナと一緒に日常に戻れますように)

少しだけだが心は晴れた

「戻るか」

明日からまた忙しくなるな

そんな事を思いながら空をまた見上げると

「は？」

流れ星がこっちに來ている

と言うか……

「星じゃ無くてアレ、人か!？」

暗くてよく見えないが人である事は確かだ

あのままじゃ地面とぶつかり最悪……

「クソッ！」

俺は考える前に走っていた

間に合うかどうかは微妙だが何もしないよりは……!

「間に合えっ！」

俺はヘッドスライディングをしてキャッチを試みた

が、勢いを付け過ぎたのか通り越して背中に落ちてきた

「痛っ！」

何とか最悪の事態は起きなかったみたいだ

とりあえず顔を見えるか

「……………」

容姿だけを見ると説明は簡単だろう

青色の髪をしていて後ろでリボンを結っている

そして髪の色と同じような色をした青と白のワンピース

だが不可思議な点が一つある

「背中にあるこの線対象な羽のようなものは一体何なんだ……？」

そして問題が浮上

こいつをどうするか、だ

「連れていくしか無いか……」

また面倒な事になりそうな気がする……

ため息が自然に漏れてしまった

第八章 目的（後書き）

「シャインとツカサのあとがき劇場」

「早速始めたいと思います、今回は二回目のキノです」
「どうも」

「今回は作者がいないんだ」

「それは一体どういうことですか？」

「作者、長期休暇って浮かれていたら課題一つも終わって無いらしい」

「すると今……」

「必死にやってんじゃねーの」

「ボク達こんな人に書かれているんですか？」

「悲しいが現実だ」

「人間あきらめが肝心ですね」

「そう言う事」

「ちなみに今見てきたけど今日中に終わりそうにないわね」

「いきなりの登場ですね、紫さん」

「あら、あまり驚かないわね」

「慣れたからな」

「慣れました」

「そう……あ」

「どうしたんです」

「作者は今課題やって無いわね」

「え？じゃあ何やってんの？」

「この執筆、と言うか今あとがきを書いているわね、この」

「……アホの極みだ」

「同感ですね」

「じゃあ私はこの辺で」

「行ったな」

「そうですね」

「とりあえず作者からのメッセージ的なものあったっけ？」

「あります、書き置きみたいな感じで」

「じゃあ頼む」

「『とりあえず前のあとがきで書いたとおり九章から本格参戦させれそうで良かった。今回遅くなったのは私用がとても重なり書く暇が無かったからです。もし楽しみにしていた方がいたらすみませんでした。後、長期休暇も終わりに近づいているので余計に投稿が遅くなると思います。しかし、どれだけ遅くても必ず書ききる！そんな精神でやるので末長くよろしく願います』と書いてあります」

「……」

「どうしましたか？」

「意外とまともでびっくりだ」

「そうですね」

「これが本人の口から言えればもっと良かったんだろうけどな」

「ええ、ちなみに課題がどうなったかは九章のあとがきにて話らしいです」

「今回はこれで終わりだな」

「ええ、それではまた」

「「今回もありがとうございました」」

第?章 幻の住民(前書き)

サブタイトル相変わらず関係無い……
どうかしようと思うが打開策が見つかりません……

第?章 幻の住民

「ううん……」

運んでいる途中、そんな声が聞こえた
起きそうか? そう思い声をかける

「おい、しっかりしろ」

「ううん……は!？」

そんな声を上げて周りをきろきろと見渡す少女

「気が付いたか、良かった」

「あんた、誰？」

かなり警戒しながらそう聞いてきた

まあ、目が覚めたら名前も知らない人が目の前にいたら警戒はする
よな

「俺の名前はツカサ、お前は？」

「あたいはチルノ」

チルノとか言う少女は気絶していたとは思えないほど元気に自己紹
介をしてきた

「なあ、チルノ」

「何？」

「何で空から落下してきたんだ？」

「う……ん……」

しばらく黙考していたが何か思い出したらしい
頭に電球のマークが見えた、ような気がする

「いつものように湖で遊んでいたらいきなり凄い風が吹いた！」

「そして？」

「気が付いたら此処に居た！」

……話が見えない

吹き飛ばされて此処に居るのか？

でもその割にはかなり上から降ってきたよな？

しかも俺の記憶に間違いが無ければ此処、学園都市は入るためには
厳しい警備の目をかいくぐらなくてはいけない筈
それなのに警察らしき人物は一向に来ない

つまり……

「俺のように異世界から来たのか？」

そうとしか考えられない

「？何か言った、ツカサ」

「いや、こっちの話だ」

ミストの手先かと頭をよぎったがそれは無いと判断
こんな見た目バカっぽいが限りなく純粹そうな子があいつ等の仲間
とは考えにくい

それ以外で異世界に移動した住民……

そこで俺の頭から記憶の引き出しが開いた

確証は無いが聞いてみるか

「チルノ、お前、幻想境って知っているか？」

「うん、あれ？何でツカサは知らないの？」

やっぱりか……こいつは紫さんが言っていた幻想境の住民で間違い
ないだろう

「チルノ、此処は幻想境じゃない」

「どう言う事？」

「……話せば長くなるな、俺に着いてきたら話す」

「……」

再び黙考

当たり前だ、自分のいた場所じゃないと言われてもすぐに信じるよ
うな奴はいないだろう

ましてや自分のセリフを思い返せば誘拐の一手手前ぐらいのセリフ
着いてくるわけがないだろう

そう思い返事を待っていると

「……分かった、あたいツカサに着いていく」

着いてくると言った

まさか来るとは思ってもいなかったので聞いてみた

「俺があやしいとかそんな事は思わなかったのか？」

「それはそうだけど……体を張って助けてくれた奴が悪いわけ無いよ」

無邪気な笑顔でそう言った

「……分かった、着いてこい」

そう言うのと背中にかすかな重みがした

「……何やってんの？」

「ツカサにおんぶして貰っているんだけど？」

「………何故？」

「何となく」

多分降りろと言っても聞いてはくれないだろう

キズナにも昔良くやれって言われたしな

諦めてそのまま当麻の家に向かった

翌朝、目覚めると俺の横でチルノが寝ていた

結構早い時間に起きた感じがする

実際キノはまだ寝ている

内心助かったなんて思っている

もし俺が起きていなかったら説明する前に何かをされている可能性

が大、だからだ

と、そんな事を思っているとキノが起きた

「……おはようございます」

「ああ、おはよう」

「朝起きて一番に言う事ではないと思いますが「その子は一体誰？
だろ」」

もう次に紡がれる言葉は分かっていたので先に言わせて貰う

無言で頷くキノ

俺は寝ている頭に手を置いて説明する

「こいつはチルノ、紫さんの言っていた幻想境の住民だ」

「幻想境の……この子がですか？」

「ああ、詳しくはこいつも含めてみんなが起きてから話そうと思うんだが……良いか？」

「分かりました」

しかし、一体こいつはどうすればいいんだろうな

紫さん曰く、その辺の奴らよりは強いって言っていたけど……
どうもそんな風には見えないからな

まあ、朝飯を食べながらもゆっくり聞か、その辺は

「「「おかわり」」」

「もう突っ込まんぞ……」

みんなが起きて朝飯を食べている

流石に態勢ができたのか、もう諦めたのか

そして、その輪の中に違和感なくチルノが潜り込んでいる
皆、疑問に思わないのか

食べ終わり、ひと段落したところでインデックスが言った

「ところでこの子誰なの？」

……飯食っていて気付いていなかったのか？

実際食べるのに集中していたような感じだったからな

「こいつはチルノって奴だ」

「ふーん」

興味が無い様な反応だな

「詳しく説明を頼む、ツカサ」

当麻は気になるのか聞きたがっていた

「関係無い奴だったら、お前を一生怨むぞ」

訂正、食費をかけるほど大切な奴かどうか知りたいだけみたいだな

「一応探し物に加わっている奴だからな」

「そうか、なら良し」

……つくづく苦勞をかけてすまん

「おい、チルノとやら」

当麻がチルノに声をかけた

その瞬間、鋭利な氷柱が当麻の横をかすめた

「……………」

「あたいを呼び捨てで呼びたいならあたいに認められるような事をしてからだ」

一体どこからそんなもの取りだしたんだ!?

これが紫さんの言っていたそこらの奴らよりって事の理由なのか!?

「チ、チルノ、さん?」

「ツカサは良いよ、あたいを助けてくれたし」

良かった……あの氷柱の餌食にならなくて済む

「チルノ、その氷柱は何なんだ?」

「これはあたいが作ったの」

作った?

どう言うことだ?

「実際に見た方が早いかもね」

すると何も無かったはずの掌にいつの間にか氷の塊がいくつかあった
呆然とするしかなかった

幻想境にはこんな能力を持った奴が多く居るのか?

学園都市の強い奴も負けてはいないだろうが……

「これがあたいの『冷氣を操る程度の能力』だよ」

その能力は絶対程度で表すようなものじゃないと思うんだが……

「……未だに違う世界は驚く事ばかりですね」

「そうだな……そして……」

俺は後ろを振り向きながら

「いつまで怯えてんだ、当麻……」

なんか腰を抜かしている当麻に言った

「お前は自分の目の前にいきなり弾みたいなのが来て避けれるのか
!?!」

「多分な、実際避けたし」

「嘘だろ!?!」

「マジ、なあ、キノ」

「そうですね、ボクの狙撃を避けましたね」

開いた口が塞がらない当麻

何時までも動かないならこっちから仕向けるぞ

「チルノ」

「何？ツカサ」

「当麻がお前と戦いたいってさ」

「ツカサ！お前は俺を「分かった！それじゃいくよ！」」

「せめて外でやれよ」

「覚えてろよ！」

そんな事を言った当麻はダッシュで外に出た

そしてチルノも追いかける、飛んで

「待て！ツンツン！」

「俺は上条 当麻だ！」

「関係無いよ！ぼっこぼこにしてやるんだから！」

「不幸だーーーーー！」

そして窓から当麻とチルノを観察

「……意外と鬼ですね」

「そうか？」

まあ、当麻なら死ぬことは無いだろ

あれはどう見ても幻想殺しで破壊可能そうな攻撃だからな

……当の本人は逃げるのに必死で気付いているかどうかは分からないがな

すると後ろからインデックスが袖を引っ張った

「何だ？」

「おなかすいた……」

見てみるともう昼近くになっていた

奴らはほっという飯を作るか

当麻の冷蔵庫に何があるかが問題だな

外から聞こえる悲鳴をBGMに俺たちは昼飯を作り始めた

第？章 幻の住民（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

来ましたよ！ついに来ましたよ！第？章！

「よかったねく」

反応冷たっ！

「とりあえず作者は放っておいてゲストを呼びまゝす。今回のゲストは——」

「あたいがじゃ無くて誰が居る！」

「……と、言う訳でチルノです」

おお！チルノ！ようやく出す事が出来たよ！御免よく！

「近づくな変態！スベル使うよ！」

……変態扱いされた

「当たり前だろ。と言うか前の事覚えてるか？」

ああ、チルノがかわいいって事だろ

「……………」

二人とも物騒なものはしまつて、お願い

「はあ……課題についてだよ。書いていたろお前」

そうだったな

「で！どうだったのさ！」

間に合いませんでした！

「「威張って言うものじゃ無いだろ！」」

グハ…………酷ひ…………

「はあ、変態はほつという話すか」

「分かった！」

「チルノ、お前自分が変だとか思わなかったのか？」

「何の事？」

「自分のキャラについて」

「思うけど変態だからどうあがいても無理だと思う」

「最初から悟っていたか」

「うん！」

「そして、だ」

「言う事が何となく分かる気がする」

「一体いつまでインデックスの世界に居座るんだ俺ら」

「作者はバカだから考えなしでやってるみたいだよ」

「いい加減、種を見つけてくれないと当麻の家計簿がピンチになってしまうな」

「そうだね」

「さて、後今回の内用何だが……」

「フルであたいの話みたいな感じね」

「終わる事があるのかこの話」

「それはあたいにも分かんないよ」

「まあ、作者を信じてやるしかないか」

「それが一番懸命かもね」

「この辺で終わるか」

「あ！」

「どうした？」

「言い忘れてた！」

「何を？」

「この小説、PVが3000！ユニークアクセスが1000を達成したんだよ！」

「こんな小説ごときに……読者の皆様には感謝しきれません」

「作者の余裕とかが無いので日常みたいな事はもう少し時間がかかるらしいけど必ずやるって！」

「とりあえず、全てに感謝しながらこの辺で終わります」

「「ありがとうございます！」」

「作者」

何？

「本当にいい加減インデックスの世界から出してくれ……」
何で？

「マジで当麻の家計簿がヤバイ。今、赤と黒の狭間にある」

……長くても後二話で終わらす努力をするから上条さんには頑張
って伝えておいて

「当麻に同情する事しかできないな……」

第十章 区切り（前書き）

遅くなりました……

その事とかもあとがきで
では本編をどうぞ

第十章 区切り

「一体何処にあるのでしょうか」

「俺に言われても、な……」

昨日と同じく街を探しているが全くと言っていいほど手掛かりすら掴めない

「正直な話をするとうまく見つかって欲しい……」

当麻の家計もかなりヤバくなってきたのだろう
独り言が聞こえてくる

そして……

「チルノ」

「何？」

「少しは落ち着いて行動しろ」

「？何で？」

この子は初めて見る物が一杯ある所為か蜂の如くブンブンと飛び回っている

こんな所を住民に見られた時には一体どうなる事やら

「黙って言う事を聞け」

「はい……」

素直な事は良い事だと思うぞ

「しかし……インデックスを置いてきて良かったのか？」

いくら寝ているとはいえ連れてきた方が良かったように思えるのだが……

「俺をあんな目に合わせておいてまた地獄を見ろと言うのか!？」
つまりインデックスは機嫌が悪くなると

私情でもやめて欲しいところだったな

早めに切り上げてしまうかな

「ところでキノ」

「何でしょう？」

「さっきから周りを見渡しているけど一体どうしたんだ？」

当麻がキノに質問をしていた

「気付いていないのですか？」

「何に？簡単に説明してくれ」

「気付かないとは思いませんでした」

「教えてくれよ！分かりやすく！」

「プリニーが色々な場所に居ます」

「へ？」

そう、さっきから下手糞なストーキングをしているペンギンが居る
それに気付いていないとは……

戦う時以外とても抜けているようだな

「とりあえず探すのを一時中断して人のいない公園とかで殲滅しようかと思うんだが」

「そうですね」

そして俺たちは一番近くの広場へ向かった

（こちらP1！目標が移動を始めたッス！）

（こちらP2！直ちに追いかけるッス！）

……無線で話をしているようだがこちらまで会話が聞こえている
こいつら俺を殺す気があるのか？

敵ながら心配になってきた

「着いたぞ」

広場に着いた

此処なら住民とかにも被害は出ないだろう

そしてプリニー達だが

「「「……………」」」」

「「「……………」」」」

なんか木の棒を二本持って腹這いで移動している

周りは木が一つも無く原っぱである

場違いすぎる……

「……おい、隠れてないで出てこいよ」

「「「「「……！」」「」」」」

物凄い動揺しているペンギン共

ばれていないと思っていたらしい

（どーするツスか！ばれちゃったじゃないツスか！）

（いや、これは憶測で言っているだけツス！俺たちの変装は完璧ツス！）

（けどなんかどんどこっちに向かって来ているツスよ！？）

（大丈夫ツス！虫か何かを見つけただけツス！）

（隊長！ついには目の前に来ているツスよ！）

（大丈夫ツス！この木に見とれているだけ「いい加減出てこいや！」

「「「「「え………？」」「」」」」

「バレてんだよ！今までの会話聞いてたらイライラしてきたわ！」

当麻がキレた

まあ、ここまで連中がアホだとは思ひもなかったが

「ねえ、ツカサ」

「何だ？」

「ツンツンは誰に叫んでいるの？」

……ここにもバカが居た

目の前にあからさまに怪しい物体があるのに気付いていない

もしかして広場に来ている理由も分かって無いんじゃないのかこの子は

「バレちゃしょうがないツス！みんな行くツス！」

おおー！という掛け声とともにプリニーが出てきた

「ツカサ！こいつ等は何？」

「こいつ等はアホだな」

チルノの疑問に一言で答えてあげた

「ちゃんと説明してくれツス！」

そうだそうだ、となんか聞こえてくるが……

「分かった！」

チルノには聞こえてないらしい

この子はこんな説明で分かったのか？

まあ、今は説明する手間が省けて助かる

「とりあえず、サクッと終わらせるぞ」

その言葉が始まりの合図の様だったらしく火蓋は切られた

「流石に弱すぎないか」

当麻がそんな事を言った

秒殺とも言えるようなスピードで決着がついた

その理由が

「あたいたら最強ね！」

チルノのおかげだと思う、いや思うじゃ無くておかげだ

開始早々カードみたいなの何かを取り出し何かを言ったと思えばプリニーに向かって大量の水が飛んで行った

大量の水はプリニー達をボコボコにし、一瞬でKO

紫さんの言った通り、その辺の奴らでは戦いにすらならないだろう

「圧倒的ですね」

「そうだな……」

キノの言葉に頷く

幻想境の住民が敵だったとしたら……

考えたくも無いな

そんな事を思っていると

「ま……まだまだッス……」

しつこく立ち上がってきた

「さっさと帰れよ」

「俺達にはまだ仲間が居るッス！そいつにボコボコにされるがいいッス！」

するとプリニーは大声で兄貴ー！とか叫んだ

プリニー達が叫び続ける一方

「ツカサ、一体どんな奴だと思う？」

「こんな奴らの兄貴ねえ……」

「ボクはとでもずる賢い人だと思いますが」

「俺は同じくアホだな」

俺たちはこんな平和そうな会話をしていた

そんな話を話していても一向にくる気配がない

「……いくらなんでも遅すぎないか？」

「その兄貴と呼ばれる人物は逃げたのでは？」

「反論できないな」

待ち続ける事、五分

広場の前にタクシーが来た

『助かったぜ、おっさん！』

『そんなことどうでも良いから料金払ってくれ』

『えーと、いくらだ？』

『一万と三百』

『……ツケに出来るか？』

『出来るわけないだろ』

『……』

その男は財布から諭吉と小銭を取り出しタクシーの運転ちゃんに払ってこっちに来た

「……あいつか？」

「……多分そうだと思いますね」

そいつは当麻に負けず劣らずのツンツン頭で金髪だった

服装はズボンとマントを着用、しかし上半身裸

……アホの匂いがぷんぷんする上にさっきのやり取りを見てしまったのでやる気が出そうにも無い

「待たせたな！プリニー共！」

「「「兄貴ーーーーー！」「」「」」

ちよっとイラッとしたのでキノにアイコンタクト
読み取ってくれたのか発砲

かなりびっくりしている奴ら、約六名

「いきなり撃つとは何なんだ！それでも主人公か、お前は！」

一体何の事言っているのか分からないが言いたい事を言わせてもらう
「こっちはかなり待ってたんだ、さっさと話すなら話す、戦うなら戦うだ」

「お前らは俺様を知らないのか！？」

俺ら全員がお前の事を知っているわけ無いだろ

「だったら教えてやる！よく聞け！俺様の名前はダークヒーロー、アクタ————」

「とーう！」

「うごお！」

そいつの自己紹介の途中でチルノが蹴りを入れた

「おいそこのガキ！何してんだ！自己紹介の途中だろうが！」

「うるさい！あたいが知りたいのはお前があたりより強いかどうかだけだよ！」

そして氷を大量に飛ばし始めたチルノ

「うおおおおお！」

そして避ける……結局名前は一体何だったんだ？

「あいつの名前なんだと思う？」

チルノと奴が戦っている間に二人にそんな質問をした

「アクタ、と言ってましたよね」

「その後に続きそうな言葉か……川とかか？」

「あの恰好でそれは無いだろう」

羅○門とか蜘蛛○の糸とか書いたのか？奴は

「別にどうでもよくないか？」

「ボクもそう思います」

「そうか……」

そして観戦に戻った

しかしあいつは意外とやるようだ

チルノは結構多く氷を飛ばしているはずなのに当たっていない

「ふと思ったのですが……」

「どうした？」

「あの人が来るのを待ってなくても良かったのでは？」

「………確かに」

何で律儀に待ってたんだ俺らは

「結構白熱してるみたいだからそのまま放っておくか？」

「そうだな」

「ですね」

そうしてチルノとそいつを戦わせてその場を去った

結構白状かなって思ったけど気にしないでおう

とりあえず昨日探すには難しかった遠方にまで行ってみた

途中でキノが物を欲しがる子供のような目で温泉施設を見ていた

しかし、いくら見つからないとはいえそんなところに行く暇は無い

素直に諦めてもらって再開した

そして例の如く超電磁砲を持つ彼女に見つかってしまい当麻と一時

別れるハプニングも発生

当麻を見つけるのが面倒だったので適当に歩いていたらボロ雑巾の

ようになった当麻を発見

時間をもったいないので叩き起こした

怨みのこもった目で見てきたが軽くスルーさせてもらった

そして昼にかなり近づいていたので一旦帰宅しようとしている

「やっぱり見つからないな」

近くの自販機で当麻からジュースを奢って貰った

商品名、ヤシの実サイダー

意外とうまかった

「当麻さんが知っている所はだいたい探しつくしたのですよね？」

「………ありそうなところはな」

「………でもなあ」

「どうした、ツカサ？」

「あの言葉がどうも頭に残ってんだよな」

「思い出すのも嫌なあの変態仮面のか？」

「ああ」

あいつは灯台もと暗し、と言っていた

簡単に言えば探し物は近くにあるのに見つからない、と言う事だ
全員で黙考

と言っても見つけれるところでも当麻だけだと思う

俺とキノはこの辺の地理が分からないからな

そう思ってベンチに座りながら考える事、十分

唐突にキノが発言した

「…………探していない所ならありますね」

「え！？あるのか！？」

「あの変態の言葉が正しいんですが、ね」

「教えてくれ！一体どこだ！？」

「…………まさか？」

「当麻、お前もなのか！？」

「ああ、だけどあるのか、本当に…………？」

一体どこなんだ

そこを探せば希望がある

「ツカサ、とりあえず落ち着け」

「そうですね」

その言葉に従い深呼吸をする

「フウ…………すまん、振り乱して悪かった」

「大丈夫だ」

改めて尋ねる

「一体どこなんだ？キノ」

そしてキノが言った場所は————

「当麻さんの家です」

「あ？」

なんとも普通に

なんとも原点すぎて気付いていなく
なんとも気の抜けそうな場所だった

探すべき場所も決まったのでチルノを迎えに広場に戻る
戻ってきて見えた光景は――――

「いい加減当たりな―!」

「そんなものにダークヒーローは当たらない!」
さっきとそんなに変わらなかった

「何でしょう、この光景見た事あるような気がします」

「俺もだな」

とりあえず埒が明かないので

「キノ、やっちまえ」

「分かりました」

カノンをあの名無しさんにぶち込んで貰った

直撃――――したはずなんだが

「痛ってえ!!」

致命傷になるどころか石を当てた程度のダメージみたいだ

あいつについて分かった事はとりあえず人間ではないという事か?

「何しやがる!」

「何って攻撃だけど?」

「不意打ちは無いだろ不意打ちは!」

「ちゃんと周りを警戒しろよ、危ないぞ」

「は?」

その言葉を最後にチルノが大きい雹を名無しさんにブチ当てた

「ぐはあああああ!」

その叫びとともに空の彼方へ飛んで行った

ちなみにその雹にプリニー達も巻き込まれて一緒に飛んで行った

「あたいったら最強ね!」

本日二度目のセリフ

口癖か何かなんだろうな

「良くやったな、チルノ」
そう言うところに向かって元気にピースをした
行動の一つ一つが子供っぽくて思わず微笑んでしまう
「何がおかしいんだツカサ？」
ちよつと怒りながらそんな事を言ってもかわいいだけだ
二人もそう思ったみたいで気が付けば皆で笑っていた
「笑うなーーーーー！」

例の如く当麻だけチルノの生死を分ける鬼ごっこをしたため、また
ボロボロになっていた

「今日の俺って……」

「そんな時もあるだろ」

「気にしない方がいいと思いますよ」

「スツキリした！」

反面チルノはかなり嬉しそうだ

まあ、あれだけ暴れれば楽しいかもな

「それにしても早く見つけねーと俺の家の金が……」

「赤く染まるな」

「はあ、飯食って早く再開しようぜ……」

「そうですね」

「さんせー！」

そして当麻が扉を開けた

「……」

そしてすぐに閉めた

「どうした、当麻？」

「ツカサ、覚悟を決めておいた方がいいかもな……」

「それってどういう……」

そして当麻が扉を開け放すとそこには部屋なんてちゃんものは無く
荒野みたいな所だった

「これは一体……？」

「嘘だろ……」

いくら何でもこの変化はあり得ない

完全に部屋より広大な荒野が広がっているからだ

「これは異能じゃねえな……お前たちに見せて確信した」

「異能じゃない……？」

一体どうやってそんな事が……

「それは私のち・か・ら」

その言葉が聞こえた瞬間、俺たちはその方向に向かって臨戦態勢をとった

「あら、怖いじゃない、こんな女の子にそんな物騒なものを向けるなんて」

「お、お前……その声！」

「あら、覚えていたのかしら」

「当たり前だ……！」

覚えているなんてものじゃない

その声は、俺を殺そうとしキズナをさらった奴の一人の声だからだ

「キズナは何処だ！黒コート！」

「怖いわね、今日は貴方に用事がある訳じゃないの」

一体何の用で当麻の部屋に居るんだ

「このシスターさんを連れていくだけだから」

「な……！」

黒コートの後ろには、横たわっているインデックスの姿があった

「てめえ、インデックスをどうするつもりだ……！」

静かに当麻が怒る

「知らないわよ、私だって連れてこいとか言われていないから」

「インデックスも“鍵”だったか……！」

さっきの探索に無理矢理でも連れてこればよかったか

今更そんな事が分かって遅い

今はどう助けるかを考えるだけだ

「お前に安々と連れて行かせる訳にはいかねえな」

「ふうん、じゃあどうするの？」

「お前を叩き潰して取り戻す！」

「クスッ、やっぱ面白いわね、貴方は」

そして黒コートは何処からともなくナイフを取り出して

「五分、それがタイムリミット、じゃあ始めましょうか」

そんな言葉を言った瞬間、俺の目の前まで接近していた

しかしそれも読めていた、この不意打ちが来る前に危険な気配がビ
ンビンしたからだ

「ッ、ツカサ！」

「大丈夫だ！」

「ツカサに何すんだ！」

チルノは氷柱を一斉発射した

「あら、こんな単純なものには当たらないわよ？」

無駄な動きをせずに最低限の運動しかせずにあの大量の弾を避けき
った

「この程度？ がっかりね」

そしてナイフを投げた

弾に当たる事も無く一直線にチルノの場所へ飛んで行った

「キノ！」

「分かりました！」

すぐに森の人を発砲してナイフを落とした

「チルノ！ 下がれ！」

「りょーかい！」

そして一度全員で距離を置いた

「一体なんだあいつは」

「人じゃないよな……」

「あの弾の中で冷静にナイフを投げてあの精度ですからね」

「どうする？」

「隙がないけどな……全員出来るだけ接近して助け出すのが一番か
？」

「下手にバラバラに戦うよりは良いかもしれませんね」

「話し合いは終わりかしら？ 後、三分よ」

黒コートがそんな事を言った

「三分で俺たち全員を始末するってか？」

「そうじゃないのよ、三分でこの子連れて帰らせてもらうって事」

「何だって!？」

あいつは俺達を相手にする気も無かったのか!？

「早くしてね」

「クソ！行くぞ皆！」

その号令で全員で突進した

「あら、それで良いのかしら？」

「答える気は無い！」

そして剣を振り下ろすがナイフ一本で止められる

その横についてキノとチルノが一斉射撃するが俺の剣を受け流してすぐに全ての弾を避けた

当麻が後ろから殴りかかろうとするがしゃがんで避けられ、そのま

ま一本背負いされてしまった

そして息をつく暇も無く黒コートはカノンと森の人を構えていたキノに突進

そして見事な足技を繰り出し二つとも遠くに飛ばされた

そしてナイフによる一撃がキノに迫った

しかしキノはそれに的確に対応

冷静にそのナイフの軌道を読み、避けた後に自分もナイフを取り出し反撃

これは当たったらしく黒コートの切れた場所から血が滲んでいるのが見えた

「すげえな、キノ」

「……褒めても何も出ませんよ」

しかし、何だあの反則級の速さは

「やっぱりこのコート邪魔ね」

そしておもむろにコートを脱ぎ始めた
そのコートの内側から出てきた人物は――

「こっちの方が動きやすいわね」

「嘘……だろ……」

「ツカサ？」

「ツカサさん？」

「どうしたんだ、ツカサ？」

勝てるのか、俺たちは……

「第二ラウンドを始めましょうか？」

この宇宙人、朝倉 涼子に……

「あら、あなたらしくない顔ね」

「……」

「一体何がどうしたんだよ！ツカサ！」

「……キノ、当麻、チルノ」

そして俺は続けた

「勝つ事は考えなくてもいい……」

「それって一体――」

「とにかく生き延びる方法を考えろ！」

「その言動からして私の事は知っているみたいね」

「色々な世界の人物がいるとは分かっていたがまさかあんたもだつ
たとは思ひもなかった……」

彼女の能力の情報操作は簡単に説明すれば何でもアリだ

当麻の幻想殺しが発動しないのも頷ける

何故ならその物体そのものを変化させていたりするので幻想ではな
く現実だからだ

そして何より一番怖いのが……

「情報連結解除……」

「何ですか、それは？」

「一言で説明すれば、誰でも簡単にこの世からいない事に出来るつ
てこと」

「……………！」

「でも、私はまだうまく使えないのよね」
ただし、と言って言葉をつなげた

「他の事なら出来るけどね」

そんな事を言いながらこっちに笑顔を向けてきた

「気が変ったわ。貴方達はここで殺しておくわ」

「っざけんな！お前なんかに殺されてたまるか！」

と、当麻が殴りに行こうとしたが

「え……………」

「どうした、ツンツン？」

「動けない……………！？」

もうされていてしまったみたいだな

指一本動かせない

「さて、誰からにしようかしら？」

この状況をひっくりかえせる能力を持っているのは此処にはいない
同じ情報操作能力をもつ人物か、願望実現能力を持っている人物と
かだ

一体どうすればいいんだ？

一体？

「まずは貴方からかしら」

「え……………」

その言葉の後、俺は腹から変な感じがして意識を失った

「ぐ、は……………」

「当麻さん！」

「ほくら」

「っぐ！」

「そくれ」

「あ……………」

「あら、これで終わり？歯ごたえが無いわね」

彼女の目の前にはぐったりと横たわっているツカサ
周りにはキノ、当麻、チルノもいた

「さて、止めを刺そうかしら？」

つまらないわね、と独り言を言った

そして彼女は一人一人止めを刺そうとした、が

「……まだやる気なの？しぶとい人は嫌いよ」

「……………」

立ち上がる事が無い人物が立ち上がった

ツカサである

「貴方、一体何がしたいの？」

なにも無い空間から巨大なカマキリのような生物が出てきた

「何も無いのだったらこの怪物の相手でもしておいて」

「……………ザこニヨウはナい」

「え」

次の瞬間、怪物は真っ二つになっていた

「……………つぎはオマエだ」

「……………面白いわ、本当に面白いわね、貴方は」

「……………ころす」

「ここは退散させて貰うわ、下手に戦ってこの子を取り返されたら
意味がないもの」

その言葉を最後に消えていった

「……………」

同時にツカサの身体から力が抜けた

「ツカサー！起きろー！」

「グホォ！」

俺はチルノのとび蹴りによって目が覚めた

「痛いって……」

「起きたか、ツカサ」

「生きているのが不思議だ」

「それはそれは」

周りを見渡せばいつもの当麻の部屋だった

「でもさっきの事は夢じゃ無いみたいだな」

「……ええ」

ボロボロになっている姿

インデックスがいないこと

「過ぎた事を悔やんでも仕方ありません、種を見つけましょう」

「そうだな……」

ボロボロな体に鞭を打ち、探し始めた

「ところでさ」

「何でしょう？」

「あいつは何で俺たちに止めを刺さなかったんだ？」

さっきからそれが気になって俺は作業に集中できずにいた

「すみません、それはボクにも……」

「俺も分かんねえな」

「あたいも」

全員が分かっているのか？

だとしたら他の誰かが助けてくれたのか？

分かんないな

「ま、気にしない方が良いか」

「そうですね、早く見つけましょう」

「ツンツン」

「何だ？」

「これってなんなんだ？ 変な絵が一杯描いてあるけど」

「わーーーーー！」

チルノは何かを見つけたみたいだな

でもそんなものじゃ無くて種だ

一体どこにある？

そして……

「……キノ」

「何でしょうか？」

「探してくれないか？ スフィックスと戯れるのをやめて」

「……………」

「にゃーにゃー」

まったく、真面目に探しているのは俺一人なのか？

やれやれ……………」

「とりあえず、没収」

「あ……………」

表情に変化は無いが、かなりガツカリしているみたいだな

キノの表情の変化が読めるようになるとは思いつかなかったな

「お前もお前だ、邪魔をするなよ」

「にゃーにゃー」

と、スフィックスを持ちあげ説教をしていた

「ん？」

何か変な感じがした

こいつを見ているとなんか感情のコントロールができないと言うかなんと言うか

とにかく違和感をかなり感じた

この感覚はまるで……………」

初めて種を見たときと同じ感覚

「まさか……………」

「ツカサさん？」

「確定した訳じゃないが…………種を見つけた」

「！」

「マジか！」

キノと当麻も驚いた顔になって駆け寄ってきた

「まあ、灯台もと暗しだな、まさしく」

そしてスフィックスを差し出す

「…………おいツカサ、こいつが種だって言うんじゃないだろうな」

「そうだけど？」

『目星は付いている、そこに何人か送った』

「連れ戻すのも時間の問題？」

『一筋縄ではいかんだろうな、創作物とはいえ伝説の肩書を持つ者だからな』

「私は行っちゃいけないの？」

『先ほども言ったはずだ、回収を引き続きやれ、と』

「つまらないわね、ま、貴方に従うのが面白そうだから素直に言う事を聞いてあげますよ」

その言葉の後、朝倉 涼子はその場から消えた

『“鍵”は順調に集まりつつあるが……覚醒しつつあるか……』

「放っておいても良いのですか？」

『経過観察だな……お前にも出向いてもらうか、J』

「クス……」

不気味な笑い声が聞こえた後にその男も姿を消した

『さて、“賢者”よ……今度はどう動く……？』

第十章 区切り（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

うおおおお！ついに十話目だよ十話！英語で言えばエターナル！

「それは永久ね」

いやいや的確な突っ込みどうもどうも

「順調に頭が腐っているようでなによりだ」

いやくくくく

「褒めてないっての、早速本編についてなんだが……」

「ようやく禁書目録の世界が終了しましたね」

「これで赤字から解放される……」

「うお！お前らいたのか！？」

今回はあとがきもスペシャルだぜ！

「だそうだ」

「頭痛い……」

「……それにしてもずいぶんと内容が長かったですね」

ぶっちゃけ区切りが見つかなかった

「なんともまあ大胆カミングアウト」

「そんなもんだよ家の作者は」

「それもそうか」

「そして今回バトルが二回ありました……」

「ぶっちゃけ最初の戦いいらなくないか？」

いやいや、彼はこれから出る予定だから出したかったんだよ

「また出るのか……」

「嫌ですね……」

「同感だ……」

「そしてもう一つ、今回地の文が分かり辛い件について」

ぶっちゃけこれも久しぶりに書く＋たま～に書くという条件で執筆

していたためこうなってしまいました

作者の力量不足です

すみません……

「今回やけに大人しいな」

だって……リア友にこのサイトの事教えてそいつの小説見たらさ……
話数が俺のより少ないのに閲覧者多いんだもん……

「まあ、お前の力量不足が原因だろうな」

辞めたい……

「辞めてもらったら非常に困るので無理やりにでも書け」

ハイ……

「こんなもんか？」

「そうですね」

「まだあるよ」

「何ですか？当麻さん」

「な・ん・でこんなに遅かったんだ！」
すみません……実は……

「実は？」

委託販売にてようやく手に入った『妖精大戦争』をめっちゃプレイ
してたせいです

「死ね」

「……駄目人間ですね」

「バカか」

バカじゃないもん！

まあ、とりあえずは一区切りついたのでこれからがんばっていき
たいと思います

「だそうだ」

「何時になるか分かりませんが」

「それまで待っててくれよ」

ではこれにて

「」「ありがとうございます」「」

寒気がするな……

「あたいは……？」

あ……

「あたいの出番は……？」

ごめんなさい、いや忘れていたんじゃない、前も出たし別に良いかなーとか思って……

「もんどーむよう！」

ギヤアアアアア………！

「思い知ったか！あ、後、作者この次の世界の事考えてないらしいよ。時間がかかると思うけどそれまで待っててね」

第十一章 休息（前書き）

今回は元の世界の話です
色々はまたあとがきにて
では、どうぞ

第十一章 休息

「良かった……ついていけた……」

当麻がかなりお疲れになっている

それもそうかと思う

幻想殺しの能力で当麻だけ置いて行かれるかもしれないからな
何にせよ分かった事は、紫さんの能力は多分何でもアリだ

あの人も敵じゃなくて良かったとつくづく思う

「おかえり、任務は……半分達成って所かしら？」

「確かにそうだな……」

紫さんにスフィックスを手渡した

「あら、今回の種は生き物だったのね」

「初めて見つけた時には少し驚いたよ」

まさか生物が種だとは思いもしなかったからな

「まあ、見つけたで良かったよ」

「そうね、ところで……」

紫さんは当麻を見ながら

「この世界に残しておきたい人とかいるかしら、上条 当麻」

「ツカサ、何で俺の事を知っているんだこのババ————」

言いきる前に穴に当麻は吸い込まれて行った

紫さんにその言葉は禁句だ

なんせ心で思うだけで反応するからな

「あああああああああああああああああ！」

ドカンという乱暴な音と共に帰ってきた

「痛ってえ……何しやがんだ！このクソバ（ニコッ）………」

流石に身の危険を感じたのか言うのをやめた

顔が見る見るうちに青ざめている

「当麻、この人が八雲 紫さんだ」

「マジか……」

「ええ、マジよ。で……さっきも言ったけどこの世界に残しておきたい人とかいるかしら？」

「そうだな……残してほしくない人でも良いか？」

「別に構わないけど？」

そして当麻は、ようやくあのビリビリ女から解放される！とか何とか言っていた

「とりあえず、少し時間がかかるけど封印するわ。それまで休んでいて」

「分かったよ、紫さん」

「分かりました」

キノはそのまま教室から出て行った
どうせ陸に会いに行っただろう
シズさんが本当に不憫だ

「ええ、後……ありがとうね」

「え？何が？」

「こんなにも早く住民を見つけてくれるなんて思いもしなかったわ」

「ああ、チルノの事か」

そして周りを見渡すと

「ZZZ……」

のんきに寝ていた

「なんとも自由奔放だな……」

「前からそうだったわよ、この子は」

そういえば聞きたい事があったんだ

「紫さん、チルノって幻想境でどれぐらい強いんですか？」

あれだけ強かったんだ

結構いいところまで行っているものだと思っていた
しかし……

「妖精の中では強い部類には入るけれど……幻想境内では下の中位かしらね」

「え………」

幻想境ってどれだけ化物ぞろいなんだ!?

「でも、そんな事はどうでもいいわね、それより……」

一転、真剣な顔で訊いてきた

「手に入れた情報を伝えるわ」

「……」

ミストの情報

今は喉から手が出るほど欲しいものだ

「一体どんな情報なのですか？」

「順に説明するわ」

そして情報を教えて貰った

「敵の勢力だけ……やはり強者ばかり集めているみたいね」

たまに例外はあるけどね、と付け足した

あのプリニーとか言うペンギンと……あれ？誰だっけ？

まあ良いや、とりあえずあいつらがその例外なのだろうと勝手に思った

「初めて会った時の事を覚えている？」

「思い出したくもないが覚えています」

「その時の二人の情報ね」

あの時の二人の情報……？

「紫さん、もしかしてその内の一人は朝倉 涼子って名前じゃないですか？」

「あら？何で知っているのかしら？」

「実はかくかくしかじかで……」

「……それで伝わると思ってる？」

思っています

ちよつとふざけたので真面目にやります

「実は……」

「禁書目録の世界で戦った、でしょ？ちゃんと伝わっているわよ」
伝わっていた……

良く分かるな、おい

「彼女の情報は知らないわね」

「まあ、そう言うことになります」

「じゃあ、もう一人の情報を言うわ」

こっちの情報が気になっていた

あのキズナを連れ去った実行犯だからな

「もう一人の名前はゼロ、と呼ばれている人物よ」

「ゼロ……？」

一体どんな人物なんだ？

「彼のいた世界では英雄、伝説なんて呼ばれていたみたいよ」

「……」

強者って感じの肩書が二つも聞こえてきた

「でも、この情報もあり役には立たないわね」

「どうしてですか？」

「彼、ミストを裏切って消息不明になっているのよ」

裏切った？何のために？

「それは分からないわよ、流石に」

「それもそうですね」

そして結論を言わせてもらう

「結局あんまり役に立つ情報無いですね」

「……」

紫さんがいじけた

床に指でのの字を書いている

それをジッと見ていたら紫さんがハッとこっちの目線に気付きこほ

んと咳払いをした

「それは置いておいて……実は次に行ってもらおう世界の事なんだけ
ど……」

「次の世界か……一体どこに行くんですか？目標は？」

もうドンと来い、どんな世界でも驚かない自信がある

「次は——————よ」

「え？マジ？」

「大マジよ」

「一体何のために？」

「“鍵”かもしれないからね、彼女達の誰かが」

「それって確証は持てるんですか!？」

一応俺も知っているが……そうとは思えない

むしろ狙われる理由が見つからない

そもそも……

「その世界……戦いとは縁のない世界では……？」

「……貴方は忘れたのかしら？」

「何を……？」

「そんな世界でも戦いはあったって、前に話したはずよ」

そんな事を言っていたっけ？

覚えがまったくないが記憶を探してみると

「あ……」

「思い出したようね、貴方がそんな戦いと縁のなさそうな世界で戦っていた事を」

言われてみればそうだった

昔の俺は世界の改変から救うために戦っていた

それは戦いが日常茶飯事で起きている世界ではなかった

恋愛やコメディが満載な世界でも改変があった

「……分かりました、彼女たち全員の保護で良いんですね」

「分かってくれたようで良かったわ」

準備ができ次第送ってあげるわね、と言っていたので皆を集めて行

こうと思う

しかしなあ……

彼女達の一人が“鍵”の可能性は皆無だと思う

もしも“鍵”だったとしたら……

「一体“鍵”って何なんだよ……」

俺はため息が出るばかりだ

「そう言えば紫さん」

「何かしら？」

「この格好で世界をうろろするのは不味くは無いですか？」

「それもそうね……」

ちよつと考えて紫さんはこう言った

「その世界にあった服装にしましょうか？」

「出来るんですか？」

「私を誰だと思っているの？」

それもそうか

当麻の幻想殺しの能力を無視して此処まで連れてきたもんな

「分かりました、あと一つあるんですけど」

「何？」

「キノの銃の威力、もう少し高めれませんかね？」

そう、キノの射撃の腕に助けられた事は多々あった

が、決定打となる事は一回も無かった

「せめて人外の奴らとかとも戦えるぐらいの威力にはできませんかね」

「でもあまり世界の人々の所有物を変える事は————」

と、そこまで言って何か思いついたらしい

「……待っていてね、後で行くときに渡すようにするわ」

「そっちも解決したって事で良いんですね？」

「ええ」

「じゃあ少しだけ休みます」

「ゆっくり……してもらいたいけど出来るだけ早くね」

「分かっています」

さて、休んだら皆を呼んでくるか

「……………」

「どうした？ 伝説の英雄？」

「お前は奴の手先か？」

「まあ、そうだな……」

そして男は続けた

「奴は恩人だ」

「恩人？」

「創作物の創作物、それが我だ」

「……話が読めないな」

「まあ、良い」

男は構えた

「貴様を連れ戻す、それだけだ。返事は？」

「……断る。オレにはやらなくてはいけない事があるのでな」

そしてもう一人も光り輝く剣を取り出して構えた

とある世界で伝説の英雄と死を操る男が戦いを始めた

第十一章 休息（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

思ったより早く投稿できたく

「寝る時間を削ってか？」

まあ、ぶっちゃけそうだね

「寝ろよ……」

うん、それ無理

「はあ……今回のゲストは……」

「みんなく！ひっさしぶりー……」

「……もうつつこまないぞ……」

「という訳で皆のアイドル、キズナです！」

「何時からなった何時から」

「今、私が決めた！」

「あっそ」

いきなり話を変えて悪いけど始めるよ

「はくい！」

「……」

今回次の世界の所が棒線になっているけど、ちゃんと考えています

「へく！」

ただ……

「ただ？」

その住民たちをうまく動かせるかすっごい心配

「知っている人、多分一杯いるもんねく」

ああ……でも頑張ってます、後悔はしない

「頑張ってますねく」

じゃあ今回はこの辺で

「ありがとうございますく！」

今回あんまり突っかかってこなかったけど、どしたの？
「疲れたから」
そんな理由で参加してくれないのかよ……

第十一・五章 防衛? (前書き)

この章は今まで以上に自己満で、読まなくても全くもって本編に影響はありません

なので変うとか思っても気にしないで読んでください
では、ドゾ

第十一・五章 防衛？

さて、少しばかりの休息を取りますか
そして近くの教室に入ろうとしたら

「ん？」

何だか妙な違和感

どうにも掴みどころのない何かを告げている……
明確ではないが何かを……

そんな事を思っていたら――

自分の真下に穴が開いた

「いきなり!？」

問答無用で落ちていき――

「よつと」

着いたのは紫さんの居る教室だった

「……何かあったな」

そう思いドアを開けると焦った顔の紫さんが居た

「一体何があったんですか？紫さん」

「私の結界が破られたわ」

え？紫さんの結界が!？

「そんな……それってヤバくないですか!？」

「言葉にしている時間も勿体ないわね」

「……確かにそうですね」

破ったら次に考えられるのは――――侵入

この学校のどこかに侵入者が居るって事だ

「チルノ、起きろ!」

「ん？何？ツカサ？」

「ここのピンチだ、手伝ってくれ!」

「ん？良く分かんないけどあたい頑張るよ!」

よし!後は……

「侵入者の場所は感知出来たわ！そこに移動しながら彼らも連れていきましよう！」

「ああ」

「……そして現在に至る訳ですね」

「もう少しで着くのか？紫」

さすがにこの二人も緊張しているようだな……

「その角を曲がれば居るわ」

「皆、気を引き締めて行くぞ！」

「分かっています」

「つたりめーだ！」

「おー！」

「来たわ！」

そしてその人物と対面した

「「「「……」」」」」

見た目は普通な感じか？

でも紫さんの結界を破ったのは確かだ

油断するとやられるはず……！

男は口を開いた

「…あの…警戒を解いてくれませんか？」

「出来ると思う？」

「…ですよ」

何かを言おうと口を動かしていたみたいだが……

それが詠唱とかだったら非常に厄介になるはず

なので先手を取らせて貰う！

「当麻とチルノは俺と一緒に、二人は援護を頼むぞ！」

「ええい！人の話を聞けよ！」

男はこっちの攻撃を避けるだけで何もしてこない

時間稼ぎが目的なのか？

何かを叫んでいるようだが聞き取れない

むしろ聞く暇が無い

一瞬でも隙を見せたら負けるような気がしたからだ

「どんだん学校壊れてるぞ！？良いのか！？」

そんな事を言っていたがそれについては問題ない

「紫さん！」

「分かったわ」

男の真下に穴が開く

紫さん曰くそこで戦えば全力でも大丈夫でしょう、との事

「俺達も行きましょう」

「ええ」

そしてそこに移動した

とりあえず五人で囲む形になっている

「ここならゆっくりできるわよ」

紫さんが笑っているがこれは敵に対して見せるような笑いだな

俺に対して向けられた日には頭が真っ白になって何もできないだろうな

とりあえず、聞きたい事があったので聞く

「お前：奴らの仲間か？」

「やつら？誰だよそれ？？」

「嘘おっしゃい。それほどの実力者、ミストの連中が放って筈が無いもの」

「いや、真面目に知らないし：こっちは攻撃意思も無いのに――――」

「うるさい！くらえー！」

今一瞬平和的解決が出来そうな言葉が聞こえたような気がしたが、チルノの大声でかき消された

すると……

「：いい加減にしろよ」

雰囲気が変わった

あの変態のような変化の仕方だが……

「どいつもこいつも人の話を聞かねえで……！」

比べ物にならない……！」

「……凄い魔力ね」

紫さんも驚いているようだ

よく立っていられるな、俺

「こっちは何もしてねえのに人の顔見りや攻撃しやがってよ！」

そしておもむろに手を動かし

「悪魔の方がまだましだぞ……！ 『天罰』……！」

その言葉と共に上から光が降り注いできた

前兆があつたので当麻を除く全員が避けた

光は当麻に直撃したが幻想殺しがあるから大丈夫

と、踏んでいたが……

「グハッ！？ 幻想殺しが反応しない！？ 何でだ！？」

何故だ！？

あれはどう見ても幻想と呼べるような技だぞ！？

「一気に形勢が逆転したような気がします……！」

流石に俺もそう思った

「くそ！ まだだ！」

当麻が突撃する

しかし……

「出直してこい……！ 『地母の晩餐』……！」

男はそう言い放つと俺達の足元にヒビが入る

「地面が割れる……！」

ここは紫さんの穴の中じゃ無いのか！？

奴も何でもあるだな……！」

「やば……！」

「当麻！ クソ！」

落ちそうになっていた当麻を何とか引っ張って助けた

「サ、サンキュ……！」

「今はそんな事を言っている場合じゃ無いだろ！」

当麻を助けに行っている内に男にチルノが攻撃を仕掛けていた
「くらえ〜！」

無数の氷の塊が飛んで行く

あそこまでの力を持っていた奴だ

朝倉 涼子と同じ様に避けるのかと思った、が

奴はそこから一步も動かなかった

チルノの放った氷が全て奴の体に直撃した

しかし……

「効かん！！」

奴はそこでピンピンしている

それどころか今まで奴についていた傷が全て無くなっていた

「あたいの弾幕が効いてない！？」

「これならばどうですか？」

いつの間にかキノは後ろを取っていた

そしてカノンを撃とうとした時

「『フォッグブレス』！！」

奴は大量の煙を放った

「つく……これでは狙いを定める事ができませんね……」

「げほげほ！何！？この煙！」

このままだと連絡を取る事が難しくなってしまうそうだな

とか思っていたら、その煙が紫さんが出した穴の中に吸い込まれて
いった

「少し黙って見てろ！『ジャベリンレイン』！！」

すると奴の体から多量の光が襲いかかってきた

俺は何とか、あの感覚に身を任せて全てを避ける事が出来たが、他の
皆は直撃したらしい

「皆、大丈夫か！？」

「ええ、なんとか」

「死……死ぬ……」

「キュ〜〜〜〜……」

「私も大丈夫よ」

一人以外は無事なようだな

「だけど……あの光は厄介ね……能力が使えなくなったわ」
「それって大丈夫なんですか!？」

「……しばらく貴方達で戦っていてくれないかしら？」

「……作戦でも？」

「ええ」

俺はその紫さんの言葉を信じた

「キノ、当麻、時間を稼ぐぞ」

「分かりました」

「分かった」

そして奴に向かって俺たちは突撃した

「……っ」

キノが発砲した

奴はそれを避けようもしない

「まとめて消えろ……」

奴の口当たりに高密度のエネルギーが溜まっていた
俺の感覚が今までにないほどの緊急信号を放っていた

「不味い……あれはヤバイ!二人とも避ける!」

しかし、少し遅かった

「『至高の魔弾』!!」

その瞬間、奴の口に溜まっていたエネルギーが解放された
全てを飲み込む漆黒の光線だった

そしてそれは二人を容赦なく飲み込んだ

「キノ!当麻!」

「ぐ……ああ……!!」

「かは……」

「ぐ……貴様……!!」

絶対に倒す!その思いだけで奴に俺は突撃していた

「うるせえ!『マグマ・アクシス』!!」

奴の両手に炎が出現し、それをこっちに放ってきた

「熱っ……！」

炎をかすった

少ししか触れていないのにかなり熱かった

だが、俺はなにがなんでもこいつに一発喰らわせたかった
しかし……

「ぐあ！」

その思いも空しく炎に直撃

もう気力が残っていなかった

その時、救いの声が聞こえた

「これでどうかしら？」

「……………！」

紫さんが手を奴にかざすと奴はそのまま倒れた

やっこの思いで体を動かし、紫さんに聞いた

「何を……したんですか……？」

「理性と本能の境界を弄らせて貰ったわ、理性を全開にしたらいき
なりの事で失神したようね」

「助かった……のか……？」

「ええ、でもこれでも全力は出してはいないでしょうね」

これが全力では無いって……何でだ？

「周りを見てみなさい」

そう言われて見渡すと倒れている皆が居た

「全員死んでいないわよ」

……確かに、あれだけの技を喰らったにも関わらず、俺たちは全員
生きている

「……皆を起こすか……紫さん、監視をお願いしますか？」

「ええ、早くしなさい」

そして俺は皆を起こそうとした、が

「一つだけ良いですか？」

「何かは知らないけど……まあ、良いわよ」

紫さんの許しも得たので俺は奴に近づいて顔にパンチを喰らわせた
ハッハッハ、ざまあみろ

「……貴方って結構陰湿ね」

紫さんが何か言っていたが気にしない
さて、皆を起こしに行くか

さて、所変わって教室に俺たちは来た

無論、あの不法侵入者を連れて、だ

「あら？目覚めたのかしら？」

「……んあ？」

奴が目覚めた

さっきの戦いからは想像できないほど抜けた声を出した

「あゝ……ここは一体どこ？」

ここを何処かも知らずに入ってきたのか？

「ここは俺の学校だ……んで、お前は一体誰だ？ミストの手先じゃないのか？」

「僕は『八雲 拓海』、ミストなんて知らないし……君たちは誰？」

「私は八雲 紫、左から順に、ツカサ、キノ、上条 当麻、そこで
寝ているのがチルノ、よ」

俺達の名前、正確にはキノ達の名前を聞いていたところ位から口を
開けてアホみたいな顔をしていた

「……………」

「なあ、こいつ何でこんな顔してんだ？」

「……ボクにも分かりませんね」

キノと当麻がそんな話をしていた

まあ、確かに何でこんな顔をしているのかは非常に気になるが無視
の方向で

「あゝ、待って、どういう状況？」

「それはこっちが聞きたい位だ………」

話してみればこちらと戦う意思は無かったらしい

そういえばさっきそんな事を言っていたような気がするが……

勝手に入ってきたからにはそれなりの対応をするしかない訳で……

「あゝ、成程、で？何の用？」

なんか勝手に納得している八雲、いや、拓海と呼んだ方が良いかと
りあえず何の用と言われても……

「いや……さっき結構アレな事になってたからさ」

「え？ああ、アレね。もう良いよ、キレた僕も悪いしさ」

「そうか、なら良いが……」

そして拓海はまた上の空と言うか何と言うか……

しばらくボーっとしているような状況が続いていた

そして唐突に喋り始めた

「分かった、なら腹割って話し合おうじゃないか」

「腹割って……」

いきなり何を言い出すんだこいつは……

「君達も世界を渡っているんだって？」

その言葉を聞いてキノと当麻が身構えた

だが俺は聞き逃さなかった

「も？って事はお前も渡る力を持っているのか？」

「うん。まあ、君達みたいに危機的な理由じゃ無くて旅みたいな感じ
じだけど」

「気楽だな、おい……」

「そりゃ旅ですから」

胸を張って答える拓海

こいつって人物を掴めねえ……

「その事は誰から聞いたのかしら？」

紫さんが拓海に質問する

「そうだな、仲魔に何かもの凄い奴がいるんだ」

「仲間？もの凄い奴？」

何となくだが当麻と拓海が言った“なかま”と言う言葉には何か違

うような感じがした

「あゝ……召喚した方が早いな『ルシファー』!!」

その瞬間、教室の中に落雷が発生した

そしてその落雷の煙の中から出てきたのが――――

「やあ、どうも」

どう見ても子供だった

「……この子供がか？」

当然のように怪しむ様な目線を見せた当麻

「まあ、うん」

「「「「……」」」」

「……その目は止めてくれない？」

そんな感じで拓海を見ていると唐突にそのルシファーとか言われていた子供が喋った

「ま、僕としてもなめられるのは心外だから……ちよつと本気を出そうか？」

すると先ほどの拓海のように纏っている空気が激変した

周りの空気が歪んで見え、寝ていたチルノが起きだした程だ

「納得してくれた？」

「……ええ、よく分かりました」

キノが俺達を代表するかのように返事をした

それにしても……一体何者だ？こいつは

「インデックスが居れば面白い話ができそうだけど……その本人さんは何処？」

「インデックスまで知ってんのか……」

力もあり、知識もある

知識と言うか違う世界の事まで知っている

ここまで来ると紫さん以上に強いんじゃないのか……？

とりあえず嘘を言っても仕方ないな

「……奴らにさらわれたよ」

「さらわれた……？ああ、例のミストとか言う集団にか」

「拓海、お前は一緒に来るか？」

そして予想通りの返事

「僕は良いよ、行こうと思えば行けるし、頑張ってね」

「ハハッ、お気楽で良いな、世界の旅人さんは」

「否定はしないよ、ま、全部が終わったなら一緒に行くのも良いかもね」

「考えておくよ」

さて、行くか

……あれ？一緒に行く？

俺も連れて移動できるのか？

……ま、深くは考えないでおくか

「……何であんなことを言ったんだい？」

「ん？」

「一緒に行くのも良いって」

「ああ、アレ？」

「流石の僕でも二人は移動するのは無理だよ」

「あれ？お前は気付かなかったのか？」

「……何に？」

「あいつは凄いつて事に」

「……何を言っているのか良く分からないな」

「ま、いっか、とりあえずもう少しだけここに居ようかな？」

「……決めるのは君だけだね」

第十一・五章 防衛? (後書き)

くシャインとツカサのあとがき劇場く

完・成!

「オメデトー」

反応薄ッ!?

「ま、お前にしては上出来だな
だろだろ!

「調子に乗んなクソ」

えく…………

「このコラボやろうと思ってどれだけ経ったか知っているのか?」
過去の事は気にしないので

「……ハア、とりあえず、ゲスト呼ぼうか」

そだねー

「それにしても今回のゲストはスペシャルだと言っていたが……
誰なんだ?」

ふふふ……今回はお前もビックリの人物だ!

「今更誰が来ても驚かないけどな……」

そんな事を言っているのも今のうちだ!

「良いからさっさと呼べよ」

では、どうぞ!

『どうも、八雲 楠乃です!今回はスペシャルゲストとしてこの
作品にお邪魔することになりました、いやはや驚きですね、こり
ゃビックリ』

「うおおおおい!?作者!?!」

何だよ?うるさいな

「これが驚かずにいられるか!」

良いじゃん

「もう良いや……初めまして、八雲 楠乃さん」

『やつほ。遊びにきたよ?』

「何で疑問形? まあ良いか。今回はこんなクソみたいなのとコラボしていただき光栄です」

ツカサくん!? クソとか言うなよ! へこむじゃん!

『別に良いよ? クソでも良い奴は良いもんだよ……多分』
あんさんまで俺を不安にさせるセリフを言わんという

「アホはほつという……八雲 楠乃さん、何でコラボしよう?」

『さあ? ww』

「え……?」

『いつの間にかやったって』

「そんな軽いノリでこの作品と……?」

『私の信条は“面白ければ何でも良い”さ!』

「……こいつがうちのアホと友人なのが納得できたような気がする」
まあ、二人とも駄目人間ですし

『アホを自覚するかどうかで世界は変わるんだよ? レッツ! アホ
同盟! ww』

(駄目だこいつら、早く何とかしないと……)
ん? 何か言った?

「いや、別に……」

何か気になるけど良いか、じゃ、トークスタート

『あいさ!』

「ハア……とりあえず今回の内容について」

ツカサの視点で書いたバージョンです! セリフなどは多少違うが内容的には一緒だと思う、多分

『正直に言えば“物凄く色々違うんだけど?” と言いたいんだけどさ? 人の小説は人のだから面白いんだし、良いと思うよ』

「らしいぞ」

マジか……

「マジだ」

……くすん

「落ち込みやがった……ま、無視の方向で。それにしても遅くなっ
てすみません……」

『ん、それはそっちの用事もあるでしょ？それを求めるのはお門
違いってやつでしょ……何かまともな発言しちやったなww』
「いやいや、貴方がやってからかなり経っていましたから……もう
一つ聞きたいのですが……」

『なんじゃい』

「このアホから聞いたのですが……また、コラボやるって本当です
か？」

『そうじゃなく、今回は儂がシナリオを書いたんじゃがな？今度は
シャイン先生に書いてもらいたいんじゃないよ』

「そうですね。おい、アホ」
ぐすん……何？

「今度はお前がシナリオ書くらしいな」
そうなんだよ……

「……実現は遠そうですが？」

『まあ、期待してやるよww』
頑張るけど期待すんなよ……

「本当に何時になるんだろうな……」

とりあえず、今執筆中の世界が終わらないと無理。時に八雲さんや
『何ですか？』

今後ともよろしくな

「お前らしくねえセリフだな……」

そこ！突っ込まないの！

「へいへい、こんな作者ですがよろしくお願いします」

『あいさ！了解！！』

じゃあ、この辺で終わるか

「そうだな、じゃあ今回の締めは八雲 楠乃さんに頼みますか」
そーだな、じゃあ五文字で締めろ、八雲

『これからもこの作品達をよろしくお願いいたします……って五文字！？無理ですよ！？むしろ出来る人を見たいよ！！』という訳でシャイン先生頑張って！！』

やっぱ無理があったかww

「お前……もう良いや。今回はこの辺で、ありがとうございました」

なあ、八雲

『ん？どした？』

ネタ探して難しいね……

『あらま。ネタ探しね、確かに難しいよね。でもそれが？どうかしたの？』

……無いのよ、次の世界のネタが

『あらまwwじゃあ○○でもやってみたら？私も一回やってみただけど……すぐに挫折しちゃったんだよね』

○○○○作品か……個人的にはやるのは気が引けるけどな、詰まりすぎたらそうするか

『嫌なら○○○○はどう？後は……○○○○、○○○○○○○○、○○○○位かな？』

成程な、聞きたい事はそんだけ、サンキュー

では、また対談出来る事を願う！それでは！

『んにゃまたね』

この対談は少し脚色してありますがリアルでやりました

ちなみに○にしているのはもしかしたらネタばれになる可能性がある
るのでそうしました
それだけ

第十二章 転校（前書き）

今回一番読みづらいかもしれません……

第十二章 転校

「さて、集まったわね」

「今度はどんな世界なんだ？」

当麻がやる気満々だ

「気合いが入ってんな」

「早くインデックスを助きたいしな。こんな所でうじうじしてられるかって」

なるほど、やはり大切な人なんだな

「ところでキノ」

さっきから少し気になっていた

「何で変な顔をしているんだ？」

「……………さっきシズさんの所に行ってきたのですが――――」

キノが到着すると

「――――！！」

「――！！」

まだ喧嘩が続けている二人(?)がいた

「…………その辺でね、エルメス」

「あ、キノ、お帰りー」

「お帰りなさい、キノさん」

「ええ、ところでシズさんは？」

「王子様なら今はこの見回りをしているよ」

「何時、敵が来ても対処できるようにとの事です」

「ありがたいですね」

そして何となくだろう、周りをキノが見渡していると

「……………？」

キノは向こう側の教卓に乗っているものを見つけた
「どうしたの？」

「いや……あのリングを見ていると何だか落ち着かないと言うかなんと言うか……」

教卓の上にはリングが乗っているだけ、それだけなのに無性に気になっっているキノ

「ふーん……さっき見たらいつの間にかあったけどねー」

「私も今気付きました」

「気にしなくていいんじゃない？」

「………そうだね」

「リング……ねえ」

俺と当麻はため息をつく

「どうかしたの？」

不思議な顔をして見ているチルノ

この子は知らないから良いだろう

むしろ知らないで生きていてほしい

あの変態の事は

「まあそんな事よりキノ、紫さんが渡したいものがあるらしいぞ」

「ボクにですか？」

「ええ」

そして紫さんは懷から黒光りする塊を渡した

「これは……」

確認するように取り出すキノ

そう、外観がそっくり、いや、むしろ同じと言っていいだろう

カノンがそこにはあった

「カノン……一体どうやって？」

「違うわよ、その銃の名前は」

「名前が違う？」

一体何だって言うんだ？

「その銃の名は………」

俺たちは紫さんの言葉を聞くために集中していた

「ビッグカノン、魔射滅鉄、よ」

そして全員（キノを除く）でずっこけた

「何ですかその変な名前は！」

人の事言えないと思う気がするけどそれでも言いたい！

「し、仕方ないでしょう！私が付けた訳じゃないんだから！」

「この名前付けた奴って一体……」

顔が見てみたい……

「………呼び辛いのでカノンで良いですか」

一人淡々と紫さんに話しているキノ

「え、ええ」

「そして一体どう違うのですか？」

「簡単に説明させて貰うと、使い心地はそのまま威力が上がった物ね」

「………良いのですか？」

「ええ、（元々は貴方が使っていた物ですもの）」

「何か言いましたか？」

「いえ、何でもないわ」

「これで用事は終わりか？早く行こうぜ」

当麻は急かすがまだやることがある

「次の世界に行く前にちょっとした準備がいるのよ」

「準備？一体何なんだよ？」

「貴方達の服装よ」

「何でそんな事にしなくちゃいけないーんだ？」

「当麻、次の世界の目的を達成するには必要なんだ」

「具体的に頼む」

「簡単に言わせてもらおうと学校に潜入してもらおうからよ」

「……成程、確かにボク達の服装ではおかしいですからね」

学校に入るのに私服でいたら不法侵入以外の何者でもない

「てことはその学校の制服か？」

「そう言う事になるわね」

穴での移動が終わったらもう変わっているらしい

まあ、なんとも楽なこって

「じゃあ、お願いします」

さて、心の準備をしておきますか

「それでは、“鍵”の候補の保護と種の回収、お願いね」

「分かりました」

「では、四名様ご案内」

その瞬間真下に穴が開いた

まあ、もう予想通りだったので俺とキノは落ち着いていた、が

「またかよ!!」

当然、当麻は知らないのもまた同じような目にあっていた
さて……どうやって保護すっかな

それが一番難しいな……

「私達のクラスに転校生が来るんだって」

「そうらしいですね」

「そうなの？すっごい楽しみ」

「どんな人だろうな。男かな？女かな？」

「優しい人だと良いな」

「そろそろHRが始まりますよ」

「分かったよ」

そして少女達は自分の席に座りに行った

「いつまでも喋つとらんと席に着け」

「せんせ、今日、転校生が来るって本当ですか？」

「お、良く知っとるな」

「男ですか女ですか？」

「両方や」

「二人来るんですか？」

「まあ、そうなるわな。じゃあ入ってこーい」

うわあ……まさか転校生を本当にやるとは……
結構恥ずかしいから注目は浴びたくねえな……

「なあ、キノ」

「何でしようか？」

「打ち合わせ通り頼むぞ」

「分かっています、他の物語が干渉しすぎるのはいけませんから」

「じゃあ、入るか」

「ええ」

教室のドアを開けた

そして……

「今日から同じクラスになる、八雲 司です」

「同じく八雲 木乃です」

自己紹介をした

性をこれにしているのは出来るだけ住民にばれないように工夫した
結果らしいが……

俺たちは全員親戚なのか？

説明が非常に面倒そうだ……

あ、遅れたがここの学校の名前は……

陵桜

そう、ここはらき☆すたの世界だ

一体これからどんな事が待ち受けているんだろうな〜とか思っていた
そしてクラスを見渡せば……

青いアホ毛のチビ、黄色いリボンを付けた紫の髪の子、ピンクでウ

ェーブのかかった眼鏡をつけた子

彼女達が“鍵”の候補、か

とりあえず仲良くなるか

キノを通して……

今更だが、俺は……初対面でいきなり女の子に話しかける勇気が無
い！

……へたれとも何とでも呼んでくれ

一方、違うクラス

「八雲 当麻だ。よろしくな」

「あゝ……八雲、早速で悪いんだが……」

「何ですか？桜庭先生」

「……倉庫に行って来て、机と椅子を持ってきてくれ」

「へ……？」

「手違いで準備出来ていなかったんだ。まあ、お前男だし案内を一人つけるからよろしく」

「—————」

流石に初対面の人ばかりのところでは叫ばなかった

しかし、今までなら言っていただろう、不幸だ、と大声で

違う学年

「あたいはチルノ！よろしく！」

普通に本名を名乗っていました

ちなみに背中に氷の羽は無い

今は能力、飛ぶ力も無くなっている

紫の力により戦闘になった時にのみ出せるようになってる

一言で表せば、チルノはただのバカとなった

その証拠に黒板にはひらがなで『さるの』と書いてあった
クラスからは乾いた笑い声が上がっていた

『奴らが動き出した』

「で？私はその世界に行けばいいのかしら？」

『お前は情報を集めておけ、他を送る』

「つまらないわね」

「そんな事を言わないで下さい、朝倉さん」

「あら、貴方が行くのかしら？」

「ええ、呼び出されましたから」

『その通りだ。行け』

「分かりました」

そう言うとその人物は消えた

「でも、彼女、彼らと遠くも無い繋がりがあるけど？」

『気にする事は無い、あの人物が伝えている事は無いだろうからな』

「まあ、確かにそうね」

第十二章 転校（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「……ちよつと展開に無理が無いかな？」

そこは自分も分かっているつもり

「ハア……このアホの世界観について来れている人物が居るのかどうかな……」

読んでくれている人には感謝しかありません

「今回のゲストは紫さんなんだが……何しているんですか？」

「これ？これは作者が現在進行形でやっているゲームよ」

ちよつと紫さん！何勝手に俺の私物を使っているんですか！？

「一体何やってんだ？」

「最近発売されたポケモンの最新作ね」

「黒白か……こんな物に集中していたから文を考える時間が無くなって今回みたいになるんだと俺は思うぞ作者」

うるさいうるさい！

「お前がやってもキモいだけだ」

ひどひ！

「でも面白いわよ、ポケモン」

「それはまあ、俺も同感ですけどね」

でしょう！

「でもそんな事ばかりやってないで少しでもこの小説の方向とかを考えたさいよ」

「そして頭ん中にあるシーンをさっさと出せよ」

そ、それについてはまだもう少し時間がかかるかと……

「……じゃあ今までどうやって書いていたんだこの小説」

その場のノリでこんな感じかな……って書いていたらいつの間にか出来た

「……ある意味尊敬するよお前」

いやあ

「あと、何で俺は彼女達を知らないんだ？」

それはお前は電撃文庫の本をいくつか読んでいるだけだからだ！

「それだけの理由でか！？」

うん、設定上、お前はらき☆すたは店頭でちらちらと表紙を見ていただけだからな

「なんか中途半端に知識持ってたんだな、俺」

ぶっちゃけプリニーを知らない時点で中途半端な知識だと思うがな

「それは知らない人は知らないだろう」

「今回はこの辺で終わりにしましょう」

「そうだな」

「「ありがとうございます」」

ちなみに前の章で戦闘していた人物が分かったらその小説を相当読み込んでいる人だと俺は思います

あとこれ重要な事なんですけど……次の章で学校案内があるのですが、その時にメインで案内してもらうところを何処にしようか迷っています

それは……誰か東方のキャラを出そうと思っているからです

案としては職員室、図書室、保健室あたりです

どれが良いか、もしくはそれ以外で何か案がありましたら作者の方にまで何かしらの方法を使って連絡してもらえると非常に作者はうれしいです

では、次章で会いましょう

第十三章 案内（前書き）

今回長い上に会話文が多く読みづらいと思います……
では、どうぞ

第十三章 案内

で、クラスに潜入できた事は良いんだが……

「何処から来たの？」

「何でこの学校に来たんだ？」

「趣味とかってある？」

「誰か好きな人っていた？」

「部活は何かやっていたんだ？」

……正直トイレとかどこか密室に逃げ込みたい
そしてキノは……

「……………」

近寄るな的なオーラを出している

当然の如く質問がし辛い、よって俺の所に集中して来るのである
ってこと

これじゃあ彼女達に近づく事が難しそうだな……
と、思っていると

「やあやあ、木乃ちゃん」

「……何でしょうか」

あの青髪のアホ毛を含む三人が話に行っていた
あの状態のキノに近づくとは……

勇気があるな、彼女達は
クラスの質問に適当に答えながらあちらの会話に集中させて貰うと
するか

「変わった名前だね」

「……良く言われます」

「木乃ちゃんって何か得意な事ある？」

「……射撃、ですかね」

「だって！こなちゃん、お祭りで一杯取って貰おうよ」
「そうだね」

「あの、あそこで質問をされている方とはどんな関係ですか？」

「親戚みたいな感じです」

「そうですか」

「そう言えば、彼、つかさと名前一緒だね」

「そうだね」

「何か運命とか感じちゃったりしてない？つかさ？」

「そ、そんなことないよ」

「結構かっこいいし、内心満更でもないんじゃないの？」

「もー！」

「その辺にしておきましょうよ、泉さん」

「それもそうだね」

「こなちゃん！」

「はっはっは」

「……何故ボクと話そうと思ったんですか？」

「うお！？リアルボクっ子キタコレ！」

「何ですか？」

「いやいや、こっちの話だから気にしないでくれたまへ」

「そうですか、そしてどうしてですか？」

「いや、転校生と仲が良いって結構先生からの評価上がりそうじゃん」

「……それは無いと思いますよ、泉さん」

「そ、そうなの！？」

「私もそう思うよ」

「つかさまでそう思うの！？」

……楽しそうだな

俺もそんなオーラ出しておけばよかったかな……

……無理だな、そもそも話す事が出来ないような気がする

「そうだ、みゆきさん」

「何でしょう？」

「木乃ちゃんと向こうの司くん連れてさ、放課後にでも学校案内し

ない？」

「あ、それいいかも」

「確かにそれは良い考えですね。木乃さんは……」

「大丈夫ですよ」

「じゃあ放課後！二人に学校案内してあげよう！」

「おう！」

願ってもいない事だな

接点を作ることが出来たみたいで良かった

後の問題は……

「――――」

「――――」

「――――」

授業が始まるまでこの質問地獄をどう切り抜けるかだな……

当麻は倉庫に机を取りに行っていた

「ここが倉庫よ」

「ここか、サンキューな、柊」

「また苗字で言ってる。私は同じ学年に双子の妹が居るから名前で呼んでって最初に言ったでしょ」

「そうだったな、かがみ」

「それでよし」

そして二人は倉庫に入った

「これかな？」

「きつとそうね、八雲」

「……あのさ」

「何よ？」

「俺以外にも八雲って苗字の奴が居るから俺も名前で呼んでくれ」

「……本当に？」

「俺は至って真面目だ」

「……ハア、分かったわよ。当麻」
「サンキュ」

当麻は意図してやっている訳ではないのだろうが順調に仲を深めていた

一学年の教室での会話

「ねえ、チルノちゃん」

「何？ ゆたか？」

「今日の放課後、学校案内してあげるよ」

「ホント！ 行く行く！」

「……私もついて行く」

「ありがとう、みなみちゃん」

「みなみ、ありがとう！」

「……」

「そういえば、お姉ちゃんのクラスにも転校生が来たって言ってたかな？」

「……一緒に案内してもらおう？」

「それも良いかもね！」

「あたいも良いと思う！」

チルノは非常に仲良くなっていた

で、現在は放課後に至る
授業風景？

そんなのを話しても意味なくないか？
強いて挙げるとしたら……

「泉、寝てるとはええ度胸しとるな」

「痛い！」

泉の頭にゲンコツが降り注ぐ

「泉、寝てるんなら私の話を聞け」

「痛ッ！」

泉の頭に出席簿が落とされる

「泉、私の授業で寝るとはな……」

「や、やめて下さいよ先生……もう二回も喰らってしまして……ですから……」

「問答無用！」

「痛ったー！ー！」

泉の頭に先生が頭突きをする

……教師って暴力を振るって良いんですってわけ？

まあ、そんなもんだな

「何ボーっとしてんの？司くん」

「いや、今日は泉が殴られてたなって思ってた」

「それについては触れないでよ！」

「あえて触れさせて貰った」

「酷ッ！」

と、何とか仲良くなる事に成功した

「それにしてもお姉ちゃん遅いな」

「かがみが放課後になっても来るのが遅いとは……何かあると見た！」

泉の目が光っていたのを俺は見逃さなかった

「ただ何か仕事を頼まれただけだと俺は思うぞ」

「私も司くんと同じ事考えてたよ」

「ボクもそう思います」

「私もですね」

そしてガン！という効果音がバックにつきそうな位なりアクションを取った

「私も少しこんな発言は自重しようかな……」

「そうしろ」

「そういえばかがみさんのクラスも転校生が来たとか言っていたよ
うな——」

「おい、こなた、つかさ、みゆき」

「噂をすれば何とやらだねえ」

「どうやら向こうから来てくれたみたいだな」

「ごめん、何かこいつの案内を頼まれちゃってさ……」

「こいつって酷いな」

「どうやら当麻も仲良くなる事に成功したみたいだな」

「それって今から？」

「ええ、そうね」

「じゃあ一緒に行こうよ」

「どう言う事？」

「この二人を案内しようと思っていたんだ」

そして俺とキノを指差した泉

「八雲 司だ」

「八雲 木乃です」

「へえ、あんた達同じ名字なの？」

「まあな」

「そうですね」

「と、言う訳で人数が多い方が面白いし一緒に案内しない？」

「確かにそっちの方が良いかもね」

「ところでお名前は？」

「あ、悪かったわね二人とも。私は柊 かがみ。その柊 つかさ
の双子の姉よ」

「なるほど、よろしくな、柊」

「あ、出来ればかがみって呼んで。どっちを呼んでいるか分かんないな」

くなるから」

「そうか、分かったよ、かがみ」

「よろしく願います、かがみさん」

「よし、で……あんたをどう呼ぼうかしらね」

「お、俺？」

「そう、あんた」

何で俺の呼び方でそんなに悩むんだ？

「名前が一緒だからよ」

「……ああ、そういう事か」

姉だから妹の事を呼び捨てで呼ぶ事は多いだろうしな
同じ名前だと確かに困りそうだ

「とは言っても良い案がある訳じゃないし、あんたとかお前で良いぞ」

「それで良いのかあんたは……」

別に困る訳ではないからな

「まあ、とりあえず案内しようよ、お姉ちゃん」

「それもそうね」

「それじゃあ私に付いてきたまへー！」

「……あんたに任せるとロクなことになりそうにないから後ろでゆつくりしていなさいよ」

「酷っ！」

そうして学校案内が始まろうとした時だった

「ツカサーーーーーー！」

「グホオオオオオ！」

いきなり俺に向かってタックルが飛んできた

「な……何してんだ……チルノ……」

「あたいも一緒に案内してもらう！」

話が見えないのだが……

「ま、待って……チルノちゃん」

「……大丈夫？ ゆたか」

「へ、平気…」

チルノの走ってきた方向から泉よりちっちゃい女の子と無表情の子が来た

「あ、ゆーちゃん、この子誰？」

「こ、この子は八雲　チルノちゃん。転校してきたから学校案内しようと思って…」

「……泉先輩のクラスにも転校生が来ると聞いたので一緒に案内してもらおうと思って此処に来ました」

「なるほどね」

納得する泉

（同じ名字で同時に転校してきた……これは何か事件みたいな事が絡んでいると見た！）

「どうした？ 泉」

「何でもないよー」

相変わらず読めない奴だな

「こんな所でダラダラしていても何も無いし案内しましょ」

かがみの言葉でようやく俺たちは動き出した

教室から始まり、実験室、図書室、音楽室等々……

普通の学校にあるような設備はほとんどあった

そして今居るのが……

「ここで最後かしらね」

職員室である

まあ、ここでの確認することは教師が何処に居るかぐらいか？

説明する事は少ないはず

だが俺は聞きたい事があった

「なあ……つかさ？」

「あ、何？ 司くん」

「泉に攻撃していた先生を教えてください」

「ちょっと司くん！？つかさ！言わなくて良いから！」

「分かったよ」

「やめてー！」

……面白い

しかし、名前が一緒だと分かり辛いな

俺の呼び方とか考えといた方が良いかな？

「まずは黒井先生だね」

「うちのクラスの担任だろ」

「ちなみに私と同じネットゲやってるよ。クリスマスとか正月とかもやってたりするしね」

教師よ、それで良いのか？

「次が桜庭先生だね」

「俺とかがみの担任だな」

「最初に見た時はびっくりしたな」

結構身長が小さかったので
本人にはとても言えないな

「最後が最近ここに来た、確か……」

「上白沢先生ですよ、つかささん」

「あ、そうだったね」

「もうあの頭突きは勘弁して欲しいもんだよ」

「そんなに痛いのですか？」

「一発でたんこぶ物だよ」

むしろ頭が割れたかと思うよ、と続けた

そんな話をしていたら

「……お前達、もうとっくに下校時間は過ぎてるぞ」

「すみません、上白沢先生。今日転校してきた彼らに学校を案内してまして……」

「そうか、理由があるなら良いんだ」

そうして笑いながら話している

あの頭突きは怖いかなり良い先生だと俺は思っている

「後ろに居るのがその彼らなのか？」

「ええ、そうですね」

「そうか……ん？」

そして上白沢先生は一点を見つめている

その目線の先には――

「ゆたかく、あたいをおぶってよ」

「もうちよつとで終わりだと思いうから頑張ってよ」

「……そこに泉先輩達が居るから」

チルノ達が居た

気にする事もない風景だと思いうけどな

しかし……

「これで確証した……」

「ん？先生、何か言いましたか？」

「……泉、柊姉妹、高良。八雲達を残して帰ってくれないか？」

後ろで色々やっている二人も連れてだ、と続けた

「別に良いですけど……何ですか？」

確かに、何故彼女達を帰さなければいけないんだ？

「……教師から言わなくてはいけない事もあるからな」

……何か苦しい言い訳に感じる

一体何をしたいんだ？

「うーん、ここで断るとか言ったら先生どうするの？」

「泉の成績を落とすだけだ」

「職権乱用してませんか!？」

しかし、本当にされては困るのか泉は

「さあ!皆!帰ろうか!」

「……あんたやっぱ本当に下げられたら怖いからでしょ」

「黙秘!さあ!ゆーちゃん!帰るよ!」

「あ、待ってよお姉ちゃん!」

皆を連れて帰っていった

「じゃあね、チルノちゃん」

「バイバイ！」

皆を連れて帰っていった

「一体何の用ですか？ 上白沢先生」

キノが代表してそう言った

するとこんな言葉を先生は言い放った

「八雲 紫を知っているか？」

その瞬間、俺たちは身構えた

「その様子では知っているようだな」

「先生、何であんたは知っているんだ？ そんな事」

そして一触即発の雰囲気の中

「あ！ けーねせんせー！」

ブチ壊すような言葉が聞こえた

けーねせんせー！？

何でチルノは知っているんだ！？

何でこんなに親しげなんだ！？

「一体こんな所で何をしてるの？」

「いや、こっちが知りたい位だ。一体何がどうなっているんだ？」

そして今のやり取りで予想した事を聞いてみた

「先生ってもしかして……幻想境の住民なんですか？」

「……まあ、そうなるな」

また見つけた、幻想境の住民を……

説明するのが面倒くさそうだな……

「……………つく」

「最初の勢いはどうした？ 伝説の英雄？」

男はそんな言葉を言い放った

「我に殺される事を名誉に思え」

そう言い放ち最後の攻撃に入ろうとした時

「!？」

「何だ!？」

彼らの視界が光で閉ざされてしまった

「く、閃光による目くらましか!」

男を開いた時には英雄の姿が見えなくなっていた

「逃がしたか……」

そうして男は去っていった

「……ふう、行っただけだね」

誰もいない筈の場所から声が聞こえてきた

次の瞬間、何も無い場所から帽子をかぶった少女と英雄が出てきた

「……何故、俺を助けた？」

「だって……そんなボロボロの人を助けない方がどうかしてるよ!」

「俺は生憎、人では無い」

「……だとしても!」

「俺にはやらなくてはいけない事が……ある……」

そして英雄は倒れこんだ

「し、しっかりしてよ!」

「……」

「あんまり連れて行きたくは無いかど仕方ない!」

少女は英雄を連れてどこかへ行った

第十三章 案内（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

話の数がF Fと同じ数になったなく

「そうだな、別にどうでもいいけど」

そんなこと言うなよく良作だろ、F F

「その割にはあんたはまともにプレイした事が無いけどな」
それは言わんというて……

「今回のゲストは……あれ？いないのか？」

たまにはお前と二人で話そうかと思って

「たまにはいいか」

いいだろ？

「じゃあ今回の内容について」

うい

「書いててどう思った？」

ぶっっちゃけ書き辛いW W

「だろうな」

何だか、本編ではない端々に書いている話も凄い事になってきてるし

「確かにそうだな」

こっからどうやって戦闘に持っていこうか……

「知るか、お前が考えろ」

ですよねーW W

「そして、意見をくれた方々、ありがとうございました」

意見通りになった方、うまく書いてましたか？

意見通りにならなかった方、すみませんでした……

「まあ、お前も髪じゃないからな」

髪なの！？俺は毛にも負けるのか！？

「まあ、そうなる」

ちくしょー！

「そしてお知らせがあるんだろ、お前」

うすうす気づいていたけど最近お前って言ってるよね、君

「自分より下の奴に対してお前って言って何が悪い」

……分かりましたよ

と言う訳でお知らせを二つほど

一つは後もう少しでテストに入るためしばらく更新が出来ないって事

「まあ、頑張って良い点とれよ」

うん

そして二つ目

またもやアンケートみたいで悪いとは思っていますが結構重要なので出来れば参加してください

非戦闘キャラに何かしらの能力を持たせて戦わせるのに賛成か反対か、意見を貰えるとうれしいです

それによって今後の展開が少し変わってくるので……

「成程な」

まあ、それぐらいかな？

「そうだな、終了した後作者の文章力が低くなっていないことを願う」

……努力するよ

「じゃあこの辺でか」

そうだな

「ありがとうございました」

第十四章 会議（前書き）

何か出来てしまった……

もうすぐテストだというのに……

視点変更が多いので注意して読んでください
まあ、どうぞ

第十四章 会議

「――だからこの世界に来たって訳だ」

俺は先生に今までの事を話した

「成程な、つまり八雲 紫ではなくミストとか言う奴らの起こした異変か」

「まあ、そんなもんだな」

好戦的な人ではなく、話せば分かる人で良かった

出来ればこれから先も話すだけで分かる人だと良いな、とか思った

「しかし、先生はどうして此处に？」

「どんな世界でも生きていくには金銭の工面が必要だろう」

「……結構現実的な理由だな」

「どんな理由だったら良かったんだ？ 答えてみる、上条 当麻」

ちなみに今までの事を話したついでにチルノ以外は自己紹介をした

「いえ、何でもないッス」

どっかのペンギンみたいな喋り方になった当麻

「しかし、こっちからも一つ質問をしても良いか？」

「別に構いませんが……何か？」

「お前たちは何処に泊まる予定なんだ？」

「あ……」

俺と当麻は同時に声を上げた

「確かにそれは考えてもいなかったな……」

「俺の居た世界じゃ、俺の家を拠点にしていたからな……」

俺たちは頭を抱えているのにキノとチルノは焦って無かった

チルノは……何が問題なのか分かっていないって顔だな

「キノ……何でそんなに冷静なんだ？」

「野宿の心得は出来ていますから」

そうでした、この人は旅人でしたね……

こんなときにそんなスキルが役に立つとは……

「ふう……ツカサ、上条 当麻、お前らは私の家に来い」
……今、先生はなんて言った？

「あの……リピート プリーズ」

当麻が何故か英語で言っていた

「私の住んでいる家に来いと言った」

「良いんですか？」

「困っている生徒は放っておけないからな」

お前達と居ないと帰れないらしいしな、と付け加えていた
しかし、ここで疑問が出てきた

「キノとチルノはどうするんですか？」

「流石に私も四人も満足に生活させる事は出来ないからな」

「はあ……」

この二人なら野宿しても大丈夫と思っていらっしゃるのか？
そんな顔をしていたのが伝わったのか、こう続けた

「この二人は心配ない」

「何ですか？」

「泊めてくれそうな生徒が居るからな」

ピンポン

「おーい、こなた、出てくれー」

「はいはーい、今行きます」

ドアを開けた

そしてドアを閉め「何故閉めようとする？ 泉」

「いえ、これは防衛反応と言いますか何と言いますか……」

「ふう……まあ良い」

「で？ 先生は何の御用事で？」

「ああ、それなんだが……」

そしてドアを開け切り一言

「八雲達を預かってくれないか？」

「へ？」

そして開け切ったドアの向こうにはキノとチルノが居た

「預かってって……何ですか？」

「こいつ等の家が火事で無くなったからだな」

「あ、そーなんですか」

「だから、後はよろしく」

「でも先生、預かるのは良いけど安全性は保障できないよ、家は」

「何かあったらすぐに連絡を入れるから」

「一応聞きますが……何処にですか？」

「警察」

「ですよー」

「とにかく、よろしく頼むな」

「お世話になります」「よろしく！」

「分かりました、ちなみに先生、これは成績アップに――」

「繋がる訳無いだろう」

「……ですよー」

こうして泉家にキノとチルノは泊まることになった

それにしても、何でこの二人だけ預かるんだろ？

ちよっと聞いてみるか

「ねえねえ、木乃ちゃん」

「何ですか？」

「司くんと当麻くんは？」

「……家の方針で、男子は自力で道を創れ、と言われてますので」

「そ、そうなんだ……」

何なんだこの漫画にありそうな家族は！？

やっぱり何かありそうだな

「まあ、我が家だと思ってゆっくりくつろいでよ」

「ありがとうございます」

すっごい礼儀正しい子だな

ちなみにチルノちゃんはゆーちゃんが居る事を伝えると

「ゆたかーーーーー!」

とか言って探しに行っちゃった

何時までも幼い心を忘れていない感じだったな

……人の事は言えないけどどうやって陵桜に入っただろう?

「まあ、細かい事は気にしない方が良いか」

とりあえず考える事を私は放棄した

「そろそろ時間だからサクッと夕飯作るね」

「何か手伝いましょうか?」

「良いよ良いよ、その辺でくつろいでて」

「ありがとうございます」

「で? 泉、柊姉妹、高良。彼女達の誰かが“鍵”と言う事で良いのか?」

「紫さんはそう言っていました」

俺と当麻は先生の自宅で話をしている

「しかし……それでは相手の出方を見てからでないと動く事が出来
ないか?」

「それも分かっています」

せめて“鍵”は一体どんな人物がなるのかさえ分かれば特定はし易
いだけだな……

「まあ、要するに、だ」

当麻が発言を始めた

「ツカサとキノは、泉、柊妹、高良を、俺は柊姉を守れば大丈夫な
はずだ」

「……数的にはそれが適任だな」

しかし、当麻は重要な事を忘れている

「お前の所にもしも敵が来たとするだろ」

「ああ、それが?」

「そいつが幻想殺しで対抗出来る奴じゃ無かった時はどうするんだ？」

「……逃げる」

まあ、妥当な判断だよな

「しかし、そうなると問題は種だな」

先生の言う通りである

種を探すのには苦勞する、の一言では片付ける事が出来ないほど難しい

世界によって形状を変えているのである

「変態のヒントが正しいなら、今回も近い場所にあるんだろうけどな」

当麻が苦々しい顔で言った

「変態？」

「こつちの話です、気にしないで下さい」

「そ、そうか……」

先生にもあの変態は知って欲しくないところだな……

「とりあえず、今日はもう遅い、早く寝ろ」

「そうですね、お言葉に甘えさせて貰います」

「おやすみー」

「ああ、お休み」

翌朝

特にすることも無かったので剣の素振りをしていた

少しでも慣れる……いや、思い出すためにだ

「朝早くから鍛錬をしているのか？」

先生が起きてきたようだ

「起こしてしまいましたか？」

「いや、いつも私もこんな時間に起きているから心配しなくともよい」

朝御飯の準備をしてくると言って先生は行ってしまった
そして俺は呼ばれるまで素振りを続けていた

「今日ぐらいにはミストの動きがあるかもな」

「彼女達が“鍵”ならな」

俺と当麻で朝飯を食べながらそんな話をしていた

「まったく：食事中ぐらい静かに出来ないのか？」

「すみません、先生」

「とりあえず、食べてから話し合おうじゃないか」

そう言っただけで食事をした後

「そういえば先生って何で教員免許とか無いのに先生をしているんだ？」

当麻が唐突にそんな質問をしていた

まあ、確かにそれは俺も気になっていたらちようど良いかもな

「それは私の能力を使ってだ」

……何となく予想はついていたがやっぱりそうだった

この言葉を聞いて聞く気が失せたのか、当麻は今日の事について話し始めた

「……まあ、警戒態勢位にはしておいた方が良いか？」

「奴らは授業中でも関係なしに来そうだから、何時でも戦えるようにはしておいた方が良くもな」

「私も彼女達の授業があった時、校内で会った時には出来るだけ目を光らせておくよ」

「よし、じゃあ行きますか、学校」

「そうだな」

「あ、八雲一族全員集合だね」

「一族言うな」

学校に行く途中、キノ、チルノを含めた泉と会った

今日襲われるかもしれないというのに無防備なもんだな……
そんな事を思っているとキノに肩を叩かれた

「どうした？」

「今朝……例の彼に会いました……」

「……………」

災難だな、キノ

「しかし一応情報は手に入ったので今朝の事を話します」
そしてキノは話し始めた

泉宅から少し離れた公園でキノは発砲していた

「……中々使いやすいですね」

彼女の手にはビッグカノン、魔射滅鉄、が握られていた

「これならまともに戦う事が出来そうですね」

そして、仕舞った次の瞬間

「ハッハッハ！朝から大変そうだ（ドン！）」

「何の用ですか……？」

「いきなり発砲するとはなく、怖い怖い」

変態ことサモエド仮面がそこに立っていた

「一体何者ですか貴方は」

「そんなの決まっているじゃないか！」

「聞くだけ聞いてみますけど……何ですか」

「正義のみか（ドン！）」

「……真面目に答えてください」

「こっちには攻撃の意思が無いのに……」

「時間が勿体ないので用件を教えてとっとと帰ってください」

「分かったよ！プンプン！」

そんな言葉の後にこう言った

「今日、刺客が来る」

「……………」

「時間帯までは分からないがこれは確実な情報だ」

「……分かりました、警戒しておきます」

「では！また会おうぞ！」

「二度と来ないで下さい」

そう言っただけは笑いながら何処かへ行った

「……成程な」

「前も奴の情報のおかげで種を見つける事が出来たからな、確かな情報だと思って良いな」

「……」

キノは無言で首を縦に振った

「警戒はするつもりだったが……まさか今日本当に来るとは思わなかった」

「そうですね、武器の状態は大丈夫ですか？」

「ああ、多分な」

「これは上条さんにも伝えておきます」

「頼む」

そう言っただけは当麻の所へ行った

「む」

よって必然的に泉と二人だけになる訳で話さざるを得ないって事だな

「どうしたよ」

「昨日ゲームやっててさ、レアなアイテム手に入れたわけだよ」

「……それで」

「浮かれてたら充電が切れてさ」

「災難だな……それは」

「三時間にも及ぶデータが全部パーになったんだよ」

「……何時まで起きてたんだお前は」

俺らはこんなアホな話をしながら学校に近づいて行くのであった

「…………っ」

「あ！目が覚めた！」

「……お前か」

「良かったより、目を覚ましてくれて」

「ここは？」

「ここ？ここは私の隠れ家だよ」

そう言って少女は続けた

「どう？体の調子は？」

「悪くない……むしろ良好だ」

そう言って体を動かしていた

「良かった、初めてだったけど成功して」

「どういうことだ？」

「君の体を治療したの」

「…………」

「ねえ、君のしたい事って一体何なの？」

「…………」

「それは私は手伝えないの？」

「……無理だ」

「でも……君一人だとまたさっきみたいな事になるんじゃないの！？」

「それとこれは話が違う」

「違うない！」

少女は大声で言った

「あ……ごめんなさい」

「いや……気にはしていない」

「とりあえず様子を見たいからしばらくここから動かないでね、これだけは守って」

「……分かった」

「よし！じゃあ自己紹介！私の名前は河城にとり、君は？」

「俺は……」

少し間があった後にこう続けた

「俺の名は……ゼロ」

第十四章 会議（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

グハ！ちょ！やめてくくく！

「やめてたまるかこのアホンダラ！」

怖い！怖いよツカサさん！

「テストだって自分で言っていたのに更新するとかアホ以外の何者でもねえだろうが！」

それが俺クオリティ！（キラッ！）

「……まあ、今に始まった事じゃないからな」

うん、受け止めてよ

「今日のゲストは先生か」

ちょ、無視しないで

「具体的には何をすればいいんだ？」

「単に喋るだけですな」

「そうか」

……くすん

「あれは放っておいて色々喋ろうと思いまーす」

「良いのか？」

「良いんです」

「そうか」

「まず、感想について」

「作者も驚いていたらしいぞ、感想が増えていて」

「俺もびっくりだよ」

「とりあえずビッグカノンについての説明をよろしく頼む」

「そうだな……俺説明下手だからうまくは伝わらないと思うぞ」

「構わないだろう」

「では……外見はキノのカノンと全くもって変わりません。しかし

カノンはリロードに時間がかかるうえに撃ちつくすとその場での銃弾のリロードができません。しかしビッグカノンはリロードの必要が無し、つまり打ちたい放題になっている。そしてなおかつ威力はカノンとは比較できないほど高いです」

「つまりは弱点を無くした上で強くしたようなものか」

「平たく言えばそうなりますね」

「では、次の感想」

「英雄については今回正体が分かりましたので大丈夫じゃないかな」
「そうか」

「そして、アンケートについてですが、らき☆すたの世界が終るまで続けるらしいですよ」

「それはまた何でだ？」

「そこまでのいかないとそのキャラが出ないらしいかららしいです」
「成程」

「そして最後、作者の友人の八雲 楠乃さんについて」

「ああ、『人修羅の旅』を連載中の？」

「そうですね、こんな作品とコラボなんかしてくれるとは……」

「うれしい限りだな」

「ですねー、ちなみにテストが終わって暇になったところにそのコラボと時系列を合わせて章の間に追加する予定らしいですよ」

「……また無理をしようとしているな」

「まあ、こいつは無理無茶を何とかしようとはするからな」

「それが成功した試しが無いだけだな」

「確かに……」

うとうとう……

「大体終わったぞ、作者」

え？ もう終わり！？ 久々に会話できたのに！？

「最後に一つだけあったな」

え！ 何何！？

「それは先生からどうぞ」

「……………」

あ、あのー先生？どうしてそんなに怖いオーラを出しているんですか？

「試験が近いと自分で言っておきながらこれの更新をするとは一体どういうことかな？」

あのー先生？どうして私の肩に手を置くんですか？

「そんな君には体罰が必要そうだな……」

せんせ……目が怖い……止めて病めて辞めて已めてヤメテやめて Y
a m e t e……

「問答無用だ！その腐った精神を清めてやるぞ！」

ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア——……………」

「おー、怖。ま、そんな訳でこれからも楽しみに待っていて下さい。
ありがとうございます」

第十五章 刺客（前書き）

活動報告にも書いてあった通り二つの意味で終わりましたww
もうどうにでもなーれー
と、言うことでドゾドゾ

第十五章 刺客

とりあえず学校には着いた

しかし……

「……………でね」

「へへ、そうなんだ」

「ふふっ」

この三人……分かっていないから緊張感ゼロで何だかなあ……
そんな事を考えているとキノが話しかけてきた

「そんな事を言っていて来るべきものは来ますよ」

「まあそうか……」

動きがあるまでは大人しく待機していますか

「基本的に二人で監視しましょう、無理な時はボク一人でやります」

「無理な時って？」

「……そこまで言わなくては分かりませんか？」

「？」

無理な時って一体何時なんだ？

キノの言っている事がさっぱり分からない

そんな顔をしていたのかキノは呆れ顔で時間割を見せてきた

「今日の三限目を見てください」

「三限目……？あ……」

「……ようやく分かりましたか」

そこに書かれていた教科は……体育でした

これは……流石について行ったら変態以外の何者でもないな
あいつと同系列になるのは嫌だ……

「……すまん、その時はよろしく頼むぞ」

「……………」

キノは無言で頷いた

「なあ、当麻」

「何だ？ツカサ」

「ここは一体何なんだ？」

「さあ……ただ一つ分かる事がある」

「一体何だ？」

「俺たちは変態かもしれないって事だ」

ただいま三限目の体育

合同で行っているため当麻も一緒に居る

五十メートルのタイムを計っていた、のだが

俺と当麻はすでに計り終わっていて暇なので女子の測定の方を見ている

もちろん刺客が泉達に近づいて来ないかを監視するため
の筈なのだが……

「こう見てみると可愛い子一杯だな」

「ああ」

こんな話題になってしまっていた

男子の性だと俺は思う、思いたい

初日は気付かなかったが当麻の言葉には頷ける

なんか躍動している女の子って……良いよね

なびく髪

ハーフパンツの先から見える足

光り輝く一筋の汗

そして何より……

「揺れる胸……」

当麻が代弁してくれていた

……もうこのままでは変態ワールドに入ってしまったいそうなので修正
しようと思う

「当麻、流石にやめよう、この話題。当初の目的を忘れてしまう」

「……確かにそうだな」

何とか戻って来れたようだ

危ないところだった

「それにしても泉が速いのはびっくりだな」

「そうだな、あんな体のどこにそんなパワーを秘めているんだって話だな」

まるで俺の世界の電子機器みたいだな

「あ、ツカサ、何か最後に一番早い奴二人で計るらしいぞ」

「へー」

泉並みに速い奴か……

「キノ以外思いつかん」

「だな」

そして予想通り……その二人が並んでいた

「どっちが速いと思う？」

「キノだろうな」

と、思っていたら結果は同着

なかなかの身体能力を持っているみたいだな

「とりあえず、これで終わりだろ？教室に戻ろうぜ」

「そうだな……」

「いやいや木乃ちゃん足速いねー、びっくりだよ」

「ありがとうございます」

「しかしそれにしても何で私たちが片づけをしないといけないんだろうね？」

「体力的にも余裕があるように見えたからではないでしょうか？」

「むー、納得できないな」

ボクと泉さんはそんな他愛も無い話をしながら片づけを行っていたその時――――

「……」

「どったの木乃ちゃん？」

「泉さん、後は一人でできそうなので先に戻っていて下さい」

「え？でも悪いよ」

「お世話になっているお礼ですよ」

「んゝゝゝ、じゃあ遠慮なく!」

そうして泉さんは去っていった

「さて……」

ボクは倉庫の奥を見つめた

「隠れていないで出てきてはどうです?」

「……凄いですね、そこまで大きな音を立てた訳でもないのに」

そこには暗銀色の髪を長く伸ばした軍服を着た女性が居ました
後、背はボクより高いという事でしようか

そして頭には円形の謎の物体が浮いていました

本などで読んだ知識で考えると天使……ですか?

「褒めても何も出てはきませんよ」

「分かっています」

「用件は一体何ですか?」

分かりきっているが一応確認をしようと思った

「彼女の確保です」

「泉さん……ですか」

「そうですね」

これは思ってもいない収穫だった

これで狙われるのは彼女だけだと分かった

「しかし、穏便に事を運ばせたいですがわたくしもあまり時間をか
けたくはありませんので……」

そう言いながら彼女は何かを取りだしながら

「少々手荒な真似をさせていただきます」

そう言った

「ボクもそれを黙って見ている訳にはいきません」

ボクは短パンの下にセットしておいたカノンを取り出し

「泉さんは渡しません」

構えた

「では……いきますよ」

すると彼女が持っていた物体がこちらの方にまで伸びてきた
彼女の武器は鞭か何かでしょうか

しかし……

「動きが単調ですね、読めますよ」

物体による攻撃は続いていたが避けられないものではない
いずれ隙が出来る筈、その時にカノンを撃ち込めば良い

「確かにそうですね、ではこれならばどうでしょうか？」

その瞬間、目の前に物体が飛んできた

彼女の武器は一つではないということでしょうか？

「くっ！」

その物体にカノンを数発撃ち込んだ

しかし止まる気配は無い

「！」

辛うじて避ける事が出来ましたが、これが続くとなると……

少し厳しいかもしれませんね

「これでどうです？」

彼女に向かって数発撃ち込む

すると

「これでわたくしを止める事は出来ませんよ」

銃弾は全てあの物体に止められていた

あれは一体何なのでしょう？

それが分からなければ勝つための一手は見つけられそうにもありません

とりあえず、一度跳び箱とか言っていましたか？そのような名前の

物の後ろに隠れた

一旦状況を考えてみる

彼女の武器

元の長さは人の身長の半分くらいでしょうか？

その物体は手に持って振り回す事が出来るだけでなく飛ばして攻撃
が可能

そしてそれを広げる事により攻撃から身を守ること也有可能

「圧倒的に分が悪いですね……」

しかし、そんな事を思っているのは彼女が泉さんを追いかけ始めるとも限らない

せめてツカサさんが居る所まで時間を稼がないと――

「見つけましたよ」

「っ！」

とっさに身を動かす

ボクが居た場所には例の物体が落ちていた

彼女が声をかけなければボクはあの物体の餌食になっていただろう

「良く避けましたね」

「皮肉にも貴方のおかげです」

そして彼女は物体による乱舞を再開した

隙が見つからない

とにかく避け続けるしかない

そう思った瞬間

「え……？」

ボクはその物体を踏みつけて……

倒れてしまった

まるで水で濡れた布を踏みつけた感覚だった

「これでチェックメイトですね」

その言葉を最後にボクは何かに包まれ、意識が遠くなった

「……………」

キノが来ない

体育が終わわり、四限が自習だったから良いけど……

「なあ、泉、つかさ」

「何？」

「どうしたの？ 司くん」

「お前達キノが何処に行ったか知らないか？」

「木乃ちゃん？そこに居る……って居ないじゃん！」

「……今の今まで気付かなかったのか？」

「……」

つかさからも痛々しい目線を受けている泉

こいつは……

「う……き、気付いていたとも！」

「……さっき思いつき居ないって言っていた口は何だったんだ？」

「幻聴！」

あそこまではっきりと聞こえる幻聴も珍しいものだな

「こなちゃん、私にも聞こえてただけど……」

「……まあ、良いや。とにかく心当たりは無いか？」

「私は無いなく、こなちゃんは？」

「私も無い……ん？」

「どうした？」

「そういえば片付けは一人で出来ると言ってたからそのまま倉庫に残して帰ってきちゃった」

「……」

「……」

「ふ、二人ともそんな目で私を見ないで」

よよよ、とわざとらしい鳴き声を上げている泉

しかし、それだけだったら何でこんなに遅い……

「どうしたの？司くん」

「泉、つかさ。俺ちよつと職員室に行ってくる」

「何で？」

「何でもだ」

そして一直線に職員室に向かう

平静を装っているが内心焦っている

今日、刺客が来ると言っていた

キノはそいつと交戦中、または負けて人質になったって所か？
職員室に向かっているのは先生に泉達の監視をしてもらう為だ

「すみません、上白沢先生はいらっしゃいますか!？」

「一体どうした? 何があった? とりあえず廊下に出よう」

良かった……先生は居たみたいだ

「緊急事態です、キノが敵と交戦、もしくは負けて人質になります!」

「……成程」

「なので先生は泉達を見ていてくれませんか」

「良いだろう、今は仕事も無い、監視員として彼女達の教室に行こう」

「ありがとうございます! では、俺はこれで」

そして倉庫に向かった

無事でいてくれよ! キノ!

「……司くん、用事ってこれだったのかな」

「だとしたら嬉しくないね」

何で先生に監視を頼みに行ったのかな

貴重な自由時間なのに……

「せんせー、私達大人しく勉強しているので帰ってもよろしいですよ」

「お前から勉強という言葉が聞こえてきたのに驚きだよ……とにかく、私はここに居るからな」

「え〜〜〜〜」

「今日も一発喰らいたいかな?」

「遠慮しときます……」

黒井せんせの拳骨より痛いのに毎日やられたら頭蓋骨ぱっくりいっちゃうって

意地でもここに居るみたいだね……

あれ? じゃあ司くんは何で帰って来ないの?

「キノ!」

倉庫に着いた俺は辺りを探す

物が乱雑に散らばっていたりする

ここで戦いがあったのは一目瞭然だ

「もう終わった後……って事はキノは……」

最悪の事を考えてしまった

いや、それは無い

キノは生きている！俺の勘がそう伝えていた

「とにかく……少しでも敵の情報を探すか……」

そう思い辺りを物色していると

「また、わたくしの邪魔をする方ですか？」

「！」

瞬間、剣を取り出しバックステップをし、敵を見据える

「これ以上手荒な真似はしたくは無いですか……」

「あんたか？キノと戦ったのは」

「キノ？先ほどの方ですか？」

その言葉で十分だった

俺は一気に足に力を入れ懷に飛び込んで横薙ぎの一閃を放った

しかし安々と避けられてしまった

「キノをどうしたんだ！答えろ！」

「……穩便に事を進めたいのですが……仕方ありませんね」

そうして彼女が取りだした物体は————

「た、タオル！？」

「自己紹介が遅れてしまいましたね」

そう言って彼女は続けた

「わたくしの名前はザクロ、命により泉　こなたの確保に参った者です」

第十五章 刺客（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

真っ白に燃え尽きたZE☆

「一回死んだらどうだ？ お前」

ちよっとおおおおお！？ 久しぶりに更新して初めての会話がそれかい！？

「だって……お前真面目にテスト勉強したのか？」

したさ！

「……何日だ？」

0・25日位

「……人はそれを勉強したとは言わん」

いつもの俺から見たらやってる方だよ！

「お前は一体どれだけの勉強量で生活してんだ！？」

ぶっちゃけ一時間あれば良い方

「頭が痛くなってきた……」

と、言うことで今回のゲストは————

「我はメシアなり！はーっはっはっは！」

「……お前、その登場の仕方……良いのか」

「良いの！と、言う訳で世界的アイドルのキズナちゃんです！」

「飛躍したな、おい！」

「人は日々精進するものだわさ、ツカサくん」

「お前、誰だよ……キャラを定めろよ」

と、言う訳でまったりとトークをしていききたいと思います

「いえーい！」

「……ハア」

久しぶりの更新過ぎて頭が何か逝っちゃったと思っていた

「あの体育の時のツカサと当麻のシーン？」

それ

「ツカサ、サイター」

「……それを執筆した奴がお前の隣に居るんだがな」

「作者、サイター」

君はどっちの味方なのでしょうか、キズナさん？

「私の味方！」

「だろうな！」でしようねえ！

「そんな事よりテスト期間中もめげずに感想とか変身していた件について」

そうそう、俺はテスト期間中に修行を重ね、ついには感想だけで無く色んな物に変身することが……って何言わすんですか！？キズナさん

「ごみんごみん、感想に返信していた件についてだよね」
そうそう

「一人ノリ突っ込みするお前にも非があるとは思うのだが……」
きにしない、きにしない

英語で言えばツリー&バンブーブレード

「……間違っている気がする上に、それ、使って良いのか？」
前も使っていたけど？

「……確かにそうだな」

まあ、話がそれましたがその件について
パソコン自体は触るのが難しい状況で感想などを見るのに適していた物を使ったのです！

その名も！「DSiだろ（でしょ）」
……くすん

「作者は事あるごとにDSを開いてインターネットにつなげて感想、その他もろもろをしていたらしいぞ」

「このタイミングで言うものでは絶対無いだろうけどPVが10000、ユニークが2500を超えていたよ」

「確かにこのタイミングで言う事じゃねえ！それ最後に言うもんじ

やねえのか!？」

「それが私クオリティ(キラッ!)」

「お前と言う存在が分かんねーよ!」

「さて、二人の心をかき乱しまくったので私そろそろ帰るね」

「待てよ!!!!!」

「……結局行っちゃったよ」

くすん……

「お前はお前で何時までいじけてんだよ!」

グハ!あれ?ここは何処?私は?

「ここはあとがき、お前は作者だ」

そうだった

「めんどくせえ……」

あ、そうそう八雲 楠乃さんについて

「ああ、あの人か」

コラボを執筆中なのですが……

「なのですが?」

いかんせん材料が足りん!

「どう言うことだ?」

一番問題なのが技のアニメーション!俺原作やったことも無いしそもそも人修羅って八雲 楠乃さんの小説が初見なんだから!

「……そんなんで良くやろうと思ったな」

それが俺クオリティ(キラッ!)

「そのネタ、天井だぞ」

マジ!?

「さっきキズナがやってた」

……まあ良いや、とにかくこっち目線で書く上に俺の書き方の場合、技の描写が必要不可欠な訳

「成程」

なのでかなーり先になってしまうと思う

「……頑張れ以外の言葉が見つからん」

気になる人は八雲 楠乃さん作『人修羅の旅』を見てくれ！

「まさかの他作品紹介しちゃったよ」

ではではこの辺でお開きとしますか、ツカサくん

「長かったな、今回のこれ」

まあ、ぶっちゃけ今の心境を徒然なるままに書いているだけだけどな

「はあ……まあ、今回はこれで終わりです」

今度のupまで楽しみにしていて下さい

「今回もありがとうございました」

第十六章 親睦（前書き）

よ……ようやく出来た……

ちよつと変なところがあるかもしれないと思いますがそこは妄想とかでカバーしてもらえれば嬉しいのです
では、ドゾ

第十六章 親睦

「……一体お前らは“鍵”を集めてどうしようと思っているんだ？」

「分かりません、ただ、連れてこいと言われているだけなので」

こいつ等のボスは自分の仲間にも情報を教えていないのか

こうなると、脅すなりなんなりして、情報を吐かせるのは不可能って事か

「話はこのあたりにしましょうか」

そして彼女の持っていたタオルがこちらに向かってきた
俺はとっさに剣で防ぐ

タオルが剣に纏わりつく

「こんなもん！一気に引き裂いてやるよ！」

と、剣に力を込めたがビクともしない

「何で！？ただの布だろ！？」

「ちょっとやそつとの物ではわたくしのエッセルザクスには傷を付ける事は出来ません」

「何だそのチートなタオルは！？」

素材は一体何で出来ているんだって話だよ！？

「では、そちらの武器を渡して貰いましょうか」

「な！？」

するとその彼女の体のどこにそんな力があつたのかと思うぐらい強靱な力で引っ張られた

しかし、持って行かれると困るのでこちらも力を込める

「中々な力をお持ちのようですね」

「それはどうも……！」

渾身の力を込め、持っていけないようにする

「……これならばどうですか？」

そんな言葉が聞こえたが俺は返事をする余裕も無い
相変わらず持っていけないように力を込めていると

いつものあの感覚がした

とっさに顔をその感覚から外れるように動かすと自分の後ろから大きな音が聞こえた

後ろを見るとそこには彼女の濡れタオルが落ちていた

「わたくしのエッセルザクスは一個ではありませんよ」

……これってかなりピンチでは無いですか？

俺は武器を動かす事が出来ない上に力を込めていないと持って行かれる

対して向こうは武器を投げる事が出来る

しかも弾数は不明

「……ダレカタスケテー」

「誰も来ませんよ」

非常なるお言葉が聞こえてきた

どうしようか……本当に助かる方法が見つからない

マジで誰か助けに来ないかな……

「では続きを始めましょうか？」

そう言った彼女の手元にはあの濡れタオルが……

もう無理かな、そう思って彼女の顔をじっくり見た

どうせ助からないならその顔を見るだけでもしようと思っただけでもしよっての行動だが……

「……ん？」

デジャブではないが彼女の顔には何かを感じた

そう、まるでキノと初めて会った時のような感覚が

しかし、紫さんに聞いた話を思い出してもザクロ、なんて名前の人

物は聞いたことが無い

だが、何かを感じる

あの髪の色、天使の輪……

どうも何かが引っかかる

何かを忘れているような――――

「ボーっとしていますと狙い撃ちにしますよ」

「へ？」

彼女の言葉で現実に戻ってきた

そして前を見るとそこにはタオルタオルタオル！

「怖ッ！」

向かって来る度に感覚から逃れるように動けば良いからまだ良かったがこの力が無かったら俺はもう負けているな
それにしても打開策が本当に無い

「避けるだけではわたくしを倒せませんよ」

「クソッ！」

とりあえず何とかしてこの剣を包んでいるタオルをどうにかしないと……

そんな事を思っていたその時、自分の中から何か湧き上がってくる
感覚がした

一体それが何なのかは分からない

だが……

「頼むからこの場から救う力であってくれ！」

そして何かが起きたようだ

剣から黒い丸いエネルギー体のようなものが発生していた

それが収束し、剣を見てみると、剣に纏わりついていたタオルがその場から消えていた

「わたくしのエッセルザクスが……！」

「……！」

何が起こったのかは分からないがここで攻撃をしないでどうする！

最初と同じで一気に近づき懐に入って——

剣を上段に構え彼女に向かって一気に振り下ろす！

「オラァ！」

「な……！」

決まった！

剣を振り下ろしながらそう思った

しかし——

切ったという感触はしなかった

「アレ？」

振り下ろした先を見てみると誰も居なかった

「一体何が……」

「さて？何が起きたのでしょうか？」

今まで聞いた事の無い若い男の声が聞こえた

「誰だ！」

声のした方向を向いてみると彼女を抱き抱えている黒い服を着た男が立っていた

「……何故、貴方がここに居るのですか？」

「私は依頼人から頼まれただけですよ、貴方を依頼人の元へと運ぶように」

「……しかし、まだ任務は——」

「すぐにです」

すると彼女は黙ってしまった

「では、行きましょうか」

「ちょっと待て！」

二人だけで話を進めようとしたってそうは行かねえぞ
新しい奴も出てきたんだ

少しでも情報を集める……！

「俺が安々逃がすとも思っているのか？」

「貴方の事です、思っていないでしょうね」

「だったら——」

「悪いとは思いますが時間の無駄です、それでも彼女を追いかけた
いと思うのなら——」

ゾクツと背筋に寒気が走った

ここまで分かりやすい殺意が今まであっただろうか
腰が抜けそうになるのを必死で我慢する

「私が相手になります」

……俺一人でこいつと戦っても勝てるわけがない

むしろ今の状況を冷静に見れば一対二だ

勝てる見込みは……無い

「……そいつをミストの元に運んで行くだけなんだな？」

「ええ、そういうことですね」

「……行け」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

そして、倉庫から男と彼女は消えた

「………そうだ！キノは！？」

忘れていた訳ではないが安否が分からない今、早く探さないと！
倉庫の中を捜しまわる

「………」

跳び箱の後ろにあのタオルでグルグル巻きにされたキノを見つけた
……普通じゃこんな姿は見れないよな

しばらく黙って見ていよ「早く助けてくれませんか？」
起きていらっしやられた

仕方が無いのでタオルからキノを開放した

「すみません、不覚を取ってしまいました……」

「気にするな、それにしてもミストの奴ら本当に強い奴ばかりだな」
頷くキノ

「出来ればボク達も強い人を仲間に出れば良いのですが」
「……まあ、それはどうなるか」

はつきり言ってこの世界で仲間なんて言えるぐらい強い人物は居ないだろう

先生はこの世界とは関係のない幻想郷の住民ですしね

「とりあえず、教室に戻ろう、心配されると困る」

「そうですね」

「二人で何やっていたのかな？つ・か・さくん？」

「何もやってねーよ、と言うか男女が二人ってだけでそんなセリフ

が出てくるお前って一体何だよ……」

「オタクです!」

声を張り上げて言った泉

キズナと良い友達になれそうだな……

「で、ほんとは何があったの?」

「跳び箱が崩れてしましまして……それで手間取っていたら彼が来たので助かりました」

「そんな大変なことがあったの!?!」

半分本当だからな

しかし……泉に何時話そうか……

俺達の事

ミストの事

そして……“鍵”の事

下手にこんな公共の場でこんな話をしたら教室に居辛くなるのは目に見えている

まあ、それは追々考えるか

「それにしても大変だったわね、二人とも」

かがみが話してきた

昼休みはこうやって四人で食事をしているらしい

今は俺とキノ、当麻も合わせて七人の大所帯になっている

「そうですね、彼が来なかったらボクは気付かれるまで下敷きになっていたかもしれないね」

「それは恐ろしいわね……」

ははは、と乾いた笑いをしていた

「ま、何にせよ、二人とも無事だったんだしもうこの話題は止めましょうぜ」

「確かにそうね」

これ以上根掘り葉掘り聞かれると困るからな

当麻の提案は嬉しかった

「しかし皆さん……明日は何か知っていますか?」

不敵な笑みを浮かべながら俺達を見る泉

「明日でしょうか……特に祝日とかは聞いたことがありませんが……」

「何なの？ こなちゃん？」

どうせ泉の事だ、つまらない事だろう

「な・ん・と！ 土日で休みなのですよ！」

空気が静まり返った

「あんたはそんな当たり前の事で喜んでどうしたいのよ！」

「いやいや、かがみ。休みだからこそできる事が沢山あるでしょ」

「だからってそれは今言うべき事か！？」

「あ、今日の弁当はつかさが作ってきたんだね」

「話を逸らすな！」

……何だ、このミニコントは？

まあ、彼女らの様子を見てみるといつもの事なんだろうな

「と、言う訳で八雲一家ともっと親密になろう計画を始めようと思います！」

「今の話の流れから何でその話題になるのよ！」

「お、お姉ちゃん……落ち着いて……」

「……全く、で、どう言う事なのか説明して貰いましょうか？ こなた」

「あいさー！」

ビシッと敬礼をする泉

「簡単に言うところの土日を利用して家とか町とかを案内しようって事！」

「……それってただ遊ぶことと何も変わっていないと思うぞ、泉」
それはここに居る全員が思った事だと俺は思う

「……そうとも言う」

「なら最初からそう言いなさいよ……」

「別に良いじゃん、さっきの話題が話題だったんだから」

「ま、あんたが本当にそんな事を思って発言しているかは分からない

いけどね」

「いぢわる」

ハハハ、と笑ってからちよっと思った事を聞いた

「俺と当麻はどうするんだ？」

「え、もちろん一緒に決まっているじゃん！」

キノとチルノだけじゃないのか

まあ、八雲一家とか言っていたからその辺は聞くまでも無かったが少し心配だった

泉は分かっては居ないと思うがこれはとても良い提案だ

俺たちはこの辺の事などは全く知らない

そんな状況で種を探せと言われても禁書目録の世界以上に見つけるのが困難だ

しかし、この土日で案内をしてくれるならとても見つけやすくなるはず

「じゃあ、後二時間、頑張りますか」

「そうだな」

さて……この世界の種は何だろうな

俺は一つだけ予想を立てている

種は物語の主人公の近くにあるということ

これは前の種が当麻の飼っていた猫だったからの予想なんだが……昔から俺の勘は当たる

ま、明日と明後日、死ぬ気で捜しますかな

「……治療をしてくれた事、感謝するぞ、にとり」

「私が勝手にやった事だから別に良いよ」

でも、と、にとりは続けた

「少しでもお礼がしたいと考えていてくれるんだったら、今、何が起きているのか教えて欲しい」

それを聞いたゼロは少しだけ黙ってから続けた

「……少し長くなるぞ」

「……良いよ、お願い、話して」

「オレの知っている限りだが————」

そしてゼロは、にとりに話した

今の何が起きているか、ミストの事を事細かに話した

「———これが俺の知っている全てだ」

「………」

「どうした？」

「あ！いや、何でも無いよ、ちよつとビックリしちゃって……」

「……それなら良いが」

「でも何でゼロはミストを裏切ったの？」

「最初は捕まってしまった彼女を取り戻そうと単身で行った
だが、と続ける

「オレ一人では戦うことも儘ならなかった……」

「そして、何でミストに協力していたの？」

「情報を少しでも得ようと思ったからだ」

「何か成果はあったの？」

「……分かった事はミストの居所、そしてそこに集まっている奴ら
の事だけだ、奴は部下にも重要な事は言っていないからな」

「………」

沈黙がしばらく続いた

その空気を破るようにゼロは言った

「今のオレの目的はユカリと言う人物を捜す事だ」

「ユカリ？」

「その人物はミストに対抗している、そいつを訪ねれば何か分かる
可能性がある」

「……そうなんだ（何だか聞いたことがあるような……）」

「オレが話せる事はそれだけだ」

ゼロは立ち上がった

「待つて！何処に行こうとしているの！」

「ユカリを捜しに行く、それだけだ」

そしてそのままゼロは出て行こうとしたが

「……何をしている？」

にとりがゼロの後ろ髪を掴んでいた

「私も行く……」

「何故だ？何故オレと一緒に来ようとする？」

「……私は……私はこの世界にもう居たくない！」

「……」

そしてぽつぽつと言葉を紡いでいく

「いつものように目が覚めて……いつものように顔を洗おうとしたら川が無い……」

「……」

「周りを見渡せば全然知らない場所……周りには誰もいない……知り合いどころか人も動物の気配すら全く……」

「……」

「そんな世界で生活していて……貴方が来た……でも私を置いて行こうとする……」

「……」

「もう……誰かと離れるのは……絶対に嫌なの！」

そこまで言って、にとりは俯いた

溢れそうになる涙を堪えているのだろう

また、しばらく沈黙が続いた

先に声を上げたのはゼロだった

「……お前の世界の事もユカリに聞けば何かが分かるかもしれないな」

「え……それって……」

「何時になるのかも分からんが……来るなら勝手に来い」

「—————！うん！」

そしてこの世界から二人の影が去っていった

第十六章 親睦（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

疲れたくく

「お前がテストであんな点取るからそんな事になったんだろうが」
そこは触れないで……もうテストって言葉だけで吐き気が……オエ
……

「こんな作者は放っておくのが一番か……」
それは悲しいので復活します

「めんどくせえ……」

今回のゲストはこの方です！

「皆！待たせたな！ダークヒーローことアクタ「お前は何しに来て
んじゃボケエエエエ！」グハッ！」

おー、見事に回し蹴りが炸裂したな

「作者！こいつはここにきて良い人材なのか！？」

いやー、別にこう言う奴は良いと思って

「俺が対応に困るわ！」

「自己紹介ぐらいさせろよ！」

「お前の名前は興味ねえよ！」

まあまあ

「で、真意は何なんだ？」

いやー、この前PSPのダウンロードショップみたいところで魔
界戦記デイスガイア4のPVがあつてさー
それ見たらこいつが出ていて……………

「つまりは記念みたいな感じか」

そんなところ

「……どうせまた端役だろ」

多分そうかもしれないけど何故か最後らへんで主人公らしき人物と

一緒に立っていたんだよね

「へ」

興味なし!?

「まあな、むしろ作者」

何だ!言ってみろ!

「お前P S 3持っていないからプレイ出来ないだろ」

……

「それなのに何でこんなことをやったんだ?」

個人的に彼が好きだから

「……こんな奴がか?」

「こんな奴とは何だ!」

「自分より下の奴をこんな奴と言って何が悪い!」

「何だと!ダークヒーローはお前より下じゃない!」

「――――!」

「――――!」

あーあーなんか喧嘩が始まったな

このままじゃ話にならない

と、言う事で作者が一人で話します

最近この小説のネタが尽きかけていてどうしようとか思っているのですが、そんなときに限り何故か新しい作品が思いついてしまいました……

一応オリジナルの作品になる予定です

まあ、出すかどうかは作者次第なのでただの独り言だと思ってください

「――――!」

「――――!」

ま……不味い、このままではこのあとがきが崩壊してしまう……
ならばここは作者権限を使うしかない!

作者スキル発動!

強制終了!

と言う訳でこの辺で
ありがとうございました

第十七章 行動（前書き）

あえて何も言いません……
では、どうぞ

第十七章 行動

「それにしても良い天気だな」

「だな」

今日は土曜日、一応彼女達と一緒に街を周る予定だ

俺と当麻は集合場所に二人で待っていた

やっぱり男として女の子を待たせるのはいけないと思ったので――

――
「いくらなんでも早すぎないか？」

集合時間は一時、今は十二時ちょっと前である

「……早すぎた」

「……だな」

正直に話すと俺はキズナ以外の女の子と待ち合わせなんて事はした事が無い

心は多少踊る訳であって、そりゃ気合いが入りますよ

あいつはあいつで待ち合わせて言葉だけで嫌な感じがしたからな

……

「それにしてもホントにやる事ねえな」

「暇つぶしの良い方法は無いか？」

「それを今考えてるよ……お前も考えろよ、ツカサ」

「そうだな」

暇つぶしねえ……

トランプ。持っていない上にこんな外でやっていたらただの変人だろう
ゲーセン。この辺の地理は全く知らないので迷子になるのがオチだ
ろう

ナンパ。今、女の子と待ち合わせしてんのに何やろうとしてんだ俺
は……

出た結論

「三つほど考えたが全部駄目だな」

「ホンっとに何か無いのか〜!」

あ〜!と大声で叫ぶ当麻

そんな事を言われましても……

「……アホだと思われる可能性が高いが暇つぶしの方法を思いついた」

「マジか!?じゃあそれをやろうぜ、ツカサ!」

「マジでやるのか……?」

「もうこの際、暇が潰せりゃ何だっていいさ!」

「じゃあ、覚悟しろよ……」

そして俺発案の暇つぶしが始まった

「—————!」

「ふう……意外と気持ち良かったな」

当麻がそんな事を言った

確かにそう思う

「ヒューヒュー!」

そんな声と拍手が聞こえたので周りを見渡すと————

「……な!?何見てんだ、泉!?」

そこには泉とキノ、チルノが居た

「いやいや、お二人さん、楽しそうに歌っていましたから〜」

にやにやしながらそう言ってきた

クソ……思ったより熱中してしまってたみたいだな……

俺が当麻に提案したのはエアギターをしつつ歌うという事

最初こそ恥ずかしかったが、やっていくうちにノリノリになってし

まい……

気付けば集合時間になっていたようだ……一生の不覚……

こいつにだけ見られたのが救いだ……

「ハア……お前らが来たって事は後は……」

「かがみとつかさだけだね〜」

「あれ?高良は?」

「ちょっと用事があるんだって」

「そっか」

あの双子が来るのは何時なんだろうかとか思っていたら

「あ、噂をすれば何とやらだね」

どうやら来たらしいな

「あら、私達が最後だったの？」

「そうみたい」

これで全員来たみたいだな

「でわでわ！行きましょー！」

そして泉が進もうとするが――――

「待ちなさい、何処に行こうとしてるの？あんた？」

かがみが止めた

俺たちは理由が分からないが……

「まずは近場からと思って――――」

「その方向、明らかにそのゲーセンに向かっていると思うんだけど？」

そして泉の進行方向を見ると確かにゲーセンがあった

気付かなかった俺と当麻って一体……

「いやいや、ゲーセンも立派な案内だと思うよ」

「……入ったら出てくるのは何時になるのかな？」

かがみがそんな事を言ったので今までの泉の行動とかを考えてみた

……確かに、出るのは何時になるのだろうか

気付けば夕方、なんて事があるかもしれないから……

「良いじゃん！ゲーセン案内しようよ！」

「泉、俺もちょっと勘弁して良いか」

「え！？何で！？」

「いや、そこに入ったら今日案内して貰えなさそうだから、さ」

「……」

かなり落ち込んだ様子の泉

……ゲーセンに行く、行かないだけでこんなに感情が浮き沈みする

もんか？

「……とりあえず、まずは私達の家の周りとかを案内しましょう」

「ああ、頼んだ」

ようやく案内がスタートした

……後ろの泉のテンションがちよつと低い事が気になるが、気にしないでおく

矛盾しているかもしれないが、どうせすぐに復活すると踏んだからだ

「とりあえず、これで私達の家の周辺は終わりかな？」

「サンキュ、かがみ」

「いやいや、別に良いよ、私達も好きでやっているんだから」

まだ会って三日しか経っていないがかなり面倒見が良いタイプだな
「まったまたゝ、八雲の男子二名に媚を売っておいてお菓子とかその他もろもろを奢ってもらおうって考えてるでしょゝ」

「私がそんな事を考えている訳無いじゃない！」

「……………」

「あ……あんたの嘘発言で二人が変な目で私を見てるじゃない！」

「あっはっはゝ」

「こなたゝ！」

……結構弄りがいがあるとも見える

「ごめんなさい、うるさくて……」

「いえ、気にしなくても良いですよ」

後ろではつかさとキノが話していた

まあ、あの二人はあんなに暴れまわるようなタイプには見えないからな

あれ？　そういえば……

「キノ、チルノを知らないか？」

「チルノさん？　そういえば見えませんね」

「つかさ、キノと一緒にここで待っていてくれ。俺と当麻でチルノを捜してくるからさ」

「あ、気をつけてね」

「じゃあ行くか、当麻」

「おう」

「お前は何やってんだ……」

「あ、ツカサとツンツン、どうしたの？」

そう言いながらチルノは近くの子供と一緒に砂場で遊んでいた一応高校生って設定だから少しは考えて行動してくれよ……

「お前がはぐれたから捜しに来たんだよ」

「？」

俺が何を言っているのか分かっていないようだ……

ま、見つけたただけ良しとするか

「さっさと合流するぞ」

「そうだな」

そして合流しようと足を進めようとしたら

「ツカサ！おんぶして！」

こんな言葉が聞こえてきた

「へいへい……」

時間を無駄に経たせるよりはましなので、要望通りおんぶしてやったそしてそのまま公園を出ようとしたら

「なあツカサ」

当麻に呼びとめられた

「何だよ、早く行こうぜ」

「何か聞こえねえか？」

何を言っているのか分からなかったが耳を立てると音が聞こえる

「あっちの方か？」

「行ってみるか？」

そうだな……下手に動くのはあれだけど、そんなに離れている感じはしないから別に戻って来れるだろ

「チルノ、良いか？」

「あたいは別に良いよ」

と、了承も得たのでそっちに行ってみた

「あ、お帰り」

「お帰りなさい」

キノとつかさが出迎えてくれた

後の二人は……まだ続いているのか……

よく飽きないな……

「思ったより遅かったですね、何かありましたか？」

「話すのも嫌なんだけど……」

「それは何故ですか？」

「何故って言われても……」

当麻も苦い顔をする

「話すだけ無駄だとは思うが一応話すぞ、後悔はするな、キノ」

「……？」

良く分かっていないようだ

そして俺はさっきあった話を話し始めた

「この辺……か？」

「だろうな」

俺達は噴水の前に居るのだが、その反対側で歌っているみたいだ

「面白そうだから早く行こうぜ」

「だな」

当麻の言葉に頷きその音に近寄っていくと歌が聞こえてきた
結構かっこいい感じだなーとか思ってたさらに距離を縮める

「かなり近いな」

「とりあえず顔を拝見するか」

そして俺たちはその人物の顔を――――

「――――そのー全貌ー！ダークヒーロ――――
！アク」「お前はここで何やってんだー！ー！」「グッホオ
オオオオオオオ！」

見た瞬間に三人でとび蹴りを喰らわせていた

「な！？てめえら！何でここに居る！そして何故いきなりとび蹴り
をした！」

いる理由は答える気は無い、敵だし

何故とび蹴りをしたかって？理由は簡単だ

「「ただ単純にむかついたからだ」」

「それだけの理由で！？」

それ以外の何があると思っっているんだ？こいつは

「てか何でここに居るんだよ、お前」

当麻がそう言うてから気付いた

確かにこいつは禁書目録の世界でチルノがブッ飛ばしたはずだが……？

「知るか！俺様が飛んできた場所がここだったんだよ！」

こいつはチルノにブッ飛ばされた後に何かに巻き込まれてこの世界
に移動してきたのか！？

出来ればこいつと関わりあう事はもう嫌だと考えていたんだがな……
とりあえず――――

「俺達の視界から消えされ」

「何でだよ！？俺様はさっきからここで歌っていただろうが！」

「そんなの知るか、さっさと消えてくれ、芥川」

「お前もそう言うのかよ！てか何だ芥川って！？俺様の名前は――
――」

「あたいはあたいより弱い奴は興味無いよ！」

「……………」

ちなみに俺、当麻、チルノの順な

その言葉の三連コンボにより奴は精神的にノックダウンしていた

「……何なんだよてめえら！そんなに俺様が嫌いか！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「せめて反応しろよ！」

ここに居るだけ時間の無駄のような気がしてきた

と、いうか無駄なんだろう

「帰るか」

「だな」「そーだね」

「お前ら！俺様がここまでコケにされて黙っていると思っているのか！」

そして奴はギターを構えた

「……黙っているとは思わないな」

「分かっているみたいだな！」

「俺たちは気にせずにそのままそこで一生歌ってろ」

「そっちの黙っている訳が無いって意味だったのかよ！？」

「それ以外に何があるんだ？」

「戦いだ戦い！バ・ト・ル！」

「ああ、そういう事」

「ようやく分かったか！」

「あたいに負けたのにまた戦うのか？」

こいつの実力はチルノ以下だという事は分かっている

「やるだけ無駄だろ」

「そんなもの！やってみねえと分かんねえだろうが！」

……何か今のセリフが負けそうな奴が言いそうな言葉のような気がする

「いくぜ！」

二秒後

「……………」

「さて、今度こそ行くか」

今までのイライラなどが募っていたのか俺たちは全く手加減もせず

に攻撃した

結果、奴は屍に「なってねーよ！勝手に殺すな！」

「「チッ」」

「何！？その死んでなかったのかよ！みたいな反応は！」

「おっしゃる通りの意味ですが？何か？」

「くそう！テメエら！覚えとけよ！」

そんな言葉を残して奴は走り去っていった

「なあ、ツカサ」

「何だ？」

「覚えとけよって事はまた俺達の前に来るのか？」

「……………」

考えるのはやめておくか

それより、早く行かねえとな

皆、待ってるだろうしな

「……………って事なんだけど」

聞いていてキノは苦い物を食べたような顔になっていた

「……聞く価値も無かったですね」

「だろ」

「それより、無事で良かったです」

「ま、心配させて悪かったな。それより……あの二人のは何時になつたら終わるんだ？」

そう、結構長い間話していたのだが一向に終わる気配が無い

「あ、それならそろそろ終わるはずだよ」

つかさがそんな事を言った

それもそうか、泉の運動能力はかなり高い、そこから推測するに――

「ま……待ちな……さい……こなた……！」

「捕まえて御覧！かがみ！ほーっほっほ！」

「いい加減に……しな……さいよ……」

かがみの体力が無くなるって事だ

しかし、それでもかがみもかなり運動できるようだ

「つかさ、かがみを連れて自分の家に帰った方が良くないか？」

「そうだね、このまま一緒に居ても時間が過ぎるだけかもしれないしね」

つかさが向いている方向を見るとそこにはOとRとZで表す事が出来そうな姿勢のかがみがいた

……そこまで疲れたか

「お姉ちゃん、このまま帰ろう？明日でも案内出来ると思うし」

「……悪いけどそうさせて貰うわ」

「……まあ、明日もあるし大丈夫」

だと思いたい

「それじゃ」

「じゃあね」

そうになると、必然的に

「……」

「ん？私の顔に何か付いてる？」

「いや、別に」

まともな案内はさせてもらえそうに無いかな

「失礼なことと思ってない？」

「そんなこと………1ミクロンも思っていねえよ」

「逆に信用し辛いよ！？その間の所為で！」

「とりあえず、今日はこのまま帰るか、当麻」

「そうだな」

帰る姿勢を見せた俺と当麻だったが

「ちょっと待ってよ！」

泉に呼びとめられた

襟元を掴まれて

もう、窒息しそうですよ？泉さん？

「まだまだ時間はあるんだからさ!どっか行こうよ!」

「……………」

「それよりうちに行く?ゲームとかあるよ!」

「……………」

「ねえ、話聞してる?二人とも」

「……泉さん」

「ん?何だい?木乃ちゃん」

「二人の首を絞めていますよ?」

「え?」

もはや意識を保つのも限界に近い

当麻に至っては泡を吹いている

「あ!ツカサもツンツンもどんどん顔が真っ青になっていく!面白
い!」

「ちょっと!?!二人ともしつかり……………」

そんな言葉を聞きながら俺の意識はフェードアウトしてしまった

「うん……」

『あら、聞こえたみたいですね』

「誰だ!?!」

『恐れなくて良いですよ、私は貴方の味方ですよ』

「……………」

『そう言っても信じては貰う事は出来ませんよね』

「………用件は何だ?」

『今、私も感じています、この平和な世界を含め全ての世界が危機
に陥っている事を』

「お前は一体何者だ?」

『そうですね、幽霊、という表現がぴったりですかね』

「……………幽霊、ねえ」

『意外と驚かないのですね』

まあ、もう不思議は見慣れているからな

『そうですか、確かに私の事はどう思ってくれても構いません』
でも、とそいつは続けた

『貴方にヒントを差し上げようと思ってここに来たのです』

「ヒント？」

『私を捜して下さい』

言っている事が分からない

「一体どういうことだ？」

『それでこの世界は守られると思うから……』

するとそいつの体が透け始めた

「おい……体が……」

『どうか……過酷な運命を背負った私の娘を……守――――』

――』

言葉を聞き終わらないうちに俺の体は光に包まれた

第十七章 行動（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「……………」

いや、御免……マジで

「一体何してた、お前」

テストの勉強

「は？」

なんかいきなりテストがありますとか言われてそれ頑張ってた

「お前にしてはえらくまともな理由だな」

……執筆出来ないのがとても辛かった

「……今回はゲストもなしで尺も短めにするか」

……ありがと

「とりあえず、もうちょいで終わりそうだな」

そだね、次の世界についてはあんまり考えてないけど候補はいくつかあるから

「ほう」

ま、まったりとやっていこうと思う

「頑張れ」

あ……

「どうした？」

後、二週間ちょっとで期末……

「……頑張ってくれ」

ちくせう……

「作者がかなりブルーなので今回はこの辺で、ありがとうございしました」

第十八章 同行

「うう……」

「目が覚めましたか？」

重い瞼を上げ、声のする方向を見るとキノが居た

「ここは……？」

「泉さんの家です」

「泉の……？」

さっき家に帰ろうとして泉に首を絞められて……

そこから覚えていない

周りを見渡せば一面に壁があり、自分のいる所には布団が敷かれている

あの首絞めで俺は気絶して、看病するために泉の家まで連れて来られたってことか？

「簡単に説明するとそうですね」

「人って案外簡単に意識無くなるんだな……」

「そうですね」

ちなみに当麻は未だに気絶していた

俺より強く締められていたからな

すぐに意識を取り戻す方がおかしいか

それにしても……

「案外片づいているな」

「……失礼ですよ」

そんな事を言われましても……

いつもの泉のイメージからすればそう思ってもおかしくないだろう？
例えそれが失礼なことだったとしても

「……失礼ですがツカサさんは人の事を考えないで発言したりすることが多くありませんか？」

「……」

よくよく考えてみれば確かにそうかもしれん
これからは少しは考えて話す事にするか
すぐに治るとは思わないけどな

ハッハッハ

「そして肝心の泉は何処に行ったよ」

「泉さんなら……」

キノが指差したのでそちらを見てみると疲れたのか眠っている泉を見つけた

寝顔とか静かにしてりゃ可愛いものにな

趣味が趣味だからな……

勿体ない……

「とりあえず……」

俺は寝ている泉のところに近づき、中指を親指にひっかけて力を込めた

「唸れ！俺のシャイニングフィンガー……！！！」

「痛……！！！」

バチツと小気味のいい音と泉の悲鳴が見事なハーモニーを奏でたちなみに俺がしたのは俗に言うデコピンだ

昔良くキズナにやっていた

曰く、『結構痛いんだよ』

あいつ以外にやったのは初めてだが本当に結構威力があるみたいだな
一発で目が覚めたみたいだな

「いきなり何が起きたの！？」

「お前の額の前であり得ない静電気が起きていたんだよ」

「嘘！？怖いじゃん！」

周りを見渡し始める泉

その視線が俺をロックオンして離さなかった

「あ………」

「よ」

俺は軽く返事をさせて貰った

違和感も何も感じずに返事をしていたから気付かなかったのだろうな
「起きたの！？ 司くん！？」

この通りピンピンしてるよ

まあ、さっきまで生きた心地はしなかったけどな

「良かった」

それはそれは

「私が犯罪者にならなくて」

「いやそっちかい！！」

起きあがって間もないので調子は出なかったが流石にツツコミを入れさせて貰った

「でも無事でホントに良かったよ」

「さっきのセリフが聞こえてなけりゃもっと良かったんだけどな……」

こいつと話すと疲れしか溜まらない気がするな……

ハア、と、ため息を一つ吐いた

「そだ、時に司くんや」

「今度は何だよ……」

「お腹は空いてはおらんかね？」

そう言われてみて思った

かなり腹が減っていた

一応聞くが泉、俺ってどれだけ寝ていたんだ？

「昨日気絶してから半日は経ってるね」

アハハと笑いながら答えている泉

今、言われて気付いたが、かなり腹が減っていた

そこまで時間がたっていたような気はしなかったんだがな
ん？

ってことは今はまさか……

「そ、お察しの通り日曜日の午前中だよ」

「マジか」

「マジだよ」

「……………」

時間が無いっていうのに……

俺は一体何で気絶なんかしたんだ……

一体何で――――

「十割お前の所為だろ!」

「うお!?!いきなり何!?!」

こいつに對してこんなことを言ってもしょうがないか……

あんなことで気絶しないくらいの体の丈夫さは欲しいな……

「司くんが混乱していそうだけど気にしないで話をしても良いかな?」

「おっと、悪いな」

そうだ、何で泉は俺に對して腹が減ったか何か聞いてきたんだ?

「お腹が減っているんだったらご飯作ろうと思ってさ」

「え……………」

「何、その意外そうなものを見る目は!?!」

いや、俺の泉のイメージってもっぱらゲームばっかやってて女の子ってイメージが結びつかなくてな

そりゃそんな目にもなるさ

「むう、そんな言葉すぐに撤回させてあげるからね!」

そんな事を言っただけで泉は部屋から出て行った

「……ツカサさん」

「何だ?キノ」

「泉さんの料理ですけど、その辺で売っているようなものとは比べ物にならないくらいおいしいですよ」

「そいつは楽しみだな」

しかしそんな悠長な事は言っていられない

「キノ、今日泉に話すぞ、俺達の事」

「……流石に話さないといけませんか」

今、話さないで何時、話すっていうんだ?

しかもここには長く居すぎているような気がする

これは俺の感覚だな

それより、泉にこの事を話さないと種を見つけない以前の
問題だ

「……分かりました」

「……よし」

「ですが――――」

ここまで話して何か反対意見でもあるのか？

そう思ったが

「泉さんのご飯を食べてからでも大丈夫ですよね」

「……」

キノはどうやら泉の飯の虜になったみたいだな……

ま、キノがここまで勧めているんだ

来るまでの時間が待ち遠しいな

「おっ待ったっせー！――！」

ようやく来たか、お腹と背中中の皮が張り付きそうだぜ

「古臭い言い方だねえ、司くん」

うっせえ、これでも俺はまだ高校生だ

古い人間なんて言われてたまるか

「それにしてもホントに美味そうだな……」

「ふふん！ どうだい！ 参ったか！」

「いや、別に」

「嘘ォ！？」

素直に口に出さないのが俺クオリティ

しかし……これはキノの言い分も分かる

一つ一つの料理が丁寧に作られている

料理の出来ない俺からすればすげえの一言しか言えない

「まあ、ありがたく頂くよ」

「どーぞどーぞ」

じゃあ早速――――

「ってキノ！？俺より先に食ってんじゃねえよ！そもそもこれ俺のじゃないのか！？」

「……さっき言いましたよね、泉さんのご飯を食べてからでも良いと」

「それが今なのか！？今なのか！？」

「そんなこと言わないで早く食べてしましましょう」

「だから俺のだろうがーーーーー！！」

「「ごちそうさまでした」」

「二人とも良い食べっぷりだったね」

いや、俺の場合キノに全て食われそうだったから必死に食っていただけだ

むしろ味わって食べる事が出来なかったので残念すぎる……

そんな事を思っけていても美味しかった事は事実なのでまた食べたいのが俺の正直な感想だ

「それにしても当麻君起きないね、まさかもう逝っちゃってるとか？」

「それは無いと思う」

幻想殺しの所為で俺よりきつく締まっていたんだろうな

「ツカサさん」

神妙な顔でキノが俺を呼んだ

「どうした？」

「……話しましょうか、ボク達の事を」

「……そうだな」

俺とキノしか居ないけど—————ん？

（キノ、チルノは？）

（ゆたかちゃんと一緒に遊んでいます）

（……泉に呼んできて貰うか）

そうやって小声で会話していたのが気に食わなかったのか
「二人の世界に入るのはやめて欲しいな」

泉が頬を膨らませながらそんな事を言ってきた

……一般人からすれば電波のような話だが聞いてもらうしかないかな

「泉、チルノを呼んできてくれ」

「チルノちゃん？分かったよ」

そして部屋から出て行った

と、思えば戻ってきた

「家族水入らずの会話なんだったら私はそのまま抜けるけど？」

「そうしたいのは山々なんだが……お前にも話があるんだ」

「え？私？」

「そうだ」

「ん〜良く分かんないけど良いよ〜」

じゃあ待っててね〜、と言い、ようやく部屋から出て行った

「……信じて貰えるでしょうか」

「……信じてもらうしか無いだろ」

「……………」

まあ、俺が起きたって事を知らなかったチルノは俺が呼んでいた事を知るや否や飛ぶように俺の元に來た
相変わらず頭突きのオプション持ちで

もう一回意識を手放しそうになったが気合いで持ちこたえた

余談だが飛ぶように、なんて言ったが実際飛んで俺の元まで來たのである

「で？一体何の話なの？」

そして今、俺と泉とキノとチルノで円を書くように座っている
今から重要な話を話そうとしているのだが—————

「何で真ん中にお菓子が置いてあるんだ!？」

「いや〜、話が長いんだったら必需品じゃないかな〜って思ってたさ」
……もういいや

重たい空気で話すよりは楽に話せるだろうな

「じゃあ始めるか。時に泉よ」

「ん？どうかした？」

「お前は……俺たちが違う世界の人物だって言ったら信じるか」

「うん」

「……そりゃ最初から信じてもらえとは思っていない――――」

「って信じんのかよ！？」

流石のキノも少し驚いていた

こんな訳の分からない話を始めた奴の事を信じるとは……

「……何時からそのように思っていたのですか？」

「転校してきた初日からだよ」

何てこった、最初からそんな予想をしていたのか

流石にこれは脱帽ものだ

「司くんは知らないけど木乃ちゃんは何か見た事あるな〜って思ってたさ、放課後に当麻君とかがみが来たじゃん、それで完全に思ったね」

薄い胸を張る泉

でかかったら揺れたんだろうか……ってこんな話じゃ無い

「当麻を見てなのか？」

「当麻君……というか上条 当麻って言った方が早い？」

何でその名前を！？俺たちが一回も言っていないのに！？

「いや、知ってるんだよ、とある魔術の禁書目録って名前であるんだけど」

驚いた、この世界も俺と同じ世界で他の世界が作品としてある世界なのか

「それにしても電撃文庫のオールスターだね〜、で、何のようなの？」

「そう言ってくれば話は早いな」

「私に世界を救って欲しいとか！？」

「……あながち間違いじゃないんだがな」

半分正解ってとこだな

「じゃあなんなのさ」

「……それは俺もうまく説明は出来ないな」

「どゆこと？」

「とりあえず現状を簡単に説明するところから始めるか」

「なるほど、ミストね」

「それで、だ。奴らが“鍵”とか言って集めているいる人物の内の一人が泉、お前って事だ」

「そうなんだ」

「……意外と驚いたり落ち込んだりはしないんですね」

「そりゃ驚いたりはしてるけどさ」

「けど？」

「それを上回るほど今はコーフンしているんだよ！」

「ビシィ、と音がしそうなほど俺を指差してそんな事を言った

「だってこんな現実でこんなイベントに参加できるなんてオタクの目線から見れば夢のまた夢だよ！それに実際に参加できるなんてサイコーだよ！」

「……怖さより好奇心が先に出てやがる

どれだけ嬉しいんだよ

流石のキノも苦笑いしているようだ

「それにしてもさ」

「何だ？」

「木乃ちゃん……今から関係者になるしこの言い方は辞めよっと、キノちゃんは分かったけどツカサ君とチルノちゃんてどんな人なの？」

「あー……」

チルノについては何となく説明は出来るが俺はどうともいえん

「謝られてもねえ」

確かにそうなんだが……謝らずにはいられなかった

「俺達も良いか」

「どうぞどうぞ、その方が喜ぶかもしれないから」

そしてその写真の前に立ち、手を合わせた

こんなことに娘さんを巻き込んで申し訳ございません……

だけど、彼女は必要な、大切な人です

何があっても絶対に守ります

なのでどうか安心して見送ってやって下さい

「……フウ」

「終わった？」

「ああ」

それにしても泉の母親か……

どんな事をしているんだろうな

そこには、泉とそっくりな優しい顔をした母親が映っていた
とてもきれいで思わず見とれてしまっていたが――――

「……………！」

「どうしました！？」「どうかした！？ツカサ君！？」

「いや……大丈夫だ……」

何だ？

写真を見ていたらいきなり吐き気が……

それこそまるで種を見たときのような――――

その時、俺の脳裏にある会話が思い浮かんだ

『今、私も感じています、この平和な世界を含め全ての世界が危機
に陥っている事を』

『そうですね、幽霊、という表現がぴったりですかね』

『私を捜して下さい』

『それでこの世界は守られると思うから……』

『どうか……過酷な運命を背負った私の娘を……守――――』

――

……言う事か

俺はその写真を手に取りじつくりと眺めた

「……ハハ」

「ツ、ツカサさん？」

「キノ、泉………種だ」

「「え……」」

「この写真、泉の母さんが写っている写真がこの世界を創っている種、だ」

「本当ですか!？」

間違いない

今更だがこの写真に写っている人物

俺にヒントを教えてくれたって訳か

どれだけ娘の事を思っているんだろうな

人として会う事が出来ず残念な気持ちで一杯だ

「これで帰る事が出来ますね」

「ああ」

ようやく自分の世界に帰る事が出来るんだな

次の世界は一体どこに行くんだろうな

「あのー私はどうすればヨロシ？」

「何言っているんだ、泉？お前に来てもらわないと困るからな」

「でもどうやって移動するの」

「それはまあ、これを使ってだな」

と懐を探すが見つからない

「……ツカサさん？」

「何で無い――――って先生の家に荷物が置きっぱなしだ」

上白沢先生の家に荷物を置きっぱなしにしていた事を思い出した
その荷物の中に水晶も入っていたような気が……

「しっかりして下さいよ」

にやにやしながらかつち見るなよ！

恥ずかしいじゃねえか！

とりあえず寝ていたチルノを背負って先生の家に向かった

「……その会話聞く限り私がお前の記憶から居なくなっている様にも聞こえるが？」

先生の家に着き、帰る事情を説明していたが———確かに先生の事を置いて帰るようにも聞こえなくは無い

「いえ……でも、その———」

「一体水晶が君の懐に入っていたらどうしたんだ？ん？」

笑ってるけど何だろう……冷や汗が止まらないよ

「多分帰ったかと———」

そう言いかけた瞬間、頭に激痛が走った

「痛エエエエ！」

「……人の事を忘れるのは人間としてどうなんだ？ん？」

「恥ずべき行為です……」

「良し」

この激痛が治まるのは何時なんだろうな

そして泉はほぼ毎日これを喰らっていたのか……！？

どうなってるんだ、あいつの体は

「じゃあ、帰るか」

「そうですね」

いつも通りの返事をするキノ

「泉 こなた！世界中のオタクを代表して行ってきます！」

いつも通り（？）の返事をする泉

「……少しは緊張感を持て、泉」

ため息をつく先生

思い思いの言葉を俺に言った

……さて、後少しで移動するか？

そんな事を思っていたら部屋のドアが開いた

「皆？ 一体どこに居るんだ――」
当麻が居た

.....忘れてた

「ちょ！？ 俺を置いて行くなよ！」

「.....悪い」

「それで済む問題じゃないだろうがー！」
こっちに走ってくる当麻

もう光が俺達を包みこんでいるんだが.....

「間に合えー！ー！ー！」

「頑張れ当麻」「頑張ってください」「当麻君、頑張ってちょ」
「頑張れ」

「不幸だ――！――！――！」

そして光が俺達を包みこんで俺たちは、らき☆すた、の世界から別
れを告げた

『ご苦労だったな、J』

「どうも」

「.....しかし、何故私を連れ戻したのですか？」

『お前には別の事をしてもらうことにした』

「別の事.....ですか」

『そうだ』

「.....分かりました、貴方の命令ですから」

『詳細は追って伝える、待機している』

「.....はい」

そしてザクロは消えた

「結構酷い言い方じゃ無い？」

入れ替わりに朝倉 涼子が入ってきた

『.....いきなり何だ』

「あらあら、凶星？」

『何だ、と聞いている』

「怖いわねえ」

「そこが良いところなのでは？」

「それもそうね」

『……』

「流石にふざけ過ぎたかもね、用件はね——」

一呼吸置いて朝倉 涼子は言った

「例の準備が出来たわ」

『ようやくか』

「それでも結構苦労したんだから労ってくれても良いんじゃないかしら？」

『貴様たちは我の命令を聞いていれば良い』

「そーですか」

「朝倉 涼子、我の恩人に口答えするな」

いつの間にか男が一人増えていたようだ

「あら、貴方はどうしたのかしら？」

「……申し訳無い、ゼロを逃がした」

『……目処は立っているのか』

「無い、だが全身全霊を持って行方を捜す」

『……まあ良い、部屋で待機しているザクロを連れて行け』

「感謝します」

そして男は消えた

「お堅いわね」

『それで、例の事はどうなんだ』

「流石に強い方々はまだ時間がかかりそうね」
「だけど、と続けた」

「何人かはする事が出来たわね」

『……試運転をさせるか』

「そう？」

『奴らと接触させろ』

「それはいきなり過ぎないかしら？」

『どうせ試運転だ、傷付こうが何の影響も無い』

「やっぱり貴方って怖いわね」

じゃあ、行ってきたまゝす、と残し、朝倉 涼子も消えていった

「さて、私は散歩にでも行きましょうか」

『……好きにしろ』

「クス……」

そしてJと呼ばれていた男も消えていった

『『願』『技』『知』『絆』が我が手中に……『強』は奴らの手中に、か……』

座りながら一人でそのような事を言っている

『まあ良い、奴らから奪えば良いだけの事だ』

そしてまだ独り言は続く

『今は“鍵”とは異なる鍵だが……対なる鍵を持つ者の搜索にも手を伸ばすか……』

第十八章 同行（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「……作者が居ないんだが、一体どういうことだ」

「それについては私が説明するわ」

「あ、紫さん、今回はゲストでは無かったはずでは？」

「緊急的な事だったからね」

「何かあったんですか？」

「それについては私が順番に説明するから良く聞いてね」

「はい」

「まず、作者のテストが終わったのよ」

「そうですね、その終わった一週間以内にはUpするとか張り切っていますでしたっけ？」

「そうなんだけど、作者はワードを使って執筆しているのよ」

「そうだな、それは俺も知っているけど……それが何か？」

「その執筆中のデータが破損して全部パアになったのよ」

「……………へ？」

「だから、データが壊れて全部駄目になったって事よ」

「今回作者が居ないのはそれが原因ですか……」

「それもあるんだけどね」

「まだ何かあったんですか!？」

「つい最近にこんな物が発売したのよ」

「何々……モ○スターハ○ターポー○ブルサ○ド？これが？」

「何かふてくされた作者が鬱憤を晴らすべく狩猟に没頭していた事も原因の一つね————ってツカサが居ないわね。あら？置き手紙が」

『ちよっと作者を殺ってきます』

「……私一人で進める事になるみたいね」

「もう少しすれば長期休暇のため少しでも多く執筆したいと言っていたわね」

「そして時間があれば何の記念なのかは知らないけど日常編を書くみたいよ」

「最後に……Upが遅くなって本当に申し訳ないわね、作者に代わってお詫びを申し上げるわ」

「そしてこんな状況でも読んでくださっていた皆さまはこれからこの作品をよろしく願います————」

え！ちよっとツカサくん！？何で君ここに来てんの！？今、ジン○ウガの狩猟中————

『うるせえ！一発殴らせろ！そして関節も決めさせろ！』

ちよ！痛い！殴るのはやめてくれ！そして作者に関節技をかけるのもやめてくれ！折れます折れます！伝統の作者の腕が折れます！

『うるせえ！知った事か！そのまま折らせろ！』

マジで辞め……ちよ……アア————
|！

「……大丈夫……よね」

第十九章 役目（前書き）

すっげえ短い……

投稿する意味あんなのかこれ

とか聞こえてきそうな位いつもより少ないです
でわ、ドゾ

第十九章 役目

「—————」とおおおおおお！？」

そんな声と共に俺の世界に戻ってきた

何やかんやで間に合ったようだ

良かった良か「良くねーよ！！」

「あ、大丈夫だったみたいだね、当麻君」

「そんな他人事の様言うなよ！？」

「だって他人事だし」

まあ、自分の身に何も起きていなくちゃ、そりゃ他人事だよな

「まあ、お疲れ」

「本当に疲れたわ……ちよつと俺休む……」

そう言い残し当麻はさっさと教室から出て行った

まあ、そこまですぐに出るわけでもないからな

ゆっくり休め、当麻

「じゃあ、俺は報告に行くかな。キノ、チルノを頼むわ」

「分かりました」

「行くぞ、泉、先生」

「ラジャー——！」

「ああ」

背負っていたチルノをキノに渡し、俺と泉と先生は紫さんの元へ行った

「お疲れ様、ツカサ」

「今回はそこまで疲れなかったですけどね」

死にかけてはなかったが

「はい、種です」

「ええ、確かに受け取ったわ」

「そしてこっちにいるのが泉と上白沢先生」

「ども！」

「…………どうも」

「……“鍵”を見つけたただじゃ無かったのね……ありがとう、ツカサ」

「いえいえ、そんな大層な事はしていませんけど……」

実際、人を見つけて連れてきたただけだ

「でもね……やっぱり嬉しいのよ。私の好きな場所の住民がちゃんと生きているって事が、ね」

「そう……ですか」

まあ、自分にとって大切な人が無事であれば嬉しい事か

俺もキズナが無事であれば嬉しいだろうけどな

「とりあえず、私は二人に話があるからツカサは出てってもらえるかしら」

「分かりました」

後の対応は紫さんに任せて俺は久々の休憩としますか

「さて、まずは貴方ね」

「そうか、それで何か？」

「貴方は私と一緒にこの世界で見張りをしてもらえるかしら？」

「動くのはあまり得意ではないからな、そうさせてもらおう」

「そして……次は貴方ね」

「ほいほい」

「まずは……貴方は自分の世界の人物でこの世界に連れてきたい人物はいるかしら？」

「…………い」

「い？」

「いません」

「何故かしら？」

「私は……私は自分の友達を危険な場所に連れてくる気はないよ。」

それに……」

「それに？」

「私には力が無い……もし、敵が来たとしても私はただの足手まとい……」

「……」

「私だけでも一杯一杯になってしまうのが目に見えてるもん」

「……やっぱり“鍵”に選ばれるだけあるわね」

「……褒められてるの？」

「ええ、後……貴方にはツカサたちと一緒に世界を周ってもらおう予定よ」

「……ふえ？」

「貴方に戦う力を私があげるわ」

それにしても一体どうなってんだと思うよ

俺の世界の時間が止まってんのか？

あの日の夜から全く空の色が変わってねえ

「どうなされました？」

「ん？ おお、陸、居たのか」

「ええ」

この犬は……何で喋るんだろうね？

まあ、他の世界では戦いが当たり前だったり、魔法を使っていたり何でもあるだからな

喋る犬くらい普通な存在か

「なあ、陸」

「何でしょうか？」

「俺たちは……世界を守りきれているのかな？」

「……それは……分かりません」

そりゃそうだよな

前にもキノに言われた

“目の前の事を一つ一つ解決していく”って感じだったけ？

全体を見ようとするから失敗するんだろうな

「すみません、お役に立てなくて」

「いや、こんな質問をした俺も悪い、許せ」

笑いながら陸の頭を撫でた

いつも笑っているような顔をしているから分からないが嬉しそうに目を細めた

さて……次はどんな世界に行くんだろうな

「……ここは？」

「そんなの私にも分かんないよ」

ゼロとにとりは薄暗い廊下を歩いていた

周りには散乱した生ごみや空き缶

時たま何かの死骸をあさっているカラスがいたりもした

「……ここにユカリはいるのか？」

「さっきと同じ、私にも分かんないよ」

「……情報収集をするぞ、にとり」

「うん」

二人はそのまま奥の方へと進んでいった

外では雷が鳴り響いていた

「はあ……」

周りが木々で囲まれてしまっているので誰も来ないであろう場所に何故か神社があった

「何かが起きているのは分かるけど……もう動きたく無いわね……」
そこで独り言を言っている赤と白の巫女服……と言うにはかなり疑

問が残る服を着ている少女が居た

「しっかし……何で神社ごと移動するのよ……おかげさまで参拝客も全く来ないわよ……」

「前からあまり来てないような気がするけどね」

何時の間にやらその隣に幼い女の子……なのだが何故か大きな角が二本、鬼と呼ぶに相応しい女の子がいた

「そんなことは無い！人なら一杯来てた！」

「神社の中に入ってお茶を飲ませた人物を抜くとどうなるんだい？」
「……」

少女は黙りこんでしまった

「凶星だね」

「うっさい！」

「あっはっはっはっは！！」

「笑うな！」

「でも……動かないと何も始まらないような気がするけど？」

「それは分かってるけど……」

「けど？」

「どこをどう飛んでもここに戻ってくるんだからしょうが無いじゃない！」

そう、この少女、この世界から出る方法を探していたのだが……

この神社から離れるように飛んでも元の神社の場所に戻ってきてしまうのである

「でもねえ……それをどうにかするのがあんたの仕事じゃないのかい？」

「私の力で何も出来ていないから動けないのよ！」

少しだけ涙目になりながら少女は叫んだ

これには流石に女の子も驚いたようで

「ご……ごめんよ」

「……全く……あのスキマ妖怪……暇な時にばかり来て、こんな緊急時には来ないなんて……」

「……………」

それに関してはどう意見なのか女の子は黙り込んだ
そして少しだけ静寂があった後、少女は口を開いた

「……………そうよ、これは夢、夢なのよ」

「夢じゃないって!」

「私は奥の部屋で休んでくるから」

「夢と休むことってどうつながるんだい!」?

「もう疲れたのよ……………何かこの神社に起きない限りもう意地でも動かないわよ」

「ええ!?!じゃあ、もし、この神社に人が降ってきたら動くかい!」?

「ええ、そんな事があったらね」

じゃあ私は寝るからね、と言って少女は奥に戻っていった

「はあ……………あれじゃあ本当にそんな事が起きないと動きそうにも無いね……………」

そして女の子は空を見上げた

「そんなアホみたいな事起これば良いけどねえ……………」

そしてため息が一人分聞こえてきた

第十九章 役目（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

グッフウ……………

「さて、作者、あとがきだ」

本当に最近の君何なの……………？

「俺は俺だ」

さいで……………まあいいや、今回のゲストは—————

「ヤッホー！それは私、こなたであります！」

「泉か……………ようやくだな」

「そだねー、ようやくゲストとしてお呼ばれされました」

まあ、基本仲間になった人以外ここに出さないからな

「キズナとあいつについては？」

それはそれ、これはこれ、のれそれ

「何だよそれ……………」

確かアナゴの稚魚だったような気がする

かの有名な時○沢先生が言っていた

作者も前、食べてみたが意外とおいしくてハマった

「へー」

まあ、自分、一番好きなのはカワハギだけど

「お前の好みは聞いてねえよ」

（・ω・）

「そんな顔されても……………ええい！とにかく本編についてだ！」

「なんか私が凄い事になってるよね」

ふふふ……………この小説は基本何でもありだからな……………

「……………」

何その目！？

「別に……………お前の事だから、この泉の力についてなんも考えて無さ

そうだと思ってさ」

それは反論せざるを得ないぞツカサ君！

「いきなり人を指差すな！」

すいません！

でも本当の事だぞ、泉の力についてはちゃんと考えてあるから

「それならいいや」

「私はw k t kだよ」

……期待し過ぎんのもな」

「そして最後の二つ」

「あれは一体何なのさ？」

最初のは……まあ、君らが次に行く世界だな

「ちょ！？ネタばれじゃね！？」

まあ、どの世界かは言っていないからギリギリで大丈夫だ、問題無い

「問題ありまくりだと思っただけだね……そのセリフとか」

「そして次の二人の会話」

さて……どうなるんだろうね

「まあ、分かる人は簡単に分かるからな」

「これは期待していても良いのかな？」

……ノーコメントで

「……結論」

何でしょうか？

「少しは考えて書けやヴォケェ！」

ちよっ！ようやく体力が回復し始めたところなのに！

ここは三十六計逃げるに限る！

「待てや！」

誰が待つか！

「おおよ、このまま作者はどうなってしまうんだろうね」

「あ、ちなみにユニークアクセスが5000を突破しましたっわっ
ぱちぱち」

「と、言う訳で次のu pは日常編になるそうです」

「作者の脳をフルに使って書くコメディーみたいな物になる予定で
す」

「でわでわ、今回も読んでいただきあじゅじゅした〜」

日常 其の一（前書き）

ユニーク5000突破記念で書きました！

文章がいつも以上にぐだぐだですが気にしないで読んでください！
尚、本編とは一切関係がございませんのでそのつもりで
でわ、ドゾ

日常 其の一

「唐突だけどツカサ、当麻、貴方達は桃太郎って知ってるかしら？」
本当に何の脈絡も無く紫さんが言ってきた

「まあ……一番かどうかは知らねえが有名な昔話だな」

「確かに。桃から生まれた人間が、犬、猿、雉を下僕に従えて鬼を皆殺しにして宝物を奪い取る話だよな」

「……ツカサ、何かおかしくねえか？」

あらすじをざっと話せばこんなもんじゃねえか

そもそも何で団子一つで命をかけるのか俺には理解できん

「そんな考えで子供が聞いていたら嫌なんだが……」

「で、俺の考えは置いておいて……何でいきなり桃太郎？」

俺らとは全く関係ないような気がするんだが……

「それがそうでもないのよ」

「そうなのか？」

「ええ、貴方達は知っているから何も違和感を感じないでしょうけど……同じ話が他の世界にもあるのよ」

俺と当麻が知っているってことか

まあ、同じ話があるって事はそれが繋がっていたりするんだろうな

「って……まさか桃太郎も改変されたって事じゃないですよね」

「はあ？ そんなバカな訳————」

「それで正解よ、ツカサ」

当麻が口をアホみたいに開けて止まっていた

適当に俺は言ったんだが……まさか正解だったとは

「そして、それを俺と当麻に直しに行って欲しいと」

「そういう事」

「……でも何で俺達？」

そうである

別に俺たちじゃ無くてキノとかチルノでも良いんじゃないのか？

「貴方達が一番話を覚えていそうだったからよ、いくら有名でも細かいところまで覚えていて貰わないと」

「成程……」

あの二人が知っていたとしても覚えているかどうか

キノはタイトルだけなら知っているかもしれないが……内容は読んでいるかどうかは不明に近い

チルノは……読んでも覚えて無いだろうしな……

「じゃあ具体的にどうすればいいんですか？」

「簡単よ、矛盾しているところを直していけば良いだけですもの」

「簡単に言ってくれるよ……」

ため息が聞こえた

ため息は幸せが逃げるぞ、当麻

まあ、俺も出したい気分なんだがな

「じゃあ具体的に何時から————」

「今からよ」

につこり笑いながらそんな事を行ったその時、下に例の穴が開いた

「やるかやらないかの返事も聞かずにですか————」
「！？」

そして俺と当麻は落ちていった

「「……………」」

俺たちが着いたのは至って何も無い道だった

「普通だな、ツカサ」

「このまま普通で終われば良いけどな……」

再びため息、今度は二人分だ

「とりあえず、お爺さんとお婆さんの家を探るか……」

「そうだな……」

道なりに当麻と一緒に進むと紙が落ちていた

「何だこりゃ？」

「とりあえず、読んでみるか」

俺は紙を手に取り読んでみた

『これを読んでいるって事はちゃんと桃太郎の世界に着いたみたいね。早速で悪いけど、あの水晶を取り出してくれないかしら』

「水晶って……アレか？」

「多分な」

俺たちがいつも元の世界に帰ってくるために使っている物だろう
取り出してみると、淡く光っていた

『ちゃんと指示通り読んでくれたみたいね』

「「うお!？」」

俺と当麻は驚いた

まあ、水晶からいきなり声が聞こえてきたら誰でも驚くだろう

「もしかして……紫……さん？」

『あつたり』

「これに通信機能があるなんて聞いていませんよ!？」

『この通信機能は近い世界でしか使えないもののよ』

結構ご都合主義だな、オイ

「で……これだけですか？」

『これで終わっても良いんだけどね、もし私の助力が必要だったら
連絡を頂戴、出来る限りのサポートをするわ』

「……分かりました、では一旦切りますね」

『頑張ってね』

その言葉を最後に無機質な電子音が聞こえてきて会話が終わった
……何でケータイみたいな音だったんだ？

気にしない方が良いか……

「まあ、本当に無理な時はそれを使えって事だろ？」

「簡単に言えばそうだな」

「じゃあ、家探しを再開しようぜ」

「ああ」

「ここか？」

「多分な……」

俺と当麻は爺さんと婆さんの家だと思われる場所の近くにいた

「どうする？」

「まあ、とりあえず何が起きるのは分からないからな……このまま待機しろ」

待機する事、数分後、爺さんと婆さんが出て来た

『婆さんや、わしは山へ柴刈りに行ってくるよ』

『わしや川へ洗濯に行きますよ』

「どうする？」

「爺さんに何が起こるのかが分からん……俺、爺さんについて行くわ」

「じゃあ俺はお婆さんについて行くぞ」

「無事を祈るぞ、当麻……」

「こっちのセリフだそれは……」

そして俺たちはそれぞれの行動を始めた

「にしても……川で桃が流れてくるだけで矛盾なんて起きんのか？」
考えられるとすれば桃以外が流れてくるとか？

「ま……観察するしかないかな」

婆さんの観察をする事しばらく

ふと遠くを見るように婆さんが川上の方を眺めていた

ついに流れてきたか！？

『あれは一体何なんだろうね？』

まあ何の問題も無く桃が流れてきた

少し俺は安心した

が……良く見てみるとその桃が流れていたのは――――

「向こう側！？」

まさかのこっちに流れてくるのでは無くあっちの方にドンブラコド
ンブラコと流れていた

しかも――――

『何か流れているようだけど……洗濯を終わらせないとねえ』
婆さん興味を示してねえ!?

これじゃ、桃太郎がそのまま流されてしまうだろ!?

俺はこのままじゃヤバイと思い、川に飛び込んだ

「って流れが意外と速い!？」

こんな所で婆さんは毎日洗濯してんのか!?

汚れが落ちるからか!?

そんな事を考えてる暇は無いだろ、俺!

とりあえず桃を婆さんが洗濯しているところの近くまで動かした

『あらあら、なんて大きな桃なんでしょう、持って帰ってお爺さん
と食べましょう』

そう言っただけで婆さんは桃を持ちあげて帰っていった

「ツカサ……俺は婆さんが何で一人であそこまで大きな桃を一人で
持ち帰ったのかが分かったよ……」

片手であのサイズの桃を持ちあげるって……

婆さん……貴方は人間なのでしょうか?

「くそ……少し目を離したら見失ったか……」

未だに桃太郎で爺さんが山に柴刈りに行く理由が分からない

囲炉裏とかに使う為か?

「家で待機してろよ、全く……お?」

少し奥の方に行った竹林で爺さんを見つけた

「柴刈りに来たんじゃないのか?」

爺さんの手を見てみると何かを包んでいるようなものが見えた

「昼飯を食うところを探してんのか?」

そう思いしばらく追跡すると

『中々無いのう……ん?』

いきなり爺さんが止まった

何かを見ているようだが……

『こ、これは……不思議なものもあるのじゃのう』

何に対して言っているのかさっぱり理解できん

爺さんが見えている方向を見てみると――――

一本の光る竹が見えた

「かぐや姫!？」

桃太郎と全く関係ないだろ!?

アレを爺さんが取ってしまったら、昔話がめちゃくちゃになるだろ!

「お、お爺さん! ちょっと待って!」

『ん? 何かね、君は』

「えっと……わ、私はこの山の管理をしている者の息子でありまして……その光る竹を見つける事があれば報告をしろと言われているのです」

嘘八百を並べてみた

俺の嘘を信じる奴は絶対に誰もいないだろうが下手糞だとか関係無い!

どうにかして爺さんに取りられるのだけは阻止しないと!

『ほう……で、あの光る竹は何なのかね?』

「あ、あれは……その……そう! 災いをもたらすと言われている呪われた竹なのです!」

『そ……そうじゃったのか……!』

「ですから貴方様が取られる前で良かった……一体どうなった事か……」

『助かりましたよ、これからはわしも気を付けるよ。話は変わるがここらで座れそうなところは無いか?』

「そうですね……ここらには無いので家に戻られては?」

『つくづくすまんのう』

「いいいえ、では、さようなら」

爺さんはそのまま帰っていった

……助かった

でも、このかぐや姫入りの竹、一体どうしよう……
こんな時こそ聞いてみるか

「紫さん？」

『ええ、聞こえてるわ』

「早速で悪いのですけど……この光る竹、どうすればいいですか？」

『そうね……じゃあそれをこっちに移動させるから竹の近くまで行ってくれるかしら？』

その言葉に従って竹の前まで来た

『そうしたら、この水晶をそれに当ててもらえるかしら』

「分かりました」

指示に従い、水晶を竹に当てる

すると、竹全体が一瞬光ったと思ったらそこから消えて無くなっていた

『こっちに送ったからもう大丈夫よ』

「ありがとうございます」

『いえいえ、それじゃ引き続きよろしくね』

そして通信が途絶えた

当麻の方は大丈夫だったのか？

そんな事を思いながら爺さんと婆さんの家へ向かった

爺さんと婆さんの家に戻るとびしょ濡れになった当麻が居た

「何があった……？」

「ちょっとな……」

とても疲れているようなので触れないことにした

まあ……大方、何かあって川に飛び込んだってどこか

「まあ、苦労したけど、ようやく桃太郎が産まれる訳か」

「そうだな」

流石にここは変なところは無かった

桃を切ったら人が産まれてきて、爺さんと婆さんは桃太郎と名づけた

絵本の方で助かった

もし、原作の方だったら、俺と当麻は罪悪感に駆られただろう

「これで無事に産まれたわけだが……こっから成人するまで俺達、待機してなきゃいけないのか？」

「それは紫さんに聞くしか無いだろ」

水晶を取り出す

「紫さん」

『何かしら？ 大方予想は付いているけど』

「桃太郎が成人するまで俺達ってどうすれば良いですか？」

『それについては大丈夫よ。今からその場所まで送るから』

その言葉が聞こえた直後、光が俺達を包み込んだ

『到着よ、引き続き頑張ってね♪』

「ありがとうございます」

爺さんと婆さんの家の方を見ると成人した桃太郎であろう人物が見えた

「……意外とカッコいいな」

「それには同意する……」

そしておかしな所が無いかを探すために近づいて聞き耳を立てた

『お爺さん、私は鬼退治に行ってます』

『……そうか、わしはなにも言わん、無事に帰ってこい』

「……爺さん、渋い」

大きな矛盾ではないのでスルーで良いだろ

『お婆さん、行ってまいります』

『そう……桃太郎や、お爺さんも言っておるけど……無事にね』

『ええ』

『それで道中食べるためにきび団子を――――』

「渡すんだよね？」

そしてそのきび団子を渡して犬とかを仲間に――――

『作ろうと思ったのだけど、生憎、材料が無くてねえ』

「「はい……？」」

『悪いと思うけど……この鳥の丸焼き三羽で我慢しておくれ』

「何、渡してんだ、婆さん!？」

きび団子なんかより値段が段違い過ぎるだろ!？」

それに対しての桃太郎の返答は!？」

『仕方ありませんね、それで我慢します』

「「我慢!？」」

お前の中では、きび団子>鳥の丸焼き、なのか!？」

『桃太郎、途中の武器屋で刀を貰うのを忘れるな』

『分かりました、お爺さん』

「RPGの始まりみたいな会話だな……」

これも当麻と同意見だった

そして武器屋に着いた桃太郎

『すみません、刀を一振り貰えませぬか?』

『お前さんは一体、誰だ?』

『私の名は————』

と、まあ、自分の身の上や、何故、刀が必要なのかを説明していた

『……分かった』

『では!』

『だがな……生憎、刀がもう無くてよ』

「……ツカサ、何かこんな会話さっきも無かったか?」

確かに……こんな会話をホンの数分前ぐらいに聞いたような気が――

『ここに置いてあったエ○スカ○バーとかって言う刀とは言えない
ような武器で良いか?』

「「まさかの伝説の剣!？」」

『分かりました、それで良いです』

「「そしてさっきと似たような反応!？」」

もう、この世界では価値観が根本的に違っているようだ
もしかしたら、ダイヤとかもこの世界じゃゴミ当然なのでは……？
そんな事を思っているけど物語は止まってはくれない

桃太郎と俺達は大通路に出ていた

「これで犬とか仲間にするんだろうな」

「……ツカサよ」

「何だ？」

「今までの流れで行けばここで素直にその三匹が仲間になるとは考え辛くないか？」

「……同意せざるを得ないな」

……犬と猿と雉が仲間になる事を願う

『む……？向こうの木に隠れているのは……？出てきなさい！』
すると出てきたのは

『桃太郎さん、お腰につけている鳥の丸焼きを一つ私に下さいな』

『……一つで足りるのかい？』

地獄の番犬とも言われるケルベロスでした

「って、アレを仲間にしたら流石にヤバくないか、ツカサ！？」

「いや……一応、犬だしスルーで」

「良いの！？」

桃太郎とケルベロスは一緒に大通路を歩いていた

「ケルベロスが場違いすぎる……」

そんな事を当麻が呟きながら進んでいくとまた、出てきた

『桃太郎さん、お腰につけた鳥の丸焼きを一つ私に下さいな』

そう言いながら出てきたのは

ラー○ヤンでした

「ツカサ！？アレも良いのか！？」

「ま……あれも一応、猿だし……」

「お前の桃太郎の基準が分かんねえよ！」

そして桃太郎はラー○ヤンも連れて大通路を歩いていた

「……………」

当麻も黙ってしまった

次が一体どんな生物なのか分からないからな……

『桃太郎さん、お腰につけた鳥の丸焼きを一つ私に下さいな』

そして再びそう言いながら出てきたのは

ラー○アでした

「伝説の鳥まで出てきたぞ、ツカサ……」

「良いじゃん、これなら鬼を滅殺出来るだろ」

そんなカオスなパーティーで鬼ヶ島へ続くであろう港に進んでいった

港に着いた

着いたのだが……

「地獄の番犬、最強と言っても過言じゃ無い猿、伝説の鳥を従えているのに人が誰も見向きもしないとか……」

「しかもそれらを連れていくのに必要なのは鳥の丸焼き一個」

「そして桃太郎は伝説の剣を持っている……もう、鬼に負ける要素が見当たらないんだが、ツカサ」

「そうだな」

一応問題は無いとは思うが……

俺もこれが桃太郎なのか疑問に思ってきた

もはや別の物語になりつつあるな

「オイ、ツカサ」

「何だ？」

「何か困ってるみたいだぞ」

当麻が指をさす方向を見ると港の人らしき人物と桃太郎が話していた

『そこをどうにか！』

『ダメだ！鬼の奴らから言われているんだ！船をこっちから出すな
って！』

どうやら鬼が人間達に攻撃されるのを恐れてなのかは知らないが船を出せないらしい

「でも、まあ、大丈夫だろ」

「いやいや！ツカサ！船が無かったら鬼ヶ島行けねえだろ！」

「何言ってるんだ、当麻。桃太郎のパーティには伝説の鳥がいるんだぞ」

「……あ」

向こうも会話が一通り終わったようだ

『このままでは鬼ヶ島へ渡る事も出来ないのか……』

『桃太郎さん、私が皆を乗せて空を飛ばうと思います』

『おお！連れて行ってくれるのか！』

『ええ』

と、俺が言った通りの展開になった

そしてラー○アは桃太郎及び、他二匹を乗せて大空へと飛び立った

「さて、俺達も鬼ヶ島へ行くか」

「そうだな……」

「紫さん、お願いします」

『ええ……何だか凄い事になっているのは気のせいかしら……？』

「気のせいです」

そして俺達も鬼ヶ島へと飛び立った

「いかにも鬼が居そうって感じの場所だな」

「ああ……」

さて……桃太郎は？

「ツカサ、あそこで扉の前に立っているのが桃太郎じゃないのか？」

「そうだな」

俺たちは見守り始めたのだが……

正直、ちゃんと矛盾を直しておけば良かったと後悔した

『じゃあ……行くぞ！』

突入する桃太郎

『ハッハッハ！私は鬼の四天王の一人！赤お—————』

『邪魔だ！』

『グハ!』

桃太郎の一閃により鬼の一体が滅殺

周りにいる居た子鬼らしき奴らもお供である三匹が蹴散らしていた

『我らは四天王の二人! 双子の青お—————』

『喰らえ!』

『ナスビ!』

次に出てきた二体もエ○スカ○バーの一閃で瞬殺

断末魔が何か変だが気にしないでおこう

『我は—————』

『小賢しい!』

『おばあちゃん!』

もう断末魔ですらなかった

しかも四天王最後と思われる鬼なのに自己紹介が一番短かった

何だこれ

次々と鬼の山が出来ていく

ふと桃太郎の顔を見ると、笑っていたように見えたがそれは気

のせいの筈

「ツカサ……桃太郎って懲らしめるだけじゃなかったっけ？」

「……ここまできたらこの物語を最後まで見ようじゃないか」

「……そっか」

もう、俺たちは元に戻すのを諦めて傍観者とならせてもらった

『これで最後か……?』

『やるな……桃太郎』

『貴様は……!?』

『我が鬼ヶ島の統領……鬼神だ!』

「名前がダサイな、オイ」

『鬼神……貴様が我らの村を襲っていたのは何故だ!』

『ふ……簡単な事だ……』

そして鬼神は桃太郎を指差し—————

『お前を探すためだ、桃太郎』

『な……何だと……』

「「何だって……………」！」

まさかの展開だよ！

鬼が桃太郎の居た村を襲っていた理由が桃太郎を探すためだ！？

『ば……バカなことを言うな！』

『嘘では無い……貴様も薄々感じてはいただろう……自分は他の人間と違うと……』

『……………ッ！』

『貴様は……我らが一族の一人なのだ』

「「桃太郎、まさかの鬼！？」」

『……………』

『貴様はこちらの者だ……どうして人間如きの味方をする？』

『わ……私は……貴様の妄言など聞く耳を持たん！私は桃太郎！日本一の侍なり！』

『フ……愚かな……ならば我の前に平伏すが良い！』

「当麻、熱い展開だな」

「そうだな」

もはや別の物語だ

『行くぞ！皆！』

『皆？それはコレの事か？』

そして桃太郎が目を向けるとそこには三匹のお供が倒れていた
『な……』

『我らの話の邪魔だったのでな……先にやっておいた』

『貴様……！』

『来ないのか？ではこちらから行かせてもらう！』
すると口から火の球を桃太郎に向かって飛ばした

『効かん！』

桃太郎はエ○スカ○バーを操り火の球を一刀両断にしながら鬼神の方へと向かった

『隙あり！』

『させるか!』

しかし、流石は最強の鬼、桃太郎の一閃を手で掴み――

『吹き飛ば!』

『なっ……』

剣ごと桃太郎を投げ飛ばした

『ぐ……』

『桃太郎よ……その程度か?』

『クソ……私にもっと力があれば……』

何か予想できそうな展開だな

その時、桃太郎の体を光が包み込んだ

『むう! その光はまさか……!』

『こ……これは……一体!? 力が湧いてくる!』

『我が鬼の力を使うとは……流石は我が一族の一人だ!』

『……この一撃で決めさせて貰う』

『良いだろう……来い!』

『必殺! 鬼神桃連撃!』

「「相変わらずネーミングがダサイ!」」

『おおおおおおお!』

『喰らええええええええ!』

そしてついに戦いは終わった

『ハアハア……』

『桃太郎よ……よくぞここまで育ったな』

『……貴様は一体何者なのだ?』

『フ……敗者には話す権限があるだろう……息子よ』

『え……』

「もう、さつきから急展開の連続じゃねえか」

「そこを突っ込んだら負けだ、当麻」

『お前はもう、最後の一人だ……これからどう生きるのもお前の自由だ……』

『…………』

『そう悲しそうな顔をするな……この奥に宝物庫がある……そこの宝を使ってくれ……全てはお前のために準備した……これでもう心残りは無い……か……』

そして鬼神は目を閉じた

『と……父さん!』

そしてしばらく桃太郎が泣きやむ事は無かった

「……ツカサ」

「何だ？」

「何だ、この新章桃太郎は」

「俺も知らねえよ」

「とにかくこれでもう帰って良いよな……」

「まあ、良いんじゃないの」

そして俺は水晶を取り出す

「紫さん、全部終わりました」

『そう……言いたい事があるから一旦戻すわね』

「ふいー、ようやく帰ってきたぜ」

「お疲れだな、当麻」

「当たり前だろ」

そんな雑談をしていると後ろから

「さて……これは一体どういう事かしら」

鬼神よりもっと怖い声が聞こえてきた

「いや……その……」

「出来心と言いますか何と言いますか……」

「……」

「「……………」」

沈黙が三人を包む

そして

「……もう一度行ってちゃんと直してきなさい!!」

紫さんが鬼のような形相でそんな事を言った

「もう嫌だって……………!!」

「問答無用!」

「嫌だ……………!!」

そして結局俺と当麻は桃太郎の世界にもう一度行って今度はふざけず

にちゃんと元に戻しましたとき
めでたしめでたし

日常 其の一（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

あけおめことよろッ！

「軽いな、オイ」

だってさ嬉しいじゃん、こんな駄文を楽しみにしてくれている人がちらちら居るんだからさ

「それは否定しないけどな」

今回は最初にも言った通りユニークアクセスが5000を突破したので記念に書きました

「内容は……作者曰くギャグ百パーらしいが……これで笑ってくれる人が居るのか……？」

いる！多分

「そもそもこんなのupする位なら本編をアップしろよ」
うるさいな！消すぞ！お前って言う存在を！

「出来るもんならやってみろよ、俺を消したら小説が成り立たねえぞ」

……うわーん！意地悪ーーーーー！

「知るか」

クスン……

「新年早々ウゼエな……」

良いもん！ガキ使見ながら執筆しているんだからこんな気持ちはずぐに何処かに吹き飛ばさ！

「あれは面白いけどさ……普通紅白じゃねえのか？」

普通じゃないのが作者クオリティ（キラッ！）

「さいで……」

さて……じゃあ作者は家族と温泉旅館に泊まりに行くのでこの辺で「ゑ！？ズルッ！何で作者ごときが温泉に入るんだよ！」

ハッハッハ！じゃあな！ツカサ君！

「……あいつ、帰ってきたらただじゃ済まさねえぞ」

「読者の皆様、言うのは二回目だと思いますが今回は本当にバカ話で本編と全く関係ありません」

「ちなみに10000突破の時もやろうとか考えているらしいです」

「こんな駄文を読んで下さる皆様には本当に感謝しております」

「それでは今年が皆様にとって良いお年になる事を願っています」

「今後ともよろしく願います、ありがとうございました」

第二十章 分離（前書き）

お久しぶりです！
更新遅くなって申し訳ございません！
短いですがドゾ！

第二十章 分離

結局そこまで長い時間休む事は出来なかった

ゆっくり休めばその分、奴らに遅れをとってしまうからな……

少しでも休めるだけマシだと思う

「で、次はどこで何をしに行くんだ？」

当麻が紫さんに言った

「次の世界は簡単に言えば調査みたいなものよ」

「調査？ “鍵” とか種とかを探すんじゃないのか？」

「そう、それも大切な事、だけど、奴らの居場所を見つけて、奴らを倒す事をしないと、結局、全てを壊されてしまうわ」

……確かに

俺たちは常に先手を取られている

だが、もし、奴らの居場所が分かれば戦力が整い次第、戦う事が出来る

「ですが……少しリスクが高いと思います」

そう、はっきり言って俺たちだけだと調査に行っても、情報を手に入れるどころか、返り討ちにされる可能性が大だ

「ええ……だから、危険だと思ったら、すぐ帰ってきなさい、最優先事項は全員生きて帰って来る事よ……」

「……分かりました、紫さん」

「で、だ、結局どんな所に行くんだ？ 紫」

「通称、無限城」

「無限城？」

城っていかにもな所だなくとも思っていたが

「簡単に説明すると、スラム街をそのままビルにした感じよ」

城の外観の方が百倍マシだった……

「ま、愚痴っても行く場所は変わらないからな、ツカサ」

「……だな」

「じゃあ……さっきも言ったけど……全員で帰ってきてね……」
「分かった」「分かりました」「了解」「おー!」「りょーかい!」
……ん?

何か声が一人分多いような――――

「って泉!? お前何してんだよ!？」

「ここにいるんだよ!」

親指をグッと挙げてこっちに物凄い笑顔を向けてきた

「いやいやいや!？一緒に来るのか!?一般人だろうが!？」

「ふふん!私はもう一般人なんかじゃないよ!“鍵”なんだから!」

「そんな理由にならねえよ!」

「ツカサ、彼女も連れて行って」

「な……何ですか、紫さん!? 泉を連れていくなんて、今から行くところが敵の本拠地って決まった訳ではないけど餌を放りこむようなものですよ!」

「それも重々承知しているわ」

言っている意味が分からない

それなら何故連れて行くんだ?

泉を連れ歩くことに何かメリットがあるのか?

そう思い泉の方を向く

「……何? ツカサ君? そんなに見つめられると照れちゃうよ」

両手を頬に当てていやいやしているように体をくねらせ始めた

(……ありそうにも無いな)

「うゆ? 何か言った?」

「別に……もう良いや……紫さん、移動をよろしくお願いします」

「ええ、じゃあ、行ってらっしゃい」

そして俺を含む五人を移動させた

「……それにしてもこの移動、何時になったら慣れんだろうな」
当麻がそんな事を口に出す

まあ、こんな気味の悪い移動方法は世界中探しても紫さんだけだろ

うな

……だけでは無いような気がしてきた
世界は広いし

とりあえず

「俺は慣れる事は無いような気がするな」

「ボクもですね」

「そう思うか……」

溜め息を吐く当麻

何回目だよ……

幻想殺しが無くても十分不幸になりそうだな

「しかしよ……今から行く……なんだったっけ？」

「無限城ですよ、当麻さん」

「そうそう、そこが違っていたら無駄足じゃないのか？」

「その時はその世界の人に手伝ってもらえば良いだろう？」

「そううまくいくもんか？」

「いく……ハズ」

「……結構不確定だな、オイ」

とは言っても俺たちでは進路を決める事すらできないからな
なんにせよ無限城とやらに行かなくてはいけない

「……それにしても泉」

「……え？何？」

「さっきから静かだな？一体どうした？」

そう、こいつは真っ先に暴走しそうな人物なのに、不気味なくらい
静かだ

「いや……ちょっとね」

「言ってみろよ」

「今、無限城に向かっているんだよね」

「ああ」

「私の長年のゲームの感から言わせてもらおうと……無事には着ける
気がしないよ」

はい？

「どう言う事か三行で説明してもらおうか？」

「狙われている私がここに居る

敵の重要な場所っぽい

だったらこのタイミングで始末しよう

私達全滅」

「四行なんだが……」

「気にしない気にしない」

……まあ、そんな泉の意見も無いわけではないので頭の片隅にでも

「ツカサ！」

「どうした？チルノ？」

「前！前見て！」

「前って——————うおおおおお！？」

自分の目の前に明らかに紫さんが作ったとは思えない出口らしきものが見えた

しかも——————

「俺の前だけ！？」

「ツカサさん！」「ツカサ！」「ツカサ君！」

そして他の皆の場所にも出口らしきものが見える

分断する気か……

「皆！出来るだけ固まって穴に入るようにしろ！」

その言葉を最後に俺とチルノは同じ穴に落ちていった

「代わり映えしないのも何だかねえ……」

女の子は呟く

「弾幕も出してないし……掃除も出来ないし……暇すぎる……」

そして自分で入れたと思われるお茶をすすった

「あのままじゃ出てきそうにも無いし……本当に落ちて来ないかね……」

そして再び茶をすする

「ご飯も食べていないようだし……あのままじゃいけないね……」

そして三度目の茶を飲もうとした時

神社の屋根が壊れた音がした

「い、一体なんだい!？」

そしてその穴のあいた所からどこに落ちたのかを推測する

「あそこは……不味い!」

そして女の子はそこへと向かった

「う……ぐう……」

ここは……?

俺は……一体化した筈じゃ……

「痛ったたたたた……何なのよ!もう!」

どこからともなく女の子の声が聞こえた

「あんたね!私の睡眠の邪魔をしたのは!」

「え……?」

どうやら怒らせてしまったようだ

こんな時は一体どうすればいいんだ?

「何か言ってみなさいよ!」

「……」

「聞いてんの!？」

「聞いてはいるんだけど……」

「けど!？」

「何を言えば良いのか分からなくて――――」

「霊符『夢想封印』!」

いきなり女の子がカードを取り出し何かを言うとかラフルな物体がいきなり出現

こっちへ向かってくる

「ッ！」

回避するのがとても難しそうになっている
だが……

「……そこか!？」

物体と物体の間に良く見なければ分からないくらいの小さな隙間が
見えた

その間を通るように移動する

「……危なかった」

「……嘘」

女の子は呆然としていた
これを避けたのがよっぽど凄い事なのか？
そんなことよりもどうにかして話を聞いてもらわないと

「あの……」

「……何よ」

とりあえず……そうだな

初対面の人には名前を聞かなきゃな

最低限のコミュニケーションは取れないだろ

「名前は？」

「……博麗 霊夢」

不思議な名前だな

「……あんたは？」

「え？」

「あんたの名前は!？」

……忘れていた

一方的に知っていてもコミュニケーションはとれない……
迂闊だったな……

「悪い……言うよ」

「早くしなさい」

「俺の名前は

ロクサス、だ」

第二十章 分離（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「お・か・え・り」
た……ただいまく

「温泉とか楽しかったですかく」
うん！とつても！

「それは……良かったなあ！！！！！！！！」
ちよ！ツカサ君！それはマジで駄目……A A A A A A A A A A !

しばらくお待ちください

「さて、今回ゲストの紹介及び解説を」
くすんくすん……

「基本ほっと思う。今回のゲストは」

「あ・た・い！」

「チルノだな」

「ツカサ！久しぶりな感じがする！」

「だな」

「じゃあ早速今回解説をしよう！」

「ああ」

「まずはあたい達がバラバラになったね」

「作者はとことん自分を追い込みたいようだな」

「何で？」

「視点描写がコロコロ変わるだろ、バラバラだと」

「そーなのかー」

「キャラ違うぞ」

「そして新キャラ！」

「こんな作品に出しても良いのか？」

大丈夫だ、問題無い

「復活おめでとう、あと結構古いかもな、そのネタ」
マジで？

「ああ、で、何で出したんだ？」

作者が好きだから！

「……まあいいや」

「あたい達一体どうなるんだろ？」

「それは作者のみ知るところか」
あ！

「どうしたよ……」

この小説の原作であるクロス・オブ・ヴィーナスのリメイクが来月出るんだよ！

「さいで、じゃあこの辺で」

「ありがとー！」

って情報に関してはスルー！？

そんな！

まだ終わる訳には――――

作者がうるさいので強制終了

第二十一章 元救世主と妖精 1 (前書き)

すっごい短いです

こんな感じのものをしばらくはやってみようかとも思ったりしてWW
ではドゾ

第二十一章 元救世主と妖精 1

「……一応着いた……のか？」

皆と別れて落ちてきたであろう場所を見渡せばそこは確かにゴミの散乱が非常に多く、そして、そのような事はあまり分かっていない筈なのだが……

「血の匂いがする……な……」

そう、血の匂いが濃いのである

「スラム街をビルのようにしたって紫さんが言っていたが……確かにそんな感じだな」

的外れならぬ的中りだな

「そうだ！チルノ！どこに行った！？」

「あたいはここ……」

声が上の方から聞こえてきたので見上げてみると――――

「……何やってんだ、お前」

「ムキュウ……」

ワンピースが鉄骨らしきものに引っかかって宙ぶらりんになっていた

「とにかく助けてよ！ツカサ」

確かに一人じゃ脱出は不可能だろう……だが

「……飛べば良い話だろ」

こいつは飛べるんだからそれで脱出できるだろ

わざわざ俺に助けを求める必要は無いはずなんだが……

「そういえばそうだった！あたいは飛べるじゃん！」

どうやらこんな状況になったのが初めてだったのでパニックに陥ったってところか？

……でもすぐに諦めるかフツー？

そんなこんなで結局自力で脱出しましたと

「やっぱりと言うか何と言うか……見事にバラバラにされたな……」

「そうだね……」

予想通りと言えば予想通りだったが周辺を探しても皆は見つからなかった

ピンチになったら帰ってこいって紫さんが言ってたけど……

「皆が居なかったら帰れないじゃん」

そう、俺達だけで帰っても意味が無いだろう

むしろ見つけて皆で帰らないと残った奴がどんな目にあうか想像したくもない

「そーなのかー」

「……なんだそのやる気の無い返事みたいなのは」

「友達の口癖」

「……そーなのかー」

……うつってしまったみたいだ

「とりあえず、皆を探すためにもここから動かないといけないな」

「そうだね！行こう！ツカサ！」

「ああ」

薄暗い廊下を進んでいたが……

特に何も無かった

これは運がいいのやら悪いのやら……

やれやれ……

「ツカサ、疲れた」

「そうだな、ちよつと休憩するか」

そして適当な場所を見繕って座った

それにしてもここはどれぐらいの大きさの建物なんだ？

半端じゃない大きさだったら再開は容易には出来ないだろう

ましてはこんな罠が張り巡らせられていたんだ

全く……面倒なことになったとしか言えないな

「ツカサ？」

「ん？」

「何でそんな難しい顔をしてるの？」

……考えが顔に出ていたか

こいつの年齢はどれぐらいかは俺には判断が出来ないが……
精神年齢はどう高く見積もっても小学生レベルだろう

不安にさせたら可哀想だな

「すまんな、心配させて」

「大丈夫なの？」

「ああ、心配すんな」

「うん！」

満面の笑みで返事をしてくれた

決して俺はロリコンではないが……今の笑顔には少しだけ心を奪われていた

いつも見ていたキズナの笑顔は嫌な思い出ばかりだったからだと思
うが……

「休憩はこれで終わりだ、チルノ」

「え！もう！？」

「そんな悠長に事は進められないからな」

こんな所で待機していても転機なんてものは起きるはずが無い
自分の力で創りだすものだしな

「む……」

「可愛く言ってもこれだけは聞けないからな」

「ツカサの意地悪」

そんな動作を見て微笑ましい気持ちになったが

「……お前か」

そんな言葉が後ろから聞こえてきた

当たり前だがその言葉で俺とチルノは臨戦態勢をとる

「誰だ！」

そして剣を構え声をかけてきた奴を直視した

「お、お前……！？」

「……答えろ」

そしてそいつは――

「ユカリは何処に居る」
ゼロはそう言い放った

第二十一章 元救世主と妖精 1（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

ハッハッハ！結構速い投稿DA☆ZE

「その分内容が薄いけどな」

う……

「おまけにイベントみたいな事もほとんどないし」
ギックウ！

「一体どうしたいんだ？ん？」

いや……君達バラバラになっちゃったジャン

「まあな」

試行錯誤した結果がこれだよ！

「……結構短めにして視点を変えていく……って事か？」
ざっつらいと！

「発音の仕方がなってねえな」

う、うるせえ！

「この前の休み明けの試験で英語が初めて回避したからな」
痛いところかんといて！

「ま、それは置いといて……しばらくこのコーナーは無くなるのか？」
」

何で？

「いや……連絡とれないだろ、この状況」
何言ってるんのツカサ君、ここはここだよ

「いや……無理があ————」

キズナちゃんとか来てるし

「る事も無いな、ここでは」

粗油事

「何だそれ？」

今「そゆこと」って変換したら何故か出てきた

「一体何調べてたんだ!？」

気にしたら負けだと思ふ

無くなりほしくないけどコーナー名は変わるよ

「どんなふうなんだ？」

ぶっちゃけるとその章のキャラに代わるだけ

「へ？」

「シャインと○○のあとがき劇場」って感じ

「実質しばらくは俺にも休みがもらえるのか!？」

うんにゃ、君、主人公兼雑用だから

「……………」

ありゃ？ツカサくん？

「一回死ね〜〜〜〜!」

何の脈絡も無くそれは酷い!

「うるせえ! 休みを寄せええええええ!」

ギャアアア!

怖い! 怖いよ! ツカサさん!

あ! 後、今度からのあとがきでクロス・オブ・ヴィーナス風のステ
ータス的なものを一人一人書いて行きたいと思いま—————

「つーかまーえたー」

ヒイイイイイイイイイイ!?

こ、これであとがき劇場終わりましたゆ!

ありがとうございますギャアアアアアア!

第二十二章 旅人と“鍵” 1 (前書き)

最速の更新！

しかし、やっぱり短い……

ま、プロローグ的なものだし別にいつかとか考えたり W W
それではドゾ

第二十二章 旅人と“鍵” 1

「……ちゃ…、キ…ちゃん、キノちゃん！」

そんな言葉が聞こえてきて、ボクは徐々に目が覚めてきました
声の方に焦点を合わせると泉さんがそこに居ました

「起きた！良かったよ」

今にも泣きそうな顔でボクを見てくる泉さん

どうやら落ちて泉さんをかばった時、当たり所が悪かったのかもしれない

とても心配されてしまいました

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「そんな事言わないでよ！私を助けてくれたんでしょ！」

「……ですが」

「あゝ！もうこの話終わり！」

そう言って終わらせようとする泉さん

こんな心使いをしてくれる彼女はとても素敵に見えますね

「ラビット&ホーン、もとい兎も角！今、自分達の居る場所の把握
はしておいた方がいいと私は良いと思うよ！」

……たまに変な事を言いますが

泉さんの言い分も間違っではない

場所を知る事は重要な事です

「そうですね、少し歩きましょうか」

そのついでにツカサさん達が見つければ良いのですが……

そんなに世界と言うものは都合よく出来ているものではないですか
らね

「それにしても気味が悪いね」

ここに来る前に紫さんが言っていたスラム街を――
と言う事はあながち間違いでは無いようですね

「どうする？キノちゃん？」

「そうですね、その角を曲がったら休憩にしましょうか」
言葉の通り休憩をしようと思いましたが

「何か見つけちゃったね」

「そうですね」

曲がった所の奥から光が漏れているのをボク達は見逃しませんでした
「とりあえず……行っちゃおう？」

「ツカサさん達と合流する手段がある訳でも無いですし……紫さん
の言っていた情報収集のためにも行ってみましょう」

「ラジャー！」

そして一步一步進むごとに強くなる光

ボク達の緊張感も高まってきました

「こ、怖くないの？キノちゃん？」

流石に泉さんは震えていた

初めての世界移動がこれでは確かに少しは怖がっても仕方ないかも
しれませんね

なので、一つだけアドバイスを

「ボクの師匠の言葉を借りるのなら……恐れるのは後で、ですね」
「恐れるのは……後で……」

その言葉をかみしめるように何度も復唱している泉さん

……若干怖いですが気にしないでおきましょうか
そして問題の扉の前にボク達はたどり着きました

「……」

「……行きます」

「う、うん」

戦闘態勢は何時でも取れるような状況にしております
これなら扉を開けて襲いかかれても対処できるはず

「……失礼します」

そう言いながらボクは扉を開けた
すると――――――――――

「いらっしやい、何の用かな？」

そんな言葉が聞こえてきて、逆に驚いてしまい声が出ませんでした
ボクが扉の前で呆然としていると、その年配の方が声をかけてきました

「立ち話も悪く無いが……中に入って話そうじゃないか」

この言葉を信じて良いのかはボクには分かりません

泉さんと話し合おうと思います

（どう思います？）

（良いと思うよ、私は）

しかし……もし、中に入って襲われると流石にボク一人では対処の
する事は不可能に近い

（可能性を考えるとあまり良いとは思えませんが……）

（その時はその時だよ！）

……この人は適当なのでしょうか？

それとも考えがあって……？

「おっ邪魔しまゝす！」

そんな事を考えていると泉さんはさっさと中へ入ってしまいました
ここまで来ると止める事は不可能でしょう

流されるが如くボクもその扉をくぐりました

第二十二章 旅人と“鍵” 1（後書き）

くシャインとキノのあとがき劇場く

……

「……大丈夫ですか？」

君って結構良い子だね……ホントに……

「そこまで声が出せるなら大丈夫でしょう」
と思ったら案外そうでもなかった!？」

「しかし……ツカサさんの代わりでこのコーナーをすることは思いも
しませんでした」

俺も予想外だ

「……と言う事はこのコーナーの生誕した理由は……」

まあ、何となく

「……では、前言っていた事をやりましょうか」

無視ですか! ああ、無視ですか! 大体何なんだよ! この小説のキャラ
達は! 俺の言う事を聞かな————

「長くなりそうなのでボク一人で進めたいと思います」

「では、こちらの資料を見て下さい」

キャラ名 ツカサ

タイプ 典型的な前線タイプ

属性 闘

L V 5

H P 4 3 0

S P 1 0 0

攻撃力 4 5

防御力 5 5

体力 1 5

精神 1 0

弱攻撃 大剣による三段切り、リーチはあるが隙が大きめ

強攻撃 大剣で横薙ぎを行う

ダッシュ 大剣による突き

ジャンプ 真下に対して大剣による突き

必殺技 兜割り

???

???

・

・

・

「作者曰く、説明書を読んだらこうなったと言っています」

——— だから地球温暖化が促進するんだよ！大体な———

「そろそろ止まって下さい」

ん？おお、悪かったな、じゃあ早速ツカサの能力を———

「すでに終わっています」

何……だと……？

「ただ……必殺技の欄に“???”が多いのですが……？」

これは……まあ……その……何だ……

「お茶を濁すような発言はやめて下さい」

……分かりましたよ、これはまだ覚えていない………と言うか本編で出て無いのに必殺技なんぞ書けるかぁ！

「……だそうです」

なんかもう疲れたよ、キノラッシュ……

「なんですかその悲劇の犬みたいな言い方は」

お休み……

「と、言う事で今回はここまでらしいです。ありがとうございますまし
た」

第二十三章 不幸な者 1 (前書き)

やっと全員分ですよ……
でわでわ、ドゾ

第二十三章 不幸な者 1

「……………」

ある程度、予想はしていたさ……

俺が一人なんて事は、な……

だけど……

だけどよお……

「落ちてきた場所がいきなりチンピラの溜まり場ってどうなんだよ
—————!」

そう、ただいま上条さん、絶賛逃走中!

いや! あいつらも人間! 話し合えば分かるはずだ!

そう思い後ろを振り返る

『待てやあああああ!』

『俺らの溜まり場に入って来てんじゃねーよおお!』

『ウ…ッ、…い男』

『死ねやあああああ!』

……一個だけ聞き取れなかった言葉があつたが説得は不可能そうだな
異能を使う相手なら俺でも戦えるが……どう見てもただのチンピラ
よって上条さんは逃げるしかない訳ですよ!

「畜生おおおお! 不幸だ—————!」

「ハア……ハア……」

逃げている途中、部屋が数多く見えたのでその内の一つに入って休
憩している

だが、見つかるのも時間の問題だな……

「せめて見つかるまでに体力が戻ってきてくれれば良いんだがな……

……」

そこまで休む時間も無いと簡単に予想できる

「とりあえず……ドアの前に鉄骨とかを置くか……」

「手伝いますよ？」

「おお、それは助かる」

「そして手は止めなくて良いので取材してもよろしいですか？」

「いや、生憎話するようなことは無いな」

「あやややや……」

しばらくしてバリケードみたいな物が完成した

「これでしばらくは防げるか？」

「分かりませんね」

「では、早速取材を——————」

「だから答えるようなことは一つも無い——————」
え？

俺って誰と会話してるの？

問題の方向を向いてみると、全身真っ黒な服に真っ黒い帽子を被った男とメモ帳を持った赤い帽子(?)みたいなのを被っている女の子が居た

「……………」

「……………(ニコッ)」

男の方が笑いかけてきた

え？

何？

誰？

何か物凄い笑顔だけどチンピラの百倍ほど怖いんですけど？

「えーと……一体誰ですか？ちなみに俺は上条 当麻と言います」
とりあえず、話してみた

「これは失礼しました、私は赤屍 蔵人と申します」

「はあ………」

「そして私は清く正しい射命丸 文です！」

美しくは無いのかよ……

「……ってあんたら何時から居た!？」

「貴方がせつせとバリケードを作っている時から居ましたが？」

「ちなみに私は取材拒否をされていました……」

何か聞こえてくると思ったらこの人たちが居たのか
今まで俺は気付いていなかったのか!?

「それにしても随分お疲れの様ですね」

「疲れるも何も……逃げていたので……」

あれ? 何でこんなにフレンドリーに会話してんの? 俺は?

「ではその逃げている時の心情を————」

「教える気もねえよ! ? 何でそんなに人のプライバシーにずかずか入ってくるの! ?」

「それは私が新聞記者だからですよ!」

「ゴシップ記者とかの間違いじゃねえのか! ?」

そんな漫才みたいな会話をしていると

『ここだろうが! 出てきやがれ!』

『もう、容赦しねえぞ!』

「き……来た……」

「貴方を追っているという方達ですか?」

もう終わりだろ……

こんなレベル0と優男、そして自称新聞記者じゃあ太刀打ちなんて出来ないだろ……

絶望の淵に立っていた俺だったが

「……………クスッ」

あの優男、赤屍 蔵人がかすかに笑ったのを俺は見逃さなかった
そして俺はこの後信じられない光景を目の当たりにする————

第二十三章 不幸な者 1（後書き）

「シャインと当麻のあとがき劇場」

「起きろ！」

「へっ！」

「あれ？キノラッシュは？」

「なんだそりゃ？あとがきだ、あとがき」

「おお、そうかそうか」

「頭、逝っちゃってんじゃないのか？」

「軽く」

「認めんなよ！」

「だってテストは散々だしよ」

「愚痴を書く場所じゃねーだろうが……」

「もう！良いよ！相変わらずキャラのステータス書くから！」

「……なあ」

「何？」

「正直な話なんだが……ネタ切れか？（ここの）」

「ドキ……」

「……やっぱりか」

「……ど、どうぞ！」

「スルーしやがった！……ちなみに今回はキノな」

「キャラ名 キノ」

「タイプ 射撃による遠隔攻撃タイプ」

「属性 知」

「LV 5」

「HP 290」

「SP 300」

「攻撃力 22」

防御力	23
体力	10
精神	15
弱攻撃	銃による乱射攻撃、ただし攻撃後リロード有
強攻撃	多めに火薬を込めた銃弾を装填し発射
ダッシュ	ナイフによるなぎ払い
ジャンプ	斜め下に銃撃
必殺技	フルート射撃

・
・
・

こんなもんだろ

「技に説明とかは良いのか？」

求められたらする

「そうですか……」

今回はこれで終わり！

次回のあとがきではお前を書くぞ！当麻！

「ついに原作では使用出来なかったキャラか」

頑張らまっせー！

「では今回も短い文でしたが付き合っていたいただきありがとうございます
ました」

第二十四章 元救世主と妖精 2 (前書き)

今回、ちょっと書き方を変えてみました

読み辛かったりしたら作者にまでどうにか連絡をば

バトルシーン……orz

相変わらずなクオリティーですがドゾ

第二十四章 元救世主と妖精 2

俺は奴の姿を見た瞬間、飛びかかった

「ツカサ!？」

チルノが俺の名前を言っていたが耳に入らない
今、自分の目には奴しか映っていない
態勢もクソったれも無い

ただただ本能に任せて突撃した
俺の全体重を乗せた渾身の一撃は

「……………」

奴がどこから取り出した光剣によって防がれた
だが俺はそのまま鏝迫り合いへと持っていた
金属の擦れ合う様な音が聞こえる中、俺は大声で言った

「答えろ! キズナを……俺の幼馴染を何処に連れて行きやがった!」

そう伝えたが奴は顔を少しも動かす事無く答えた

「……答える気は無い」

返ってきたのはそんな言葉

冷静さ欠いていた俺はそれを聞き、さらに血が昇った

「だったら……だったら、テメエをぶっ倒して聞かせてもらおうぞ!」

罅迫り合いを解き、そのまま何も考えずにがむしやらに剣を振る
だが…………

「……………」

今度は奴が光剣を巧みに操り、全て受け流された

「クソッ！」

それでも俺は振り続ける

「……怒りに身を任せ過ぎだ、剣に振り回されているぞ」
「うるせえ！」

奴に向かって剣を振る

何度振ったのだろうか

振り下ろし

薙ぎ払い

突き

斬り上げる

それらの動作をどんな順番で繰り出したのかも分からない
頭の中にあっただのは奴を倒せという情報だけだった

しかし奴は

避け

受け流し

弾く

俺の全ての攻撃を顔色一つ変えずに的確に対応していた
そして――――

「……………ッ！」

「なっ!?!」

一瞬だった

奴の光剣が俺の剣撃の合間を潜り目の前でピタリと止まった
汗が一筋、床に落ちた

「……もう一度問う、ユカリは何処に居る」

一瞬で冷静になった

実力、経験共に俺より遥かに上だ……!

だが……どうする?

指一本でも動かせば俺の体は一刀の下、切り裂かれるだろう
このままじゃいつかは白状してしまう……

「……最後だ、ユカリは――――――ツカサ――――――
――――――!」

そんな声俺を呼ぶ声が聞こえてきて、奴は光剣を俺とは関係の無い
方向に振った

見てみると斬ったものは氷の塊のようだ

「だいじょうぶ!? ツカサ!?!」

冷静になって思い返せばチルノが居る事を忘れていた

だが、助かったのは事実

俺は一瞬の隙を見逃さず、奴の光剣が届かない場所まで移動した

「ああ……なんとかな……」

「良かった!」

そして奴の方へと向き直る

「さあ、これで2対1だ」

「さいきょーのあたいたちはあんたなんかには負けないよ！」

最強までとは言えないだろうが……有利になった事は確かだ

「……こちらが不利、か」

そんな言葉を放ちながらも奴は構えを崩さない

「だが……オレも退けないからな……全力でお前らを討つ」

不利な状況になれば逃げるような素振りを見せてくれると思ったんだが……

一筋縄ではいかない……か

「チルノ……気を引き締めていくぞ……」

「うん！」

「……行くぞ」

奴は俺に向かって飛びかかる

「これでもくらえ……！」

チルノが奴に向かって大量の氷を飛ばした

「甘い」

それに対応する様に、奴は小さな盾のような物を取り出した

その盾から奴の光剣と似たようなエネルギーらしきものが出てきた
チルノの氷を防ぐつもりか………？

その時、俺の第六感（勝手にそう呼んでいる）が反応した
チルノの襟を掴んで俺の方へと寄せた

一瞬怨みがましい目で見られるがその目は驚愕へとすぐに変化した
何故なら、チルノの放った氷が奴の盾に触れると跳ね返ってきたか
らだ

俺が引っ張ってやらなかったら跳ね返った氷に全て直撃していただ
ろう

「……良く見切ったな」

「お褒め頂き嬉しく存じ上げます、とでも反応すれば良いか？」

しかし、未だに第六感は危険だと俺に警告している
攻撃さえしなければ大丈夫って訳じゃないのか？

「……ハッ！」

そんな気迫のこもった声と共に奴はその盾を――――
こちらへ向かって投げてきた

だが、緊張を解いていなかった俺は不意の事態にも対応が出来た
……ホントにこの第六感が無かったら死んでるよな、俺――――

――――
スパッ……

物が斬られる様な音が聞こえてきた

自分の真後ろから聞こえてきたので恐る恐る触ってみると……自分
の服が一文字の如く綺麗に斬られていた

どうやら投げ放った盾は奴の手元に戻ってくる様になっているらしい
そして驚いたのは奴の行動

さっきまで居た場所から居なくなっている

周りを探すが見当たらない
だが、周りに居ないなら――――！

「上だ！」

「！」

予想通り、奴は俺の真上へと跳躍していた

今にも斬りかかろうとしていたので咄嗟に俺も剣を動かしてそれを防ぐ

そのまま追撃を加えようとしたが、奴はそのまま俺の剣を弾き、その反動を利用して距離を取った

一進一退、と言いたいところだが、どう考えても防戦一方に近い
どうする……どうする！？

「……………ん？」

思考を巡らせていると何時の間にか奴は耳当たりに手を当てていた
勝手な判断だが通信でもしているのか……？

「……………分かった、そこから動くな」

そして奴は俺たちに背を向けた

「な………！ど、どこに行きやがる！？」

「……………お前らより重要な事だ、お前らに会う事はこれが最後では無い
だろうしな」

紫さんに関する情報よりもっと重要な事なんて奴にあるのか？
そんな俺の顔を読みとったのか奴は俺に言った

「……これ以上、失いたくは無いからな」

そして、奴は走り去っていった

「ツカサ！勝った！」

「……………」

「ツカサ？」

勝った？

まさか、見逃してもらったようなもんだろ、これは

……ふざけんな

世界を守った、だ？

世界を救った、だ？

そんなもん、過去の栄光じゃねーか

今の俺はこの剣と中途半端な記憶だけ……

俺は近くにあった壁に拳を叩きつけた

「ツ、ツカサ……………」

「もっと…………強くなりてえ…………全て守るなんて大層な事は言わないけど…………せめて…………」

俺は全てを吐き出した

「せめて、目の前の事を解決できる位、強くなりてえ！」

そんな俺の叫びはこの部屋に空しく響いた

「ツカサ……………」

チルノ…………今の俺に話しかけないでくれ…………

そんな俺の心境を読みとってくれたのか、彼女は

「……あたい、ちょっと散歩に行くね」

そう言い、部屋を出て行った

部屋には、俺と水の滴る音だけが残された

第二十四章 元救世主と妖精 2（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

ヒヤッホウ！流石リメイク版！追加要素少なすぎだぜ！

「クリアもしないのか？」

だってよう……サブクエストとかすぐに終わったし……難易度最高の電撃って言う難易度でやってるけどさ……イベントを起こさずに朱里さん倒しちゃったし……天使の矢ウマウマww

「後半何言ってるのか分かんねえけどとりあえずお疲れ様とだけ言っておく」

うん、試験なんてクソ喰らえだ！

「いきなり話題を変えるなよ……ちなみに本音は？」

マジでヤバイ、あゝどくしよ

「……」

やめてよ、その可哀想な人を見る目！

「……じゃあ、今回について俺から一言」

おう！

「ぶっちゃけ微妙じゃない？」

それは読者様が決める事だ！

「まあ、それはそうだが」

そもそも作者そこまで国語は得意じゃないのですので

「今更ながらの告白だな」

うん、ラノベは読みあさるけど

「自重せえ」

うい

「そして俺、色々言ってるけどどんな心境でお前書いた？」
行き当たりばったりで

「……うん、この小説、本当にノリだけで書いてんな」

それが俺クオリティ！（キラッ！）

「じゃあ、当麻の能力か」

スルースキルも育ったな、ツカサ君……お父さん寂しいよ……

「何時、お前が俺の親父になったんだよ」

うう……それでは上条 当麻のステです

キャラ名 上条 当麻

タイプ 幻想殺しによる補助タイプ

属性 闘

L V 5

H P 3 5 0

S P 1 5 0

攻撃力 3 2

防御力 2 8

体力 1 2

精神 1 2

弱攻撃 パンチ二連撃から蹴りを放つ

強攻撃 回し蹴りを放つ

ダッシュ 肘打ちを放つ

ジャンプ 真下に踵落としをする

必殺技 幻想殺し

・
・
・

こんなもんだろ

「結構適当だな」

当たり前だ！イメージなんだから

「それにしてもお前、試験近いんじゃないのか？」

大丈夫さ！今、監視員もいないしww

「あ……じゃあ、俺、この辺で」

どうしたツカサ君？

まるで後ろに鬼が居るかのような顔で――――

「……作者」

……あ、あれ？

けーねせんせー、どーしてここに？

「言われなくても分かるだろう？」

怖いですが、マジ勘弁して下さい、その笑顔はとても素晴らしいですがそれは大切な人とかに向かってほほ笑むのならまだしも今の俺に向かってそんな笑顔を向けられたら怖いだけで――――

「問答無用！」

あべしっ！

「と、作者は試験が近いためしばらく執筆が出来ないらしい」

「まあ、時間を盗み見てはやるだろうがな……」

「先生、お疲れ様です」

「いやいや、今回、作者は危ないんだろ？」

「ええ、まあ……」

「はあ……私は作者の勉強を見てきてやるよ」

「それをしたら色んな意味で作者が終わりそうなんで辞めて下さい」

「そうか、それなら辞めておこう、そろそろ締めたらどうだ？」

「そうですね、それでは、今回も付き合っていただきありがとうございしました」

第二十五章 不幸な者 2 (前書き)

時間がかかった割には短い……
では、どうぞ

第二十五章 不幸な者 2

「ふう……やはりこの程度ですか」
「な………」

一瞬の出来事だった

何が起きたの皆目見当もつかないが……言える事は一つ

あの男……赤屍 蔵人は危険すぎる

いつの間にか不良たちの後ろに立っていたと思った瞬間、不良たちは鋭利な刃物か何かで斬り刻まれていた

そう、斬り刻まれていたんだ

もはや、それは人の原型を留めておらず肉片と言った方が正しい

しかも……あいつは何処にも相手を斬るような道具を持っていない

……

一体どうやって……？

「あ……うぐお……お、お前………」

良く見ると一人だけ腕を斬られているが生き残っていた

「何でそんな化も「はいはい、ちょっとすみませんねー！」」

何か俺に伝えようとしていたようだが、あの自称新聞記者に遮られる

「な、何だおま「いやー、ちょっと取材をしようと思ひまして！」」

こんな状況の奴にどんな取材をするんだこいつは……？

しかも、人の話を聞けよ……流石の俺でも可哀想になってきたぞ

「何の取材をしようとしてんだ？自称新聞記者」

「いえ、今、まさに死に直面しようとしている人物に対して今の心境を一言――――」

「最低だな、お前！？」

「何が最低ですか！知りたい事を知って何が悪いというのです！？」

「時と場合を考えろよ……」

もし、こいつの新聞を読む機会があっても絶対に読まないでおくか……

まあ、そんな会話をしていればチンピラは何時の間にやら居なくなっていた

「ああ！折角の良いネタが！」

「ネタにすらならねえだろうが！」

「なんか良いじゃないですか！『死に直面した男、その時の心境は！？』みたいな感じの見出しで！」

「それが病院とかでの事だったら感動的かもしれないけどなあ！」

こんなスラム街みたいな所で、斬殺されそうになっていた人が言う言葉を書き連ねても読む奴は物好き位だろうが！

全く……

「おい、自称新聞記者」

「何ですか、ツンツン頭さん」

「呼び方が気になるがもう良いや、お前の連れの優男……何者なんだ？」

「知りません」

「は？」

こいつは知らない奴と一緒に居るのか？

一体何で――――

「あの人に着いていれば絶えずネタが取れますから、そんなことは些細な問題なんですよ」

「……流石に些細な問題では無いとは思うぞ」

あの強さ

人を斬る事に抵抗が無かった無慈悲さ

一緒に居るだけでこいつはある意味凄いと思う

そんな事を考えていると優男、赤屍 蔵人が話してきた

「さて、これからどうするつもりです？ 上条 当麻君」

「あーえー……とりあえず……何とお呼びすれば良いでしょうか……」

「好きに呼んで下さい」

笑いながら言ってきた

が、もう雰囲気とさっきの現場を見てからだと恐ろしさしか感じねえよ！

「じゃあ……赤屍さん、で……」

「良いですよ」

「私は！？ 私は！？」

「ちょっと黙ってろ、自称新聞記者」

「ええ！？」

何かいじけて体育座りを始めたが気にしないで放っておく

「赤屍さん、ここらで安全「無いですね」」

安全で人が集まりそんな場所がありますかって聞こうとしたんだけど……

びっくりするぐらい返答が速かったですよ……

「当麻君、この無限城に安全を求めるのが間違っていますね」

「そうですか……」

「しかし、無限城の外になら沢山ありますよ」

「外……ですか……」

外まで行くとツカサ達と合流できるかは分からないな

危険な中でツカサ達を探るか、安全な場所で待つか……

俺がどっちにしようか考えを巡らせていると不意に赤屍さんが言ってきた

「考えるのは良いですが、時間と言うものは待ってはくれませんよ」

「時間……」

そう、時間

今、俺達はミストの奴らと闘っている

時間が経てばその分、奴らの目的が達成されるだろう
だったら――――！！

「考えてても仕方ねえな」

「どうするのですか？」

俺が決めた答えは一つ

「がむしゃらに動き回るだけだ」

「……面白いですね、貴方は」

そして俺は自分の思うがままに走った

どうなるかは分からない

だが、それなら自分の心に素直に従うのが一番だ
待ってるよ、ツカサ、キノ、チルノ、泉！！

絶対に見つけてやるからな！！

第二十五章 不幸な者 2（後書き）

くシャインと当麻のあとがき劇場く

「……今まで何やってたんだ？
え？」

通販で届いたチルノのフィギュアを愛でつつデ○シデ○ア・デ○オ
デ○シム・ファ○ナルファ○タジーをプレイしてただけだが？

「……それで遅くなった、と」
そゆこと

「読者をもっと大切にしやがれ！！」
そ、そんなこと言われても……

「作品を仕上げるのが一番の恩返しだろうが！！」
でも、作家さんのほとんどは締切ギリギリまで動いていないに近い
のでは？

「……時○沢さんとかか？」
うん

「あの人、あとがきを見る限りでは凄い生活送っているからな……」
ある意味尊敬してる

「ちゃんと仕事もしてるしな、ギリギリだけど」

まあ、その話は置いといて、三月だと言うのに雪が凄い件について
「話をそらすな、チルノの能力を書けよ」
めんどい

「おい！？」

実はさくこの話を投稿したのがケータイからですので一々見るのが
めんどいから今回はありません！！

「なんて作者的権限！？そんなに偉いのか！！」
偉いもん

「……そうか」

そんなわけで来週から鹿児島行ってきます

「唐突過ぎる！！」

そしてグダグダ感マックスのこの状況であとがきが終わります

「終わるの！？」

終わるの！！

と、言う訳で次のうpをお楽しみに

第二十六章 旅人と“鍵” 2 (前書き)

色々ありましたね……
では、短いですが、ドゾ

第二十六章 旅人と“鍵” 2

「私のここについて知っている事はこんなものかな」

「成程……そうですか、ありがとうございます」

「いやいや、こんな老人に話をさせてくれてむしろこちらがお礼を言いたい位だよ」

そう言いながら微笑む初老の男性
名前を聞くと

「ゲンと呼んでくれ」

と言われたのでゲンさんとボクは呼んでいます
それにしても――――――

「くか~~~~~……」

「……………泉さん」

「んあ? ……あゝ? 終わった、キノちゃん?」

「人の前で寝るのはあまり良い事では無いですよ……」

「う……………」

ボクがゲンさんと話を始めて数分、彼女は寝てしまったのです
疲れたのだと思いそのままにしていたのですが……

「すみません、ゲンさん、連れが無礼で……」

「ははは、良いよ、気にしないからさ」

「そうですか」

さて、泉さんの無礼も詫びたので本題に入りますか

「ゲンさん」

「何だい？」

「後、いくつか聞きたい事があるのですが……よろしいですか？」

「ああ、構わないけど？」

「それでは一つ目なのですが……奥では一体何が……？」

先ほどから奥の方から何やら話声が聞こえていまして……

途切れ途切れですが会話の一部を言わせてもらえば

『大……しく……さい！』

『誰が……か！……な得……しれない……なんか飲め……！』

『つ……べ言わ……飲……い！』

『ぶふお！』

『し……、氷嚢持……きま————って……って……ですか！』

『……を飲……せ……よ？それが？』

『愚……実……にしな……さいよ！』

とか何とか……

一人は何故か聞き覚えのある声でしたが……誰でしたか……？

バカタレとかアホタレとかそんな名前でしたか？

そんな訳で少し気になっているのですが答えてくれるのでしょうか？

「……出来ればあまり話したくは無いな」

「いえ、答えることが出来ないのであればそれでいいですよ、少し気になっただけです」

「一つ言える事はあの二人のおかげで私の技術も上がったことかな」

「技術とは？」

「変な話かもしれないが、ここで薬屋を一応やっているのね」

「成程、そうですか」

助手か何かと考えておけば良いですね

無理やり自分を納得させます

「こちらが本題なのですが……人が集まりそうな場所はありませんか？」

「ふむ……この無限城の中には無いとしか言えないな」

「そうですか」

「外になら色々あるが……君達の力になるかは分からないが良い場所の一つだけ知っている」

「そこは？」

「そこは喫茶店なのだけどね、ちょっと面白い仕事をしている人が居るんだよ」

「その人に頼めば良い、と？」

「ああ、彼らと一緒になら無限城を歩いても大丈夫だろう」
「成程」

つまり用心棒の様な仕事をしていてツカサさん達を見つけるまで手伝ってもらう、と

「その人の名前は？」

「そうだね……名前と言うか名称なんだが……奪還屋 ツカサ Get Ba ゲットバ

「分かりました、貴重な情報ありがとうございます」

「さっきも言ったが老人の話に付き合ってくれるだけで嬉しいのでね」

「ええ、そして――――」

ボクはある方向を再び向いて――――

「……泉さん」

「っは！キ、キノちゃん！寝て無いよ！私は！」

「ボクは一度も起きろとは言っていないませんが……？」

「え!?!」

彼女は本当にこの世界で生きる事が出来るのでしょうか……?
ボクは少し心配です……

第二十六章 旅人と“鍵” 2（後書き）

くシャインとキノのあとがき劇場く

チルノのねんどろいど発売iiiiiiii!!

「良かったですね」

テンション上がりまくりだぜ!

「そんなテンションで申し訳ないのですが」

おうよ!

「貴方、進級できるんですか?」

……ナンノコトデシヨウカ?

「実は作者、成績があまりよろしく無かったようで、追認考査をつい先日受けたのです」

……

「これに合格しないと進級できないとか――――」

やめて! 赤裸々に作者の全てを言わないで!

「ふう、まあ、作者がどうなろうが知ったこっちゃありませんが、執筆が遅かったのはこのせいですね」

面目ない……

「さて、最後の仲間のチルノさんについてですね」

おう、では下からです

キャラ名 チルノ

タイプ 冷気を操る程度の万能型

属性 恋

L V 5

H P 340

S P 90

攻撃力 35

防御力	20
体力	13
精神	9
弱攻撃	回し蹴りを二回放った後、氷柱を三連射する
強攻撃	氷の塊を目の前に叩きつける
ダッシュ	氷を纏って突進
ジャンプ	斜め下に氷柱を放つ
必殺技	氷符『アイシクルフオール』

・
・
・

ふう、こんなもんか

「お疲れ様です」

さてさて、この月が終われば受験生か……

「触る機会は減りそうですね」

ま、どうせ自己満の小説だし……でも

「でも？」

読者が楽しみにしているのに一年も更新停止はしたくない
ペースはかなり落ちるが一カ月に一度うpできたらいいな、位の気
持ちではやっていきたい

それが応援してくれている人に出来る最大のお礼だからな

「……同じようなミスはしないで下さいよ」

何時ミスした！

「追認考査——————」

わーわーきーこーえーなーいー

「……だそうです、これであとがきは終わります、更新は遅くなり
ますが末長くこの作品を読み続けてくれれば嬉しいです、では、次
の話でまた」

第二十七章 元救世主と妖精 3 (前書き)

今回は頑張りましたが……変かもしれません
でわでわ、ドゾ

第二十七章 元救世主と妖精 3

……ツカサ、大丈夫かな？

あたいはあの赤い奴に勝ったと思ったんだけど……

ツカサは納得がいかなかったみたい

その後、ツカサが言っていた事は良く分かんないけど、さいきょーになる！って事なんだよね

多分

そして、何だかツカサの傍に居るのが悪いような気がして離れてきたけど……

これからどうしよう……

あんな見るからに落ち込んでいるのにすぐに戻るのも変だし……

「うむむむ……！」

頭から湯気が出てきそうだよ……

あたいたいじゃ答えは出そうにも無い難しい問題だよ……

そんな風にツカサに対してどうしようか考えていると

自分の体の横を光り輝く弾が飛んできた

「！？」

間違いない、間違えようも無い

今の光……弾幕だ！

あたいはすぐさま飛んできた方向を見据える

「……………」

そこには黙ったまま立っている緑髪で蛇と蛙の飾りを付けた奴が居た

名前は……豆腐屋 あられ、だったっけ？

何か違うような気がする……

ま、いっか

ただ一つだけ変な点を挙げるなら……見覚えの無い物を身に付けていた

赤い宝石が付いたペンダントのような物だ

普通なら綺麗だと思うのだろうけど……

今はそうは思わなかった

何故なら……それが今まで見たことが無い程、薄気味悪く光っていたからだ

「……………」

「何か喋ったらどうなのさ！」

「……貴方が」

「え？」

「貴方が捕獲対象の一人……」

そんな言葉を言いながら巫女は容赦なく弾幕を張ってきた
あたいはギリギリで何とか避けている
時折、身体に弾がかかるけどこれくらいなら大丈夫！

「こっちも負けてられないよ！それっ！」

あたいも負けじと弾幕を放つ
しかし軽々と避けられてしまう
流石に少しイライラしてきた

「何で当たらないのよ！」

「……こんな弾に当たるバカが何処に居ますか？」

「……………かっちーん」

あたいの中で何かがプツンと切れた

「弾幕ごっこじゃないから容赦はしないよ！くらえ！氷符『アイシクルマシガン』！」

あたいは早速スペカを使わせてもらった
大きく外れたものもいくつかあったが巫女が居たところに多くの氷柱が襲いかかった

「思い知ったか！」

何の反応も無いので勝った、そう思った
しかし……煙が晴れてくると、あたいが放った氷柱の中に居るはずの巫女は居なかった

「何処！？」

「……この程度？」

「え！？」

後ろを振り向けば巫女が無傷で立っていた
スペカを構えて

「避けられる？」

「な――――」

あたいは何かを言おうとしたが、無情にも巫女はスペルを発動した

「……祈願『商売繁盛守り』」

あたいの弾幕とは比にならないほどの札が襲いかかった
さっきまで放たれていた弾幕がお遊びにしか見えなかった
避けきる自信が……無い……
けれど……！

「ツカサがさいきょーになるって言ってたんだ！だとしたら今、さいきょーのあたいが負けるわけにはいけないんだ！」

「ハッハッハ！何をしているんだい？」

「……………」

そんな言葉が聞こえ無言で俺は顔を上げると例の変態仮面がそこに居た

今すぐにでも殴りたい衝動に駆られたがそんな気分ではなかった

「おや？元気が無いじゃないか？いつもの君ならこのタイミングでツッコミを入れてくれているんだけどね？」

「生憎お前の相手をしている暇は無「片膝を抱え込んで座っていて何が暇じゃないんだい？」……」

ああ、すげえむかつくな、こいつは！
人の神経逆なでにするのが特技かよ！
こっちは色々考えてるのによ！

「何を考えているんだ？」

そう聞こえた

だが、いつもの雰囲気とは違いかなり真剣な空気が伝わってきた

「力になれるかどうかは知らないが話くらいなら聞くぞ、少年」

こいつだったら何か答えを知っているかもしれない
だが、これは俺の問題だ

俺自身が解決しなきゃいけない事だ

「無いな」

「はい、アウト」

次の瞬間俺の脳天にチョップが飛んできた

「痛い！何しやがる！」

「このサモエド仮面！嘘を見破ることなど風の流れを読む事より簡単に分かってしまうのさ！」

「嘘臭い！」

「だが、嘘なのだろう、実際」

「う……」

「さっきも言ったが私は話を聞くだけだ、だが……胸の内に秘め続けるよりも全てを洗いざらい吐き出した方が楽になる事もあるぞ」

……本当にこいつは一体何者だ？

俺達をからかっているがアドバースや情報をくれる……

そしてそれが間違っていた事は一度も無い

楽になる……か

「お、話す気になったのか」

「……何で分かった」

「それは私がサモエド仮面だからだ！」

……もう、ツツコミを入れなくて良いよな

そして俺は全てを話した

「せめて目の前の事を救えるようになりたい……か」
「ああ」

雰囲気的に話してしまったがこいつに頼ってしまった……
屈辱過ぎるだろ……

「とりあえず結論から言わせてもらおう」
「何だよ？」
「無理だ」
「……は？」

怒りが込み上げてきた
人が自分の気持ちを話したというのに踏みにじりやがった

「……根拠は何だ、変態」

「おお、怖い怖い」

俺は剣を取り出した

「次からふざけた回答をしてみろ、首を吹き飛ばすぞ」

「根拠……ねえ……それは」

「それは？」

「自分の仲間が近くで倒れそうになっている位ボロボロの状態だといふのにこんな所で落ち込んでばかりいるからだ」

「え……？」

言葉の意味が分からない

聞き返す以外理解できそうにも無い

「どういう事だ！」

「君が心配だったから一人にさせようとした健気な少女がいただろう？」

「……！チルノの事か！？」

「あの少女は今、敵の勢力の一人と闘っている」

「な……！」

「だが、君は助けにも行かずにこんな所で塞ぎこんでいる……そんな人間が目の前を救いたいというのはただの戯言だ」

「……………」

「今、君には選択肢がある、ここでずっと塞ぎこんで居る続けるか、あの少女を颯爽と助けるか……どちらを選ぶ、少年？」

……ッハ

……だったら答えは決まってる

「サンキューな」

「気にしなくても良い、私が好きでやった事なのでな、さあ、幼女を助けに行け！少年！」

奴の言葉を全て聞かずに俺は走り出した
目の前の事を守るために！

……だが、感謝はするが一つ言いたいぞ、変態
幼女幼女と連呼するなあ！

「……お見事」

「ハアハア……ゲホッ！」

ボロボロになったけど何とか耐える事が出来ただけど……結構限界が近い……
これ以上避けるのは難しいよ……

「……言われていた以上の力ですね、私達の主が欲しがるわけです」
「な……何の……事！」

「……少し喋り過ぎましたか……でも知る必要はありません、貴方はここで私に倒されますので」

そしてまたスペルを取り出した
あたいは反撃する為の体力が……無い
スペルを取り出そうとしても手が動かない

「……開海『海が割れる日』」

巫女がスペル宣言した瞬間、目の前から大きな波が襲いかかってきた
もう、無理かな……ごめん、みんな、ツカサ……
そう思い、目を閉じた

だけど、あたいが感じたのは波にのまれてもがき苦しむ感覚じゃなくて、何かとても温かいものに包まれている感覚だった
あたいは不思議に思い恐る恐る目を開けたそこには――――

「……テメエ、今の今まで散々やってくれたな……俺の仲間に手を出した事……チルノが感じた痛み……百倍にして返してやるよ!」

ツカサが立っていた

第二十七章 元救世主と妖精 3（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「なんだ？ 妙にテンションが掴み辛いな今日の作者は」

ああ……実はだ

「なんだ？」

作者はこの前誕生日だったんだよ

「ああ、活動報告に書いたな」

そしてここからが問題だ、先日母親の恩師から手紙が届いた

「ほうほう」

いつも送って下さる素晴らしい人で今回も手紙の文面はとても素晴らしかった

「それで？」

問題は……裏面だ

「はい？」

その恩師の方、いつも裏面に絵を描いて下さっているんだ
しかもかなり上手

「へー」

そして今回も描いて下さったんだが……

「だが？ どうしたんだよ」

描かれていたのが新参ホイホイの二名でした、本当にありがとうございます
ございました

「あ？」

いや、嘘じゃないんだよ

あのうさ耳二名がとても上手に描かれていたんだよ

「そ、そうか……確かに変な気持にもなりそうだな」

そうなの

「そして何で私じゃないのよ！」

「うお！紫さん！いきなり出て来ないで下さいよ！」

「私を描かないなんて……何を考えてるのよ！その人は！文句を言
いに行くわ！」

やめて下さい！

作者の母親の恩師ですよ！？

いくら紫さんでも許せませんよ！？

「黙りなさい！スキマに送るわよ！」

ウソデス、ナニモイイマセンスイマセンゴメンナサイ

「じゃ、バイバーイ」

「行っちゃった……どうにか生き延びてくれよ、作者の母親の恩師
さん……」

もう、良いや……この辺で締めるか

「そうは問屋がおろさんぞ、作者」

何！？

まだ何かあるのか！？

「今回のバトルシーン……弾幕成分かなり少なくなかないか？」

ああ、弾幕も入ってるけど基本非想天則を中心にして書いてるから
ささ

どうしてもそうなっちゃったんだよ

「さいですか……」

ま、頑張ったし今日はこの辺で勘弁してよ

「分かった……だが二つだけ言わせてくれ」
ん？何？

「まず一つ、今回の戦闘シーン、下手したら嫁宣言してる人から反
感買うんじゃないのか？」

……そーかも

なので出来るだけ寛大な心で許してもらえると嬉しいッス……

「そしてもう一つ」

うん

「最後のセリフが恥ずかしすぎるわ！このアホ作者あ！」

ぶべら！

……で……ではこの辺であとがき劇場終わります……では、また今度のうpで……会い……ましよう……

第二十八章 旅人と“鍵” 3 (前書き)

今回テンションがおかしい状態で書いてしまい凄いことになってしまいました……………orz
お許し下さい……………
それではドゾ

第二十八章 旅人と“鍵” 3

さて、ゲンさんから言われた喫茶店を目指して外に出るために歩き回っているのですが……

「不良っぽい人がいっぱいだと思うように進めないね、キノちゃん……」

「そうですね……」

争いを起こせばツカサさん達が見つけてくれるかもしれませんが、敵の本拠地かもしれないこの場所で、それはあまり得策ではありません

ボク一人なら大丈夫かもしれませんが、隣には泉さんが居ます護りながら戦う余裕は無いでしょう

「ねえねえ、キノちゃん」

「何ですか？」

「敵に見つかったら頭からビックリマーク出して変な音を出した方が良いかな？」

人間にそんな事ができるのでしょうか……

「……とりあえず、ここに居ては見つかるのも時間の問題です、どうにかして移動しましょう」

「うーん……じゃあ、とりあえず、これ」

そう言って泉さんが取り出したのは茶色の箱何処にしまってたのか見当もつきません

「……これをどう使うのですか」

「これで全身を隠して進むんだよ、キノちゃん」

泉さんは得意気に薄い胸を張った

……ボクが言えたものではありませんが

「……却下です」

「何でさ!!」

「絶対にバレます」

「やってみなきゃ分かんないって!!」

一体この自信はどこからでてくるのでしょうか……

「ハア……」

「キノちゃん!?!何なのその可哀想な人を見るような目は!?!」

「……とにかく、そんな方法より良いものがあるのでそちらにしませんか?」

「最終的にはスルーですか!?!キノさんパネエツス!!」

……最近思います

ボクのコミュニケーション能力が低い性でこんな風に会話が変になってしまっているのか……

それとも自分が普通で泉さんのコミュニケーション能力が異常な性で会話が変になっているのか……

重要な事です!が最優先事項はどうやって移動するかです!のでその事は頭の隅に追いやりました

「では、泉さん今から移動しますよ」

「え?どうやって?」

「……」

ボクは無言で指を指しました

「……キノちゃん、本気ですか？」

「ええ」

ボクが指を指したのは人が通ることが出来そうなダストシュートです

「ムリムリムリムリムリムリムリムリムリムリムリムリム
リム！！」

「最終的に変になっていますよ？」

リムって何でしょうか、リムって

「いや！！危ないでしょ！！行き先が焼却炉とかだったらどうするのさ！？」

「心配はいらないかと思いますが」

「どーして！？」

「この様な場所では正常に機能している可能性は低いですから」

「何より何処まで続いているのかも分かんないじゃん！」

「しかし、この方法がダメなのでしたら何がありますか？」

「だからこの段ボ―「先ほどから言っています、却下です」……」

意見が合わないのか、どんどん無駄な時間が過ぎていきます

そして先ほどから泉さんの声が心なしか大きくなっていきます

……そろそろ言いますか

「泉さん」

「キノちゃん！段ボール一緒に被る決心がついたの！？」

「いいえ、それより周りを見て下さい」

「ん？」

泉さんは周りを見て呆然
無理ありません、不良の皆様に囲まれていますので当然かもしれません

「ななな、何で！？何時の間に！？」

半分は貴方の所為ですよ……

周りを見渡さなかったボクも悪かったのですが……

しかし、こんな時なのに思ってしまった

泉さんには不思議な魅力があります

このボクが周りを見渡さずに会話をしていたことがそれを証明しています

「……その所為でこのような状況に陥ってしまったのですが」

「何か言ったキノちゃん！？」

「いえ」

しかし、本当に困りました

乱射の出来るものを持っていれば可能ですが、今持っているのは一回につき一発だけ発射するものだけ

一体どうしましょうか

そして何より泉さんを守りながら――――

「フッフッフ！」

「……異常な事態の所為で正常な感情が出せなくなってしまいましたか？」

「そ、そんな訳無いでしょ！何か最近キノちゃんが冷たいってレヴェルを超えてるような気がするのは私だけなの！？」

「では、何故？」

「無視！？ 良いよ、もう！」

そして咳払いをして間をおいてから言いました

「一言で言ってしまうと、私の時代キターーーーーー！
ー！って感じかな？」

「……意味が良く分からないのですが？」

「まあ、見ててよキノちゃん、これが私の全・力・全・開！」

そして、懷から出したのは……何でしょうか？

小さな黒い箱ですか？

そう、ちょうど指輪が入っているような感じのものですね

それを泉さんが上に掲げた瞬間

泉さんの身体が光に包まれていました

光の放射がしばらく続き、不意にそれが治まりました

何が起こったのかは検討がつきません

確認のために泉さんが居たところを見ると泉さんが居ませんでした

他の不良の方々も驚いている様子

彼らが泉さんに手を出した訳では無いようです

では、何故……？

『おい！ あそこを見ろよ！』

『ん……あ！』

その声につられて目を向けてみるとそこに泉さんが居ましたが、その風貌が大きく変わっていました
髪が銀髪に変わり、服装は黒白がちりばめられたような感じでした
不思議な笑みと共に彼女はこう言いました

「こんばんわ、いつもニコニコ、貴方の傍に這よるオタク、泉こな
たです♪」

……沈黙で世界が包まれた様な気がしました

第二十八章 旅人と“鍵” 3（後書き）

くシャインとキノのあとがき劇場く

Orz

「どうしてこうなったんですか？」

自分でも良く分からない……

ただ一つだけ分かる事は課題が終わってヒヤッホウ！みたいな感じだったからかな？

「……そうですか」

本編でもそうだけど結構厳しいよね、君

「貴方がそうしたのだと思いますが」

うぐ……そんな事より重要な事！

「そういえば今回で十万文字を突破しましたよね」

まさかここまで来るとは思いもしなかったよ

「そして終わりも見えませんか」

終わりは一応考えてあるけど……

「けど？」

色々無駄に拾えるかどうか分からない伏線ひきまわってるからな

あ……

「……こんな言葉を知っていますか？」

ん？何？

「身から出た錆という言葉を」

……何も言えません

「御分かりの様で」

……それは置いといて！

それにしても非想天則面白いww

「対人では絶対に勝てませんよね、貴方は」

う……良いじゃん！個人で楽しむ分には！

「格闘ゲームは対戦する人が居るからこそ面白いのでは……？」

……これ以上言わないで

「それでは今回も読んでいただきありがとうございます」

次の章ではこのテンションが治まるように努力しますので今度のう
pも楽しみにしていただけたらと思います……

それでは！

第二十九章 不幸な者 3 (前書き)

完璧にキャラを絡ませただけの章……orz
これ……無駄な話だと思われる可能性、大
まあ、良いやwww
ではどうぞ

第二十九章 不幸な者 3

唐突だが一つだけ言おう

目標も決めずにやろうと思ってもほとんど何も出来ないのが現実だ
例えば長期休暇の課題とかだな

そこまでやろう、とか予定を決めずにがむしゃらにやってもやる気
はそがれて結局は終わりの方で焦るってやつだ

そして、目標があってもその通りにやれることが稀な人もいるだろう？
今の状況はそれと似ているような違うような……

つまり何が言いたいのか

それは――

「………つ、疲れた」

「お疲れ様です、当麻君」

何の当ても無く全力で適当に走っても皆が見つかるはずも無く、た
だただ疲れが溜まっていくだけだ

と言う事だ

そして冷静に考えてみれば全力で走っている時に面倒なことに巻き
込まれなかったのは奇跡だと思う

これだけ目立つ行動をすれば何かがあるかとも思っ――

――
ってアレ？

これで何も起きなかったって逆に不幸なんじゃ……？

………そうだよ！おかしいだろ！

何でこんな目立つ行動をとっておきながら何も起きなかったんだよ
！？

「………それにしても何故いきなり走り出したんですか？風にな

りたかったのですか？」

「そんな訳無いだろ、このバカラス」

「私に対する認識がどんどん酷くなっていきますよ!？」

「もうどっか行ってるよ、バカ」

「カラスすらとれちゃいましたよ!？もう!私は適当に周ってきま
すよ!」

と、言うやいなや部屋から消えていた
結構速いな……

「しばらくしたら戻ってこいよ」

もうここにはいない人物に対してそんな事を言ったが……虚しいだ
けだ

マジでこれからどうすっかな……

「当麻くん？」

「何でしようか、赤屍さん？」

「私が友人の元まで運んで差し上げましょうか？」

「へ？」

「それでも運び屋をしていますので」

微笑と共に赤屍さんは言った

願っても無いことだが一つ疑問が……

「赤屍さんって俺の仲間の顔って……」

「分かりません」

「ですよ……」

「しかし、貴方がいらっしやればそれは関係ないでしょう」

「まあ、確かにな」

「では、依頼をされたと考えてもよろしいでしょうか？」
「あ、ああ」

成り行きかもしれないが赤屍さんの力を借りれたのは心強い

「ちなみに赤屍さん？」

「何でしょうか？」

「今までどんなものを運んだんですか？」

「そうですね、人をあの世に運んだことがありますね」

「……………」

さらっと恐ろしい事を言ったんですけど！？

この人、運ぶって単語がついたら何でもするんですか！？

「さて、まずは情報を集めましょうか」

「一体どうやってするんです？」

「勿論、人から聞くのですよ」

「貴方がそう言うと言っただけじゃすまない気がしますけど！？」

「まあ……人なのかどうかも怪しいですけどね」

赤屍さんは部屋の角を見据えていた

俺もつられてそっちを見るが何も見えない

何かあるのか……？

赤屍さんはメスを何処から取り出し、そこに投げつけた

「きゃ！」

「え！？」

何も無い空間から声が聞こえてきた……！？

一体何が――――――――――

「種明かしは自分からしてはどうですか？」

またも聞こえてきた

諦めたのかそこからソイツはいきなり出てきた

クサツクを担いだ女の子だった

「私を前にして隠れる事は出来ませんよ」

正直に言おう、怖いです

「それは……」

「……うん、ちよつと難しいかもね」

赤屍さんは再びメスを取り出した

つてオイ！

「……この無限城では油断は死を招くことになりますよ、当麻君」

俺はその目を見て、今まで以上の恐怖を感じた
その目を見ているだけで俺の体は刃物が当てられているような、
そんな感覚がする

だけど――――

「……いくらなんでもやり過ぎだ」

「……………」

「……………」

無言での会話が続く

その間にあの子は逃げていくかと思ったが赤屍さんの存在が逃げる
事を邪魔している様だった
だが、さっきから忙しく口を動かしている
一体何をしているんだろうか

「……やはり似ていますね、女性を大切にするとこも」

「……女の子だから優しくしている訳じゃないんだけどな」

さっきの張り詰めた感じの空気が少しだけ柔らかくなった気がした

「なあ、お前」

「……私はお前なんて名前じゃないよ」

「名前が分からないから仕方ないだろ……とにかく、こんな所で何
してたんだよ、本当に」

「言わない」

……少しは反応を変えてくれても良いだろ
少し泣きたくなってきた

「約束したから」

「約束？」

「情報は貴重なものだから絶対に教えるなって」

「それが原因で命を落としてもですか？」

メスをちらつかせる赤屍さん

マジでやめてください

話が出来ませんから

「あり得ないよ、それは」

「それは何故ですか？」

「そんなことになる前に助けてくれるから」

瞬間、赤屍さんは遙か後方にメスの雨を放った
遠すぎて分からないが誰かがいることは確かだ

「これは……久しぶりに楽しめそうですね」

赤屍さんはそのままメスを投げながらその方向に向かった
残ったのは俺とその女の子だけだった

「……君は襲わないの？ 私は君の敵かもしれないんだよ？」

「……だとしてもそっちが攻撃をして来ないからな、それだったら
戦う意味は無いだろ。それとも戦いを望んでいるのか、お前は」

「……………」

女の子は無言で横に首を降った

さて……問題は向こうの戦いか？

さっきから人とは思えないスピードで金属同士が当たるような音が
続いているからな……

だけど……

黒い影と赤い流星が天地構わずに交錯し、衝突したときに光を撒き散らす様子は幻想的であって……

戦いはあまり好きではないし場違いだと思ったがこの光景は美しいと思った

「すげえ……そうは思わないか、お前……」

いつの間にか女の子は消えていた

さっきまで隠れていた方法と同じようにしたのか？

ちよつと酷いな……

仕方がないと思い目を戻したが同時に向こうの戦いも終わっていた

「ふう……久し振りに熱くなりましたよ」

「そうですか……」

「しかし、最後まで殺れなかった事が残念です」

一瞬の隙を作ってしまったいその間に逃げられましたよ、とか赤屍さんは続けた

結構ギリギリだったのかとも思ったが、服が多少汚れていただけだった

「むしろそこまでいなくて良かったですよ……」

「では、再び移動しましょうか、お友達を探しに」

「あ、ああ」

不安があるような、ないような……

こんなかなり不安定な人物と一緒に行動して大丈夫なのか、俺よ……ま、ツカサ達と合流するまでの我慢か

「赤屍さん」

「何ですか？」

「アイツは？」

「放っておいても来ますから気にしなくてもよろしいかと」
「はあ……」

大丈夫、だよな……？

第二十九章 不幸な者 3（後書き）

くシャインと当麻のあとがき劇場く

「いるのかコレ」

多分、きっと、おそらく

「不安にさせる単語ばかり言うなよ……」
だってよ

逃げようとするだけの描写って……

「確かに下手くそだな」

うう……

「ま、精進しろ」

はい……

「ん？そしてゲストがいるのか？」

ああ、そうだよ

「時間掛けても悪いしな、ゲストさんどうぞ」

「あら、入って良いの？」

「……は」

「何よ、その鳩が豆鉄砲喰らったような顔をして」

「朝倉！？何で来てんの！？」

「呼ばれたからに決まってるじゃない」

「何で呼んでんだよ！？ここには仲間としか入らないんじゃないか？
のかよ！？」

もちつけ、当麻君

「そうよ、作者の言う通りよ」

「……百歩譲って良いとしよう」

「あら、意外ね」

「なに言っても無駄だしな……で、何で呼んだ？」

実はな……

「実は……？」

ガッコで配られたプリントに描いてあったから

「何で!？」

「あら、私って人気者？」

「作者の母親の恩師だけでは無かったのか!？」

そーみたい

「そんな理由で私が呼ばれた訳？」

そーなのだー

「ま、最近出番が無いから嬉しいけどね」

「……敵とこんな感じで笑いながら会話が出来るのはこの場所だけだな」

そしてガッコ繋がりなんだが

「何だよ」

ゲーセンのユビートってやつ知ってる？

「ああ、あの4×4マスの音ゲーだろ」

「それがどうかしたの？」

作者の友人がプレイしている所を見たのだが……

「どーしたんだよ」

最高難易度でほぼ全て90万後半だという

「「……」」

後で聞いたがその友人、本当なのかどうかは知らんが日本でかなりの上位ランカーだとか

「作者の身近にそんな人物がいたとは……」

ま、俺やんないからスゲー程度で終わるんだけどなwww

「作者、そろそろ時間だぞ」

そうか、じゃあこの辺で終わるか

次のupをお楽しみに

「今度のは大丈夫だよな……」
ツカサの章以外やバイかも……
「……ガンバレ」
ちくしょー

第三十章 元救世主と妖精 4 (前書き)

バトルシーンって四苦八苦しなから出来るんですね……
でわ、ドゾ

第三十章 元救世主と妖精 4

出てきた瞬間、問答無用で攻撃してきやがったが、射程範囲外だと思われるところまで走ったので無傷で突破できた

「ツカサ……ありがと……」

唐突にチルノはそんな事を言った

「何言ってるんだ、仲間だろ？」

「そっか……」

俺はチルノの体を見る

服は至るところが破け、傷も多く、見ているのも痛々しいな……

「少し休んでろ、後は俺がやる」

「ゴメン……」

「何がだよ？」

「ツカサがさいきょーになりたいって言ってたのに……さいきょーのあたいが負けちゃって……」

「……………」

チルノらしい解釈だな

ま、あながち間違いでも無いけどな

強くなかったら護るものも護れないしな

俺はチルノの頭を撫でた

「ふゆ……」

「気にすんな、それと……ありがとな」

目を幸せそうに細めるチルノ
ま、そんなことをやってる場合では無いけどな
近くにチルノを置いて奴を見据えた

「待たせて悪かったな……」

「……対象の追加を確認……続行します」

空中に光で描かれた星が無数に俺に襲いかかる
だが……!!

「アイツの攻撃に比べたら遅すぎるんだよ!!」

星と星の間に多数の隙間が見え、その中を俺はくぐり抜ける
そして一気に奴に接近

「そこだ!!」

そのスピードを乗せた突きを奴に繰り出した、が

「……………」

「チッ!!」

避けられた、か……

少しは自信があったんだがな……

奴も少し驚きはしていたがすぐに落ち着いたようで反撃をしてきた
今度は多量の御札が襲いかかって来たが軌道は見えている!!
剣を振り回し全てを叩き落とす!!

「オラァ!!」

「……………!?!」

「またもや避けられた

だが、向こうは流石にコレを突破されるとは思いつかなかったのだ
ろう

「驚愕が顔に見えているからな

「……………反応速度がデータと違う……………予定変更、ここで排除します」
「排除？出来るもんならやってみろよ!?!」

「挑発に近いような言葉をぶつけた

余裕そうに見えるか？

「正直な話をしよう

実は結構ギリギリだ……………

だが、弱音は吐かない、いや、吐けない

俺の為にボロボロになるまで頑張ってくれたチルノを護らないとい
けないしな

「……………祈願『商売繁盛守り』」

「先ほどの数倍、いや、数十倍の御札が俺の方向へ向かってきた

「今度はキツそうだな……………」

「愚痴が出たがそんなことを言っても事態が好転する訳でも無いしな
……………」

「真っ白になるほど前方を覆い尽くす御札……………」

「それを自分の持てる全神経と第六感をフル活用し……………」

「全力で駆け抜ける!?!」

「オ……」

第六感の力を信じ、数多の御札の隙間を見つけて避け続ける

「オオオ……」

いくつも体に触れるが直接当たったわけではない

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

目の前の事を救う第一歩……

その為にも……

まずは、もうすぐ目の前に見えるであろう――――――

「お前をブツ倒すんだよ！！」

「な――！！？」

振り下ろされた俺の剣は見事に奴の右腕に命中した
奴は苦痛に顔を歪めながらも後退した

「……こんなもんかよ」

「……………」

剣を相手に向けたポーズをとりながらそう言った
内心では出来ればどっか行って欲しいけどな……
さすがにしんどいわ……

「……これならばどうです？」

そう言いながら放ってきたのはさっきから放ってきた御札だ

さっきの数と比べれば避けられないものではないが……？
何でこんな事を……？

流石に被弾するのは勘弁なので動いて避け続ける
さっきと違うのは奴は息の付く間も与えないような感じで放ち続け
た事と、距離を取りながら放っている事か

「悪あがきをするぐらいならとっとと降参しろ！」
「……………」

俺の言葉には耳も貸さず放ち続ける
移動し続けるのは流石にキツイ……

体力も無くなってきた、足の動きも鈍くなって……
……いや、待て

まさかこれが狙いだったとしたら—————
——！

外れて欲しかったが、俺の予想は当たったようで奴はチルノも持っ
ていたカードみたいなものを再び取り出した

「……秘術『グレイソーマタージ』」
「……マジかよ」

空中に一筆書で星を描き、その曲がるところを結ぶ点から光弾がい
くつも生まれた

無論、俺を目掛けて、だ

流石に避けるのが無理だと思った

「クッソ……」
「……………」

奴の口角が上がった

これで俺を落とせる、そう確信したような雰囲気だ
いくら第六感で避けるべき場所が分かっているけど身体が着いてい
かない

体力が続かないからな……

こんな事ならもっと体力作りにキチンと励んでいた方が良かったな
……

「……………」

奴が手を降り下ろすと光弾が俺に向かってきた

何か……何か無いのかよ

頼ることが出来そうなのは自分の前世の記憶だけ

それも不確定な要素が多すぎるが……それしか無いか？

だが……溺れるものはなんとやら、だ

俺は真っ直ぐ奴を見据えた

奴の後ろは崩れており、夜空が見える

そのため光弾が流れる星の様にも見える

夜空……

星……

学校……？

キズナが連れ去られた日の事か？

いや、違う

今、記憶を探っているこの学校は俺がいた学校じゃない

じゃあ……一体何処だ？

知らない訳じゃない

俺はここに——————行ったことがある

そう意識した瞬間、その学校の前にいつのまにか俺は立っていた

『……………ねえ？』

声が聞こえてきた

振り向くとリストバンドをした俺と同じくらいの少女が立っていた

『あなたは、自分を、どんな人間だと、思ってる？』

ただの高校生……だと思っていたのは昔の話か
今は救世主モドキか？

『どうして、そう、思う？』

いや……力も分からない、体力も無い、戦いの経験もほとんど無い
しな……

戦えてるのはあの謎の第六感のお陰だしな……

『力が、あれば良い？』

無かったら何も出来ないしな

だったら何だ？

都合良く力を貸してくれんのか？

『……貸すんじゃないくて、あなたが、思い出すだけ』

はあ？

どういう事だよ

『思い出して、私の力、戦い方を……』

手を差し伸べてきた少女

俺は反応するようにゆっくりと手を握った

瞬間、全ては消えた

同時に俺の頭に痛みが走る

そして不意に現実へと帰ってきた

目の前を覆う光弾がいつのまにやら、かなり俺に接近していた
今までの俺なら諦めていただろうな

だが……今の俺なら……！

両手に力が収束する

この感覚は俺が剣を出す感覚と同じだ
だが、今、取り出した力は剣じゃ無い

新たに、いや、思い出した力を取り出す！

光が俺の手の中で収束しきった瞬間

俺はトリガーを引いた

瞬間、手に収まっている物から何百もの火が出た
それらは全て奴の光弾に命中、相殺した

「な………？」

「驚いたか？これが俺の力……いや」

一呼吸置き、手に持ったマシンガンを下ろしながら俺は続ける

「俺が思い出した仲間の力だ………！」

「……………！」

奴は弾を放ちながら一氣に近づいてきた

俺はマシンガンを消し、同じように奴に突進する

「……この！」

「お前が何で俺達を襲うのかは分からない」

「……当たれ！」

「俺たちと戦いたいからか、俺たちに怨みがあるのか、誰かからの命令なのかも俺には分からねえ」

「……当たれ！」

「だが、一つだけ言わせてもらおう……！」

俺は一氣に奴の懷に潜り込み二振りのナイフを出した

「俺の仲間に出した時点で、お前は俺の敵なんだよ！」

突進のスピードを殺す事無くそのままに、ナイフを突きだす！

「オラァァァァァ！」

「……………！」

一回、二回、三回、四回……

俺は途中で数えるのをやめ、突きだす事だけに集中した

そして……………最後の突きが奴の胸にあった結晶を破壊した
その勢いで俺は奴の後ろに回り込んだ

戦闘態勢を崩すことなく俺は後ろを振り返った

が、奴は少し身体を震わしながら立っており、しばらくすると力が
抜けたかの如く、盛大にバタッと倒れた

終わった、か……？

「フウ……」

流石に疲れた……俺もちよつと限界か……？

身体に鞭を打ち、チルノの元へ行く

そこまで行って体力を使い果たしたのか足から力が抜け、座り込んだ

「ハハッ……どうだ、変態……俺は……目の前の事を……守りきった……ぜ……」

肩で息をしながら居ない相手に対して言葉を放った
さて……後はチルノが目覚めますのを待つだけ、か

第三十章 元救世主と妖精 4（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

終わったくくくくく！

「何が？」

いやいや、この小説の原作

「遅いな、オイ」

だってポ○モンの厳選とかで忙しくて

「勉強しろよ」

まあ、そんなこんなでクリアした訳だが……

「だが？」

結末違ってた……

「ああ……そういえば指摘されて気付いて急いでやったんだっけ」
うん……まさか、ああなるとは……

「さっさとやらないお前が悪い」

難易度『電撃』って雑魚の方が強いんだよ

分かるか！？

何も出来ないまま全滅って事が何度もあったんだから！

「さいで」

……まあ、とりあえずクリア時の君のレベルなのだが

「どうだったんだ？」

聞いて驚け！何と44だ！

「……は？」

いやいやく苦労したZE☆

「雑魚にも勝てなかったのってお前がレベルアップを怠ったからじゃ……」

違う！電撃でどれぐらいのスピードでクリアできるかしてたんだよ！

「……そっちの結果は？」

こっちは……約6時間半だな

「……………」

まあ、ぶっちゃけ速いかどうかも分かんないしなww

「……言いたい事はそれだけか？」

うんにゃ、ここからは授業タイム

「いきなり何を始めるんだ!？」

題して『第十二話位に登場した激つよ黒崎朱里さんを手間なしで倒せ!』かな？

「ああ、あの化物か」

うん

「無理じゃね？」

いや、実際倒したし

「……………」

と、言う訳でまず下準備から

「もう、何も言わん……」

下記のカードを用意します

かみつき×3 Lv3 (ヘルパー全員に装着)

麦の恵み Lv3 (インデックスを除く)

超回復 Lv3 (乃木坂さん一択)

「この時点で結構キツくないか？」

そこは頑張る

で、残りのカードは好きなように

お勧めはかまいたち

Lv3時には500程度のダメージを2〜3与えるので

作者も最後まで使っていました

「で、問題の戦闘キャラは？」

これに関してはシャナ、イリヤ、大河がお勧め

機動力がばっちりなので

「で、戦闘開始か」

うん、この先の問題は精神力にかかっております

「はい？」

朱里さんの攻撃って全部前方にしか無いのよ

「……で？」

死ぬ覚悟で朱里さんの攻撃のタイミングに合わせて後ろにダッシュを使用してすり抜ける

「攻撃はまさか……？」

うん、ヘルパー任せww

攻撃してもあの人怯まないもんww

「……その繰り返し、か」

うん、だから精神力って言っただろww

後はそうだな……指の力かww

「……で、倒したら良い事あんのか？」

ああ、無償で全状態異常無効化のカードが貰える

これはマジで助かった

「だけだよ……連戦になるだろ、アレ」

うん、まあそこは気合いで乗り切れ

「結構適当だな」

朱里さんを倒すのが目的だしねww

ちなみに作者はこれをやって3〜5回目位で両方撃破したかな？

「結構難しいんじゃないかよ」

こればかりは慣れだ、どうしようも無い

「……今回のあとがき、長すぎるだろ」

気にすんな、では、この辺で失礼しますか

「次のupも楽しみにしていただけると嬉しいです」

今回も読んでいただきありがとうございました！

第三十一章 旅人と“鍵” 4 (前書き)

最近書けば書くほどダメになっているような……
まあ良いや、ドゾ

第三十一章 旅人と“鍵” 4

ボクは今まで色々なところを訪れて色々な人に会いました
同じ旅人

金品や食料を奪おうとし、撃ち合いにまで発展した人
ボクを見て不思議がる人

パースエイダーを見せてくれ頼んでくる人

これは一握りであって、まだまだ他にもいたはずです……が……

『『『ぎゃあああああああ！待ってくれー！』』』

「アッハッハ！待てないよ〜♪」

前方、数メートル先に拳ほどの大きさがある石を持った泉さんがそんな事を言ってボロボロになっている不良の皆さんを追いかけます

よく観察して見ると石には何かとは言いませんが赤黒い液体が付着しているように見えます

二人ほど沈黙をし続けている不良もいます

白目をむきながらですが……

先ほど今まで色々な人を見たと言いましたが、あそこまでボロボロになっている相手に対して容赦無く追い討ちをかける人は見たことがありません

何があったのかを説明するのに時間は必要ありません

泉さんが先ほど名乗りをした後、何処に持っていたのかは知りませんが手榴弾をいきなり取り出し、不良の皆さんの所へ一直線に投げ込み、爆発

そしてボロボロになっている人達に追い討ちをかける今の状況が生まれたのですが……

「……流石にやりすぎなのではありませんか？」

「うーん、初めて使ったからかな？ 勝手が分かんなくてさ」

「初めて、ですか？」

「うん」

周りを見渡すと、いつの間にか不良の皆さんは消えていました
仲間二人をそこに置き去りにして

そして、泉さんは笑ってそう言っていますが手には未だに石が握られたままです

こんな物騒な物を持った人から追いかけられればそれは逃げたくもなるでしょうね……

「とりあえず、手に持っているものをどうにかしてもらえませんか……？」

「それもそっか」

そう言って石を投げ捨てました

……投げ捨てる意味はあるのでしょうか？

誰かに当たった場合、相当危険なのは……？

「それにしても泉さん、その姿は一体？」

「説明しなきゃダメ？」

「仲間にまで隠すほどの事なのですか？」

「うんにゃ、別にーただ面倒なだけだよ？」

「……でしたら説明して下さいよ」

ワンクッション入れないと会話が進まないのは彼女の特性なのでしようか……

困った人です

「じゃあ、まずはコレ」

「コレですか？」

そう言いながら泉さんが取り出したのは姿が変わる前に持っていた箱でした

「これはね、紫さんが言ってたんだけど人の想いが詰まっている物なんだって」

「人の想いが……？」

「うん、そしてそれを紫さんが色々弄って、何やかんやで私がその思いを込めていた人に変身できるのだ！」

胸を張る泉さん

大体は分かりましたけど……

重要な所を飛ばし過ぎなのでは……？

「だけど変身には条件がいるんだよ」

「条件、ですか」

「うん、ゲージが溜まんないと変身できないの」

「……………」

この人は一体何を言っているんでしょうか……

頭が痛くなってきました……

「一日寝たらフルになるんだけどね、フルに溜まっても三十分位しか変身できないんだ」

「そう……ですか」

燃費が悪い事この上ないですね……

「おろ、何か思ったより冷めた反応だね、キノちゃん」

「……一タツツコミを入れるのも疲れてきましたので」

「オウフ」

「そこまで短時間しか変身出来ないのでしたら、何故、解かないのですか？」

「……そうだね」

少し寂しそうな顔をしながら変身を解く泉さん

髪も服も元の彼女の物に戻りました

「じゃあ、キノちゃん、これからどうするの？」

「目の前の脅威も退けましたし……この喫茶店があるところを目指しますか」

「りょーかい！」

ビシッと敬礼をしてきました

彼女の言動や所作にはあきれる所もありますが……

先ほどは本当に助かりました

ボク一人では多人数相手をする事は現状ではかなり難しいですからね……

外であればまだしも、屋内で人を守りつつ迎撃するのは不可能に近いからですから

素直に言葉は出してはいませんが……感謝の気持ちは持っています

「置いて行くよ！キノちゃん！」

「……地図を持っているのはボクですよ、泉さん」

「あ、そうだったけ？」

「そうですよ……」

「そんな冷めた目で見ないでよ」

そんな事を言いながら泣きついてきた泉さんですが……
ボクは周りを見渡してふと疑問に思いました

「泉さん」

「何？」

「二人ほどですが……そこに倒れていた不良の方は何処に……？」

そう、先ほどまでそこで倒れていた人が忽然と消えていたのです

「仲間の人が連れていったんじゃないの？」

「では、ボク達が話している間に、この部屋に人が入ってきましたか？」

「いや、居ない筈だよ？」

「そうですよね……」「うん」

入ってきた形跡が無いとすると……消えた？

「まさか……いや、ありえないはず……」

「どーしたの？」

「……」

倒した人物達がいきなり消える

この現象にボクは何度も遭遇しています

その現象は……

「絶夢の手下を倒したとき……」

「絶夢？」

そう、その現象と一致します

ボクは彼をツカサさんと一緒に倒したのをこの目で見たのですが……

「まだ生きていたってオチとかじゃ無い？」

「ありません」

「断言されちゃったよ!？」

「……しかし、現状を見るにそれも視野に入れておくべきでしょうね」

生きていたとすると……今回の事件も絶夢が……？

これはツカサさん達と早急に話し合う必要がありますね……

「泉さん、急いでここに書かれている喫茶店に行きましょう」
「うい!」

ボク達は無限城を出て、その目的地にたどり着きました

「ここ……ですか？」

「地図によるとそうみたいだけど……？」

「とりあえず中に入りますか」

ボク達はドアを開け、モダンな雰囲気を感じさせている店内に入りました

カウンターと奥にテーブル席があり、至ってどこにでもありそうな喫茶店です

「いらっしやい」

「どうも」「こんにちはっす！」

バンダナを頭に巻き、サングラスをかけている店主と思しき人物が声をかけてきました

と思いきやいきなり黙ってこちらを観察してきました

「おじさん、何なの？女子高生がそんなに珍しい？」

「いやいや、そんなんじゃないんだ」

笑いながら泉さんのストレートな言葉を返しました
そしてまたしばらくボク達を眺めた後

「今、あいつらは居ないんだ、だから適当に座って待っていてくれ」

……何と言いました？

ボク達がその人たちに何をするかを知っているような感じがしたが

……

「この喫茶店に来るやつは大体そうなんだよ、あいつらに仕事を頼みに来るのが」

「なるほど……」

それはあまり喫茶店目的で来る人がいないという事と同じでは……？とにかくここには目当ての人物はいないようですね

ここで待っていて、その二人が来るのを待つか、再び、あの場所に行き、ツカサさん達を探すか……
どちらも時間がかかりそうですね……

「おっちゃん！コーヒー二つ！」

「……飲めるのかい？」

「むう！流石に味覚までは幼くないよ！」

「……」

人がこれからの事を考えているというのに、この人は……
少し説教が必要ですね……

「泉さ「キノちゃん」」

背中を向けながらそんな言葉が聞こえてきました

「キノちゃんは考えすぎじゃない？」

「考えすぎ……ですか」

「今だってそう、仏頂面で難しく考えて……」

「……」

「確かに、ツカサ君も当麻君もチルノちゃんも心配なのは分かるよ。
けど……」

「けど……何でしょうか」

「私たちがどうしようも無い時は、落ち着くのが一番だよ」

「……………」

「私たちが今できるのはその人たちを待つ事なんじゃないかな？」

「そうかも……………しれませんか」

確かに難しく考えすぎていたかもしれませんがね

それなら、ボクも…………

そう思った時には座っていた席の前にコーヒーが一杯置かれていました

「どうぞ」

「……………ありがとうございます」

一口啜ったコーヒーは風味豊かで、とても美味しい物で、その香りがボクの全てを柔らかに包み込んでくれました
たまには…………

たまには何も考えない時間を作った方が良いのかも……………しれませんか

「しょーじきな所、もう歩きたく無かったのだよ、キノちゃん！」
「泉さん……その一言で全てが台無しです……」

第三十一章 旅人と“鍵” 4（後書き）

くシャインとキノのあとがき劇場く

驚・愕・購・入！

「ようやくですか……」

色々忙しかったんだもん

「で、読んだのですか？」

実はまだなのだ……

ハヨ読みたい

しかし、同時に他のシリーズものも買ったしな……

「何でそんなに一気に買うんですか？」

溜まってたんだよ！

「いつもの事では無いですか」

やっぱ酷いよね、キミ

「さて……今回は話したい事があるんですよ」

ああ……

「……深刻な事ですか？」

ああ……俺は気付いてしまった……

「……」

らき☆すたのみゆきさんのお母さんがめっさ幽々子様にそっくりだ
ってことに！

「……あ、すいません、カノンの手入れをしていたので聞こえませ
んでした」

話し聞く気ゼロ！？

「深刻なことに聞いた瞬間、くだらない事だと思ったので」

うわーん！酷いじゃないか！

「と、言う訳で今回、色々微妙なのはこんなくだらな事を考えて
いたかららしいです、そしてこのままあとがきを終わります、次回

のupも楽しみにしてて下さい」

俺のターンがほぼ無しで終わった!?

え!?

マジで終わり!?

そんな事させな

(強制終了)

第三十二章 不幸な者 4 (前書き)

最短記録突破 W W

短すぎますがどうぞ W W

第三十二章 不幸な者 4

「あやや……私がない間にそのような事があったのですか……」

あの謎の女の子に会ってからしばらく歩いていたら、そんな事を言いながら合流してきた新聞記者

……そういえば何だかんだで名前を聞いていないな

まあ、良いや

別にこいつに対しては何もやって貰って無いしな

「それは酷くないですか!？」

「何故分かった!？」

「ええ!？ 本当に何か私に対して後ろめたい事でも思っていたんですか!？」

「カマをかけただけかよ!」

こいつと話してるのが無駄な時間なので赤屍さんにも話すか……
そう思い彼が居る方向を見ると――――――――――

「……………」

「♪」

鼻歌を歌いながらメスを研いでいました
怖ッ!？

でも、あのアホと話すよりはまだマシだな……

「……赤屍さん？」

「ん？ 何でしょうか？」

出来ればその物騒な物を仕舞ってからにしてももらえればありがたかったが……

贅沢は言えないか

「ちょっと!？私と話を「どうします? 闇雲に探しても見つからないでしょうし……」」

「ですから話を「では、少しばかり休憩としますか?」」

「無視は酷くないで「こんな危険な所ですか?」」

「話を聞いてくだ「外に少しだけですが良いところを知っているの
で」」

知り合いも居るので手伝ってもらえるでしょう、と付け加えていた
この人の知り合いともなればそれは強い人なんだろう
……物騒な人では無い事を祈る

「それに、見つけるには多い人数で探した方が良いでしょう?」

「まあ……それもそうですね……」

不安要素があり過ぎて怖いがツカサ達を見つけるまでの我慢だな……

「おい、バカラス、行き先が決まった……何やってんだ?」

「私の事は放っておいて下さいよ……」

乃の字を地面に書いている

平仮名じゃないのか、普通は?

しかし、このままいじけられているのも邪魔なだけだし……何より、
こいつも連れて行かねえと後味が悪いしな

「じゃあ、行くぞ」

「え!？ ちょっと!？ 襟を掴んで歩かないで下さい! 首が締

まります!」「だったら自分で歩け」

「わかりましたから引きずらないで下さい」

ようやく自力で歩き始めた

全く……

「かなり歩きましたけど……まだですか?」

「もう後、五分ほどですよ」

景色はかなり変わり、不良の巣窟みたいな所から普通の都会のよう
な場所になっている

あの無限城はこの世界での異質なものとして見られている、と俺は考える

「取材するためのネタがほとんどありませんね……がっかりです」

「ただだけネタに詰まっただ、お前」

「詰まっただはいいませんがネタは多い方が断然良いでしょう！」

「……」

こいつは無限城を出てからも変わらずにネタばかり探している
疲れるって言葉を知らないのか……？

そうやって目的地に向かって歩き続けると、ふと赤屍さんが止まった

「どうしたんですか？」

「すいません、私は此処までの様ですね」

「何故ですか!？」

「アレを見て下さい」

「アレ？」

赤屍さんが指差した方向を見ると目的地があった
そしてそこに入っていくのは……見覚えのある茶色のコートと青い
アホ毛

「キノと泉か……!？」

まさかこんな所で再開できるとは思ってもいなかった
偶然でも凄いと俺は思う

「当麻君」

「あ、すいません、赤屍さんありがとうございます」

「いえ、そうではないのですが」

そう言いながら赤屍さんはポケットから何かを取り出した
受け取ってみると紫色をしたサングラスの様だった

「これは……？」

「君に渡そうと思ひましてね」

「はあ……？」

何故いきなり、とか

そんなもん持ってたのか、とか思ったがその辺は気にしないでおこう
貰えるものはありがたく貰っておく人なので、俺は

「まあ、いただいております」

「いえいえ」

これでお別れともなると少しだけ寂しい気もするな
まあ、世界を渡るって言うのはこんなもんなだろうな

「私も貴方に渡しておきます！」

「いらん！」

「ええ！？」

「当然だろうが！ お前から貰うもんなんで口クなもんじゃねーだ
ろうが！」

「少しは信じて下さいよ！」

「断る！」

こんな感じで、あの自称記者と口論をしていたが面倒くさくなった
ので赤屍さんの方を向くとすでに遙か彼方に行っていた

「おい、アホ」

「何ですか！　ようやく貰ってくれ――――」
「あっちあっち」

俺の指差した方向を見て驚いて俺に何も言わずに赤屍さんを追いかけていった

最後まで慌ただしい奴だったな……

さて、感動の再会と行こうかな

……あれ？

赤屍さんって俺の仲間の事を知らないはずじゃ無かったっけ……？

何であの二人が俺の仲間だって分かったんだ……？

まあ、あの人は何でもある人間なんだろう

そう考えておくか

「……良かったのですか？」

「何がです？ 文さん」

「アレを渡してしまつて……あの人に怒られるのでは？」

「私はあの人の手駒、と言う訳ではないので」

「そうですか」

「おや？ 案外冷たいですね」

「……貴方に着いて行けばネタが尽きる事はありませんが……私は貴方の事が嫌いなのです」

「これはこれは……随分と言いますね」

「本当の事を語っただけですよ、Drジャッカル」

「それは困りましたね……しかし貴女も情報を渡した事に変わりは無いのでは？」

「……やはりバレていますか」

「私の目をごまかせるとでも？」

「幻想郷最速とは言われていますが……世界は広いと言ったところでしょうか」

「さて……どうでしょうね」

赤屍 蔵人は手から一本の直剣を取り出した

「では、私はこれでここからまた移動しますが……貴女はどうします？」

「先ほども言いましたが、貴方の事は嫌いですがネタは色々出てきますので……それに」

「それに？」

「貴方が居ないと移動もできませんから」

「クス……」

その剣を空に振り上げると、空間が斬り裂かれた

「行きましようか？」

「ええ」

そして、黒衣の運び屋と最速の新聞記者はこの世界を立ちさった

第三十二章 不幸な者 4（後書き）

くシャインと当麻のあとがき劇場く

「前書きでも言ってるが短すぎじゃね!？」

ごみんごみんww

君の章ってぶっちゃけ書き辛かったんだよww

「そんな理由で!？」

うん

「不幸だーーーーー!」

まあ、伏線モドキも一杯出来てきたし良いじゃん

「そういえば前の章を読みなおしたんだけどさ……」

おうよ

「伏線モドキ?の数が多すぎないか」

まあ、拾うかどうかは作者のみ知るってとこかな、ハハッ

「おい……」

そしてここからは御知らせを二つ

「何だ？」

まず一つ、大会で負けました……

「ああ、先週だな……お前の所為だよな、多分」

傷口に塩を塗りこまんというて!

「まあ、運が無かったんだろ」

君が俺の小説に居た所為かもな……消すか（ボソッ）

「さらっと怖い事言っただけど!？」

まあ、八つ当たりしてもしゃーないからこの辺で

「ホッ……」

では次

「次は何だ？」

あと少しでこの小説ユニークアクセスが一万行くんだよ

「おお……って遅くね？」

いいじゃん！

所詮自己満足なんだから！

「目から汗を流しながら言われてもな……」

と、言う訳で性懲りも無く突破記念を書きたいと思います

「またか……苦勞するのは嫌だぞ……」

その辺は読者さんによる

「へ？」

今回はリクエストを取ってみようと思う

「ほう」

……あんまり意見をくれる人が居ないだろうけど

「その辺は仕方ないだろ、三流以下の小説なんだから」

君にまで言われるの！？

もう、誰を信頼すれば良いのか分からなくなってきた……

「じゃあ、ちなみにどんな話だ」

ええと……一応候補としては――――

G 編

料理編

クイズ編

休暇編

短編

この五つかな

「ちよっと待て」

何？

「一番上って何だよ！？」

まあ、選んでみないと分からないな W W

「そんなギャンブルいらねえよ！？」

と、言う訳でこの中から読みたいなくって思ったものを感想、メッ

セージ、どんな手段を使っても良いので作者に伝えて下さい

「これで終わりか……？」

当麻君、ぶっちゃけて良い？

「何だ？」

今回あとがき書いてる方が楽しかったww

「俺はお前のその幻想をブチ壊す！」

ちょ！？

本編でもまだ言ってる無いセリフを言うなよ！？

そして何故、俺の体は消えていくんだ！？

俺って何者！？

怖くなってきた！？

もう、消え――――

「ふう……とりあえず今回も読んでいただきありがとうございます
た。 次のupも楽しみにしていて下さい。 では」

第三十三章 元救世主と妖精 5

「……………！」

揺するなよ……

人が気持ち良く寝てるのに……

「……サ！」

大声もだすな……

頭に響くだろうが……

「…カサ！」

うるせえな……

そろそろ温厚な俺でも怒るぞ……

「ツカサ！ 起きろ！」

「だー！ うるせえんだよ！」

「あ！ 起きた！ 良かった！」

「ブフウ！」

怒りに身を任せて起き上がれば、その直後に何か重たいものが俺の腹にクリーンヒットした

大体予想は出来たが、ソレをしてみる

「な……何をしてんだ、チルノ………？」

予想通り、青い髪をした彼女が俺に抱き着くような形でいた

体勢が少し危ないような気がするが気にしたら駄目だな

「だ……だって……ツカサが死んじゃったように寝てるから……」
「……………」

チルノの俺を見据える目は今にも泣きだしそうになっていたちよつとだけ眠ったつもりだったが……
思ったより爆睡してしまっていたみたいだな

「悪いな、心配かけて……」

さっきもやったが俺はチルノの頭を撫でた
ひんやりと冷たいサラサラの髪の毛の感触が傷ついた体にはちょうど良
く感じる

しばらく撫で続けたがふと思いチルノに聞いた

「なあ、アイツは？」

「あっち」

チルノが指差した方向を見ると、横たわった状態で放置されていた
少しだけ警戒しながら近づいて行く

「……何だ、この格好？」

そいつが着ていたのは腋が大胆に開いた謎の服装

緑色のふわふわしていきそうな髪には蛙と蛇の飾り物が

俺の言葉で表現するなら『何このコスプレイヤー』って感じか？

しかしそんな恰好も気にならないほどに綺麗な顔をしている

歳は……俺と同じくらいか？

まあ、人間観察をしても情報は得られない訳であるので……

「チルノ、いつでも攻撃できるよう構えていてくれないか？」
「りょーかい！」

一応安全は確保した、と思う
そして俺はそいつの頬を叩く

「う……ん……」

……色っぽい
って違う!!!!!!!!!!

そんな目的じゃないからな！

「おい、起きろ！」

「うん……朝御飯はまだの筈ですよ……」
「……………」

ダメだ、完全に寝ぼけてやがる……
ちよつと悪いけど……

俺は構え、額に狙いを定める
高さよし……

飛距離よし……
目標捕捉！
発射アアアア！

「そおい！」
「痛っ！？」

御馴染み、俺の伝家の宝刀、デコピンである
それにしてもいつもながら凄まじい威力だな……

寝ている人を一発で起こすとは……

……キズナに放つのも少し減らしてやるか

「い、いいい一体何ですか！？ 敵ですか、敵が攻めてきたのですか！？」

「落ち着け……はい、深呼吸、深呼吸」

「スーハースーハー……で、貴方は一体何者ですか？」

「それはこっちのセリフなんだがな……」

このままだと話が進みそうにないので俺から自己紹介することにした

「俺の名前はツカサ、ただの学生兼救世主だと思う」

「……学生兼救世主？」

「……忘れてくれ」

「は、はぁ……分かりました」

「で、あんたは？」

「あ、申し遅れました。私は東風谷^{こちや} 早苗^{さなえ}と言います」

「……」

「あの……何か？」

「いや……」

何だ？

この変わりようは？

さっきまでの嫌な雰囲気が一つも感じられない
むしろ人当たりが良さそうなんだが……？

「ところで……ツカサさんは私に何の用ですか？」

「うーん……」

当たり障りのないように聞いてみるか……？

ストレートに聞いてみるか……？
悩みどころだな……

「あれ？　そこに居るのは……」
「ん？」

早苗さんの目線の先にはチルノが居た
そういえば紹介を忘れていたな

「あいつはチルノって言います」
「いえ……一応知っていますけど……？」
「え……？」

うん？

まさか、この人も……？

「幻想郷の住民、なんですか……？」
「ええ、そうですね……何か？」
「……」

よく勝てたな、俺……
まあ、それは置いといて……

「あの、何も覚えていないんですか……？」
「？」

……本当に何も覚えて無いみたいだな
だったら下手に回りくどく聞くよりはそのまま聞いた方が良さな

「さっきまで俺たちと戦っていたんですが……」

「え……あ！　良く見たらツカサさんボロボロじゃないですか!？」

貴女にやられたんですけどね……

そして貴女も結構ヤバイような……

服とかボロボロですし……

だが、これで分かった事はある

この人は自分の意思で俺たちと戦った訳じゃない

推測するに誰かに操られてって感じか？

で、俺が彼女を倒したからそれが解かれた……とかか？

ゲームとかでも良くあるパターンだしな

「大丈夫ですよ、これくらい……それより、貴女が最後に覚えている事は何かありますか？」

「覚えている事？」

「何でも良いんです、話して下さい」

「ええと……確か……そう！　ある二人を探しにここに来たんですよ」

「それで？」

「何だか黒いフードを被った人物にいきなり絡まれました」

「ふむふむ」

黒いフード……ミストの奴らだな、確実に

「それでも腕には自信があるんですよ」

「まあ……さっきまで戦ってましたしね……あ、続けて下さい」

「戦ったは良いんですけど思った以上に強くて……」

朝倉　涼子か？

一応詳しく聞いてみるか

「そいつは女か？」

「いえ、背が私よりも高い男の人でしたよ？」

「……………」

まだ居るのかよ……

どれだけ強い奴を集めれば気が済むんだ……

「そして何やら円状の武器を飛ばしてきましたね」

「円状？ それは緑色か？」

「いえ？ 真っ赤でしたけど？」

ふむ、まあ、裏切ったとか言ってたからな

あいつではないか……

「私が倒される寸前に名前を聞いたような気がするんですけど……」

「ですけど？」

「『俺の名は』と言ったところ位で聞き取れなくなりました」

……そんなもんだと思った

大体、そんな簡単に情報は渡してはくれないだろうな……

「分かった、ありがとう」

「い、いえ……それより本当に大丈夫ですか……？」

「ああ、結構休んだから大丈夫——————」

ってアレ？

意外と身体が言う事を聞かない……

ヤバ……このままじゃ倒れる——————

そう思った俺は反射的に目を瞑った

『ふよん』

そんな擬音が聞こえる位柔らかい感触と共に倒れる事は無かった

「もう……自分で大丈夫とか言ってる人に限って大丈夫じゃないんですよ……」

「……………」

……OK、把握

早苗さんが倒れる俺を支えてくれたって事だよな

しかし……目を開けたは良いが何も見えない

そして顔には柔らかい感覚

この三つから推測するに……………

「すいませんでした」

「ええ!？」

彼女からすぐさま離れ綺麗に土下座

ラッキー!とか思うけどそれを口に出したら人間としてダメだしな
……

「いや、事故とは言えマジですいません! この通り何でもしますから!」

「え!?! え!?! 私、何かしましたか!?!」

いえ、貴女は何もしてません……
強いて言うなら俺がした訳で……

「あの……とりあえず落ち着いてから話をしましょう」

「……それもそうですね」

彼女が気付いていないのでこのまま謝り続けると逆に悪い気がしてきた

顔を上げて立とうとすると視界にちらりと気になるものが見えた
何だと思い拾い上げてみると、先ほどまで早苗さんが身に付けていた
禍々しい赤い水晶の破片だった

先ほどまでの濁ったような色ではなく、綺麗な色になっていた

「何ですか、それは？」

「え? 早苗さんが身につけてた物なんですけど……?」

「私は知りませんよ、こんな綺麗な石を付けていたなんて」

「……じゃあ、これが原因か?」

「ツカサさん?」

「気にしないで下さい、推測の域なので」

俺の推測ではこの水晶が操るための媒体で、俺が戦って壊したから、解放された……とかだろう

ま、一学生の俺が適当に付けた推測だしな
紫さんに帰ったら聞か………

「って、ああ!？」

後ろの方で待機していた二人が凄いビックリしていたが肝心な事を完璧に忘れていた……

「ど、どしたの、ツカサ？」

「皆を探してねえ！」

「あ……」

そう、キノと当麻と泉の行方が全くもって分からない
皆が居なかったら報告したくても帰れない……

「ど、どーするの!？」

「どうするもこうするも皆を見つけねえと!」

このままじゃこの世界に閉じ込められて終わりなんて事に……
それだけは………!

「あ、あのー」

あ、早苗さんを置き去りにしていた……
とりあえず、質問には答えないと
情報もくれたし

「何ですか？」

「私がバイトしている先にちょうど良い人たちが居るのですけど…」

「どんな人ですか!？」

「それも含めてそこに行ってから話したいのですが……よろしいですか?」

まあ、正直な話、俺とチルノは此処の知識が圧倒的に無い
だったらこの世界を知っている人たちの方が見つける確率は高いか
……?

「……何から何まですみません」

「い、いえ、元はと言えば私が悪いようですし……」

「じゃあ、案内を頼んでも良いですか?」

「ええ、こっちです」

俺とチルノは早苗さんの後ろを付いて行った

幸い、目的地に向かう途中、誰にも会わなかった
体力的に俺たちは相当辛いので嬉しかった

「ここです」

「ここ、か」

着いた所はどっからどー見ても普通の喫茶店

早苗さんの言っている例の人たちは此処を根城にしているのか
そして早苗さんは説明もせずに俺たちを置いて中へ入っていった

「マスター、こんにちは」

「お、早苗ちゃん、久しぶりだね」

「久しぶり、ですか？」

「ん？　ここ三日間ほど来なかったけど……身体は大丈夫かい？」

「み、三日ですか！？　すみません！」

「いや、良いよ、気にしないで」

中々良い人みたいだな
そのマスターとやらは

「マスター、実は蛭さんと銀次さんに依頼をしたいって人が居るんですけど……」

「タイミングが悪いな……先に他の依頼人が来てるよ、そこに」

「そうなんですか……」

「だけど、あいつらもまだ帰って来てないからな、一緒に待っても」

らうか？」

「そうなりますね」

会話が終わったようで外に彼女は出てきた
大体、聞き取れたから説明はあんまりいらなかな？

「ツカサさん、実は先客が来ていらっしやったみたいで……」

「いや、頼めたらって軽い気持ちで来てるからな……その人たちの
後で大丈夫ですよ」

大丈夫、な筈だよな……

「じゃあ、折角ですから中に入りませんか？」

「じゃあ、御言葉に甘えるところか、チルノ」

「うん！」

早苗さんに後ろに付いて行って中に入った

「お、ツカサ君、おひさ〜」

「……………え？」

鳩が豆鉄砲、いや、マシンガンを喰らったかの様な顔を俺はしていただろう

この独特の緩い声……いや、まさか……

「ツカサさん……！」

「ツカサ！ 無事だったのか！」

その聞き覚えのあり過ぎる声を立て続けに二つも聞こえてきたこれは……まさか……？

「キノ？ 当麻？ 泉？」

声の方向に目をやると三人の顔が見えた

無表情に近い顔を少しだけ緩ませているキノ

再開出来て良かったというのが顔に見えている当麻

パフェを食ってる泉

……後で説教だな？

そんな事より、良かった……無事で

「あれ、君達は彼と知り合いだったのか？」

「ええ、彼を探してもらおうと思っていました」

「それは凄いな……奇跡みたいだな」

「ええ」

確かに、奇跡的な確立だ

こんな事が起きるのは奇跡でもない限り不可能だ

今回は神様ってやつに感謝しなきゃな

ただ……

「ツカサさん」

「ああ、分かってる」

俺たちは一刻も早くこの世界から出て、生存報告をしなくてはいいけないからな

「皆、帰るぞ」

「ええ、話したい事がいくつかありますしね」

「それは、俺もだ」

皆がバラバラの間は闇雲に探してたんじゃ無くて情報も見つけてたか俺もそうだからな

情報を整理し、繋げていきたいからな

そして、俺は水晶を取り出した

「ねえ、このパフェ食べ終わってからにしてよ」

「断る！」

「ええ！？ ツカサ君、来るの一番遅かったよね！？」

「そんな事言ってる暇があるか！？」

「ある！」

「胸張って言うな！ 良いから来い！」

「あゝれ」

そして水晶を発動させようとして思い出した
そこを振り向くと早苗さんとマスターがポカンとした顔で俺達を見
ている

悪いとは思うけど……

「早苗さん」

「は、はい？ 何でしょうか？」

「ちょっと俺たちと手を握っててもらえませんか？」

「……………？ そうですか？」

「はい、では後で説明しますので怒らないで下さい」

「何がです……………って、きゃあ！」

瞬間、光が店を包み込んだ

「……………早苗ちゃん、連れてかれたな」

「波児^{ポール}さん、ただいま……」

「お、帰ってきたか、銀次」

「……………」

「ん？ どうした？」

「蜜ちゃんが……いない……」

「蜜が……？」

「そうなんだ！ 今日別れた後、連絡もつかなくなって……」

「……心配すんな、そんなやわな奴じゃないのはお前が一番知ってるだろ？」

「……それもそうだね」

「ああ」

「ところで、早苗ちゃんは？ 最近、楽しみになってるんだ」

「早苗ちゃんならついさっき連れ去られたが？」

「え……ポ、波児さん！？ 見逃したんですか!？」

「いや、害はなさそうだったから……って話も聞かずに出ていくなよ……忙しい奴だな……」

波児は誰に見せるでもなく肩を上げる動作をした

そして、自分用のコーヒーを入れて座った

「ま、銀次には見つけられないだろうな……あの移動の仕方、空間に穴を空けるような事が出来るのは、俺の知る限りじゃ、あの人ただ一人だからな……自分以外にその力を使うって事は何か世界の危機でも迫っているのか……？」

そして天を見上げて呟く

「なあ、紫さんよ……」

第三十三章 元救世主と妖精 5（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

終わった！第一部完！

「え！？ 終わるのか！？ これで！？」

いやいや、イツツジョーク、引っかかってやんのく

「……………」

しばらくお待ちください

「ふう…………さて、とうとう無限城脱出だな」

うん…………ねえ、流石にやり過ぎたとか思わない…………？

「思わない、反省もしていない」

…………地区ショー

「…………一応ツツコンどいてやる、何が始まるんだよ」

…………ごめん、変換ミス

「…………さいで」

…………まあ、何だろうね、最近執筆のネタが尽きてきたよ

「まあ、その辺は頑張れよ」

文屋さんにネタ貰おうかな

「それはやめとけ…………と、言うか一つ良いか…………」

おう、何だ？

「お前…………あんなん書いて大丈夫なのか…………ある意味冒険だろ」

早苗さんとのとこね、ま、君へのサービスだよ

「いやいやいや！？ お前、絶対にやにやししながら執筆してただろ

！？」

…………ツカサ君、これだけは言わせてもらう

「お、おう…………（何だ、この迫力は…………！？）」

俺の興味があるのはチルノのはだ（ry

主人公、作者に折檻中……………

ま、そんな訳でテストが近い訳で……

「今の何処にそんな脈絡があった!？　てか何でピンピンしてんのお前!？」

そんなこたあ、海の広さに比べればちっぽけな事だ!

「セリフをばくんなよ!？　最近、お前がハマったロック○ンX6の実況動画でそれが良く使われてて、使いたくなったからだろ!？」
そんなこ（ry

「だまれ!」

ぐふう……

「ふう……まあ、今回はこの辺で。　ありがとうございました」

第三十四章 集合（前書き）

重要なお知らせがあります

あとがきにて

遅くなってしまうし訳ございませんでした
でわ、ドゾ

第三十四章 集合

「皆、御帰り……！」

帰ってきた俺たちに会った紫さんは心底嬉しそうだ

今回は覚悟はしていたんだろうけど、やっぱり心配だったんだろう

「ただいま」「ただいま帰りました」「うっす」「ただいまー
ー！」「ただいまー」

「……お疲れ様、皆」

今にも泣きそうな顔で言わないで下さいよ……

こっちも危険を承知で行ったんですから

でも、今回はマジで危なかったな……

下手したら、あの世界でそのまま会えなかったかもしれないしな

「ええと……ここは何処ですか？」

そうだった、早苗さんに詳しい説明も無しに連れてきたから……

とりあえず今まで起きたことを簡単に説明するか

話はそこからだろう

「そうだったのですか……」

「ええ、貴女は無事で良かったわ」

「私は……と言うことは神奈子様や諏訪子様、他の方々は……」

「残念だけどまだ見つかっていないわ」

「……………」

酷く落ち込んでしまったようだな……

気持ちは分からなくは無いしな……

「見つかり……ますか……？」

「……………」

流石に紫さんも答えるのは難しいか……

だけど……

「見つかる」

「ツカサ……？」 「ツカサさん……？」

「見つかる、いや、見つけてみせる、絶対に」

この言葉は根拠も無い上に実行出来る力が俺にあるのかどうかも分からない

……だが、俺はこれ以上、人が悲しむところは見たくない
その為にも……

「早苗さん、俺たちに協力して下さい」

少しでも力が欲しい

ミストの奴らに勝つためにも……！

「……クスッ」

「な……笑うなんて酷くないですか!？」

「そんなこと言われなくても私は手伝う気で一杯ですよ」

「え……?」

「私の大切な人を見つける為にも、この異変を終わらせるためにも……私にも手伝わせて下さい」

「い、いや、こちらこそよろしくお願いします」

「どうしました?」

いや、いきなり笑顔をむけられると……

美人の笑顔に弱いな、俺……何とかしないとキズナに弄られて……

「ニヤニヤ」

「何ですか、紫さんその顔は……」

「べっつにー、なんでも無いわよー」

「……………」

この人も人を弄るのが大好きか、畜生……

「まあ、ツカサについては後にして……どうだったの?」

「何がですか……」

「帰ってきただけでも良かったんだけど……何か掴んできた?」

「あ……じゃあ、話しますか、皆で」

と、言う訳で早苗さんには少し休んでいてもらうために他の教室に行ってもらった

長机を並べてパイプ椅子を用意して俺たちは座った

「じゃあ、まずは俺とチルノからだな」

「お願いします」

まあ、話す事はゼロと戦った事と早苗さんと戦った事位だけどな
詳しく説明する事も無いな

情報なんか無いようなもんだし……

あ、そういえば

「紫さん、これ何だか分かりますか？」

例の赤い水晶だ

これが俺の持ってきた唯一の情報みたいなもんだしな

「これは……『解放石』かしら……？」

「何ですか、それ？」

「簡単に説明すると、自分の裏の人格を引き出す石ね」

「裏の人格？」

「早苗と戦う前と戦った後に性格が変わったでしょ？」

もしかして、俺の予想がドンピシャリ？

「俺が石を破壊したから……」

「そう、出てきていた裏の人格が消えて、元々の人格が出てきたんでしょ」

「早苗さんがこうなっていたって事は……」

「ええ……もう、何人かは奴らの手の内ね」

もう戦いたくないのにな……

紫さんに聞けば早苗さん以上がゴロゴロいるとか……

もうヤダ……

ま、これで奴らの戦力の何人かは幻想郷の方という考えを持っている方が良いな

「そうね、じゃあキノ、貴女は何かあった？」

「そうですね、優しそうな薬師の老人がいらしゃった事と、泉さんが発狂した事でしようか？」

「ちょ！？」

キノ、後者の話について詳しく頼む！？

「発狂じゃないって、アレは紫さんから貰った力だって」

「力を貰った？」

「そうよ。テストも無しでだったから成功するかどうかは分からなかったけど……成功したみたいで何よりだわ」

紫さん曰く、泉の力はその持ち主の強い思いを力に変えるらしいだが、キノの話を聞く限り泉がコスプレしてるだけっぽいな

「酷い！？　ちゃんと使ってるよ！」

「まあ……実際見てみないと……」

「ツカサ君も冷たい」

ま、キノ達も有力な情報は無いみたい――――――――――

「そーいえばキノちゃん」

「何でしようか？」

「あの絶夢云々についてはいいの？」

絶……夢……！？

「どう言う事だ！？　泉！？」

「ちょ、落ち着いて、ツカサ君！　そんなに揺らさないで！」

「わ、悪い……だけど……」

何故そいつの名前が出てくる!?

もう前の俺が倒したんじゃないのか!?

「……あくまでも可能性です、ツカサさん」

「……説明してくれ」

ええ、と一息ついてからキノは語りだした

「ツカサさんは覚えていますか？ 絶夢の手下を倒した時の事を」

「おぼろげだが……覚えてるぞ」

「ではどんな状態だったか説明をお願いします」

「どんなって……」

確か……

「バタツと倒れてからしばらくしたら急に黒い霧の様になって消えたんだよな」

「そうです」

「で、それが絶夢とどう繋がるんだ?」

「泉さんが手榴弾を投げた後に石を使って殴り倒した不良の方がいらしたのですが————」

物騒な事は何も聞いてないよ、俺

泉が手榴弾使ったとか人を殴り倒したとか全然聞いて無いからな!

「目を離れた隙に消えていました」

「……絶夢の手下の消え方と一致する……と?」

「ええ……ですが似ているようで違う所が一つだけあります」

「……それは？」

「前、絶夢を倒すまでに戦ってきた手下が持っていた意思はボク達を倒す事だけ……ですが今回は人間とほぼ変わりませんでした」

「それが……違いか？」

「ええ……」

情報としては不鮮明だが……重要そうだな……

ミストの黒幕が絶夢である可能性が出てきた訳だ……

やれやれ……

奴と俺は切っても切れない関係なのか……

「今度こそボク達の情報は終わりです」

「……サンキュー、キノ」

「いえ」

「え！？ 私は！？ 私には！？」

「さて、次は……」

「ツカサ君、酷い！」

さて……

俺とチルノのグループ

キノと泉のグループの情報暴露が終わった

と、いうことは次は……

「何だ、そのこいつは持ってないだろう、みたいな視線は」

「当麻だからな」「当麻さんですから」「ツンツンだから」「当麻君だから」

「それどういう意味！？　　というかチルノと泉！　　お前ら俺の事言えねーだろーが！」

「ツンツン、文句ある？」

「全く」

発射準備万端の状態でチルノが言うと、当麻は大人しく引き下がっていった

……弱いな、当麻

「とりあえず……コレ」

「ん……グラサン？」

少し小ぶりの紫色のグラサンだった

全く見覚えも無く、これが何なのかも分からない
種って可能性もあったが見ている限りそれは無い
これが何か、そう皆で思っていた時、紫さんが当麻に掴みかかるような勢いで近づいて行った

「当麻！ これは何処で拾ったの！」

「ちょ、ちょっと、待っ、待ってく、くださいー！」

「紫さん!？」

今にも首が取れそうな勢いで動いていて生命にかかわりそうだったので止めた

肩で息をしている紫さんに話しかける

「落ち着きましたか？」

「ええ……流石に取り乱し過ぎたわ……」

「助かった……」

「それで、何処で拾ったのかしら？」

「拾ったんじゃない無くて貰ったんですよ、赤屍 蔵人って人からです」

当麻が人の名前を言った瞬間、紫さんは座り込んだ

「ちょっと!？ 今度はどうしたんですか!？」

「彼が……蜜を……?」

完璧に錯乱している感じだ

「当麻! 一体どういう事なんだよ!」

「いやいや!？ 俺は何もしてねーぞ! その人に助けられただけだから!」

「助けられた……?」

紫さんが立ち直ったようだ

一体どうなる事かと思ったが案外大丈夫なようだな
それより……一体誰なんだ?

ここまで紫さんを動揺させる赤屍って人は!?

「……運び屋よ」

「それって……宅配とかしている人って事ですか?」

紫さんは首を振った

それに続けるように当麻が話した

「運ぶって一言で言っても荷物だけじゃねえらしい。
命を天国に運んだ事もあるらしいぞ
時には人の

何、その危険人物

当麻は良く無事だったな……

「そして別れ際にこれを渡された訳だ」

「このグラサンを……ねえ……」

特別変な物とも思わないけどな……

じゃあ何で紫さんはあんなに動揺してたんだ？

「……それが……貴方達の行っていた世界の住民の持ち物なのよ」

「……………」

それって……大変な事じゃないか！？

「ええ……持物を奪う事はその人物を消したことで等しいから……」

「……………」

遂には関係ない人物にも攻撃し始めたって事か……
早く奴らのアジトを見つけないとな

「……ツカサさん」

「何だ？」

「先ほどから気にはなっていたのですが……チルノさんは何を見ているのでしょうか？」

「チルノが？」

と、キノに言われてチルノの方を見ると床に寝そべりながら紙を見ていた

腹、冷やすぞ、その格好……

まあ、冷気を操るなら腹も壊さないか

それは置いといて

「何見てんだ？ チルノ」

「あ、ツカサ、これツンツンが落としたんだ」

「当麻が？」

「うん、だからあたいが見てたの」

それはプライバシー云々に関わるのでは……？

「人のを勝手に見るのはダメだろ、チルノ」

「あたいたい、人じゃないもん！」

確かにっ！？

良く考えたら妖精じゃん！

「……って、そうじゃない！ 没収！」

「ツカサの意地悪〜！」

頬を膨らませる様子は可愛らしいが……それでも心を鬼にする
きちんとした事を教えないと子供は犯罪に走るからな……

「……それは偏った知識かと」

「おうわ！？ びっくりさせるなよ！？ キノ！」

「で、それがチルノさんが持っていた物ですか？」

「無視か……まあ、そうだよ」

「写真……？」

「ああ、何が写っているのかは俺には皆目見当もつかないけどな」

「ボクにも見せてくれますか？」

「元々皆で見る予定だったしちょっと待っててくれ」

ここは知識的にも俺より知ってる人物に見せた方がいいからな
紫さんとか……悔しいが泉にも、な

泉のいた世界では俺の世界より色々作品として他の世界が描かれ
ていたらしいからな

その方面なら知っている可能性もあるし……

と、思っていたがいざ見せてみると

「……………」 「何処の写真、コレ？」

紫さんは困惑顔、泉はわれ知らずと言った感じだな

「紫さん……？」

「あ、悪かったわね、返事もせずに」

「い、いえ……」

「どうも思い出せないのよ、行った事はあると思うんだけどね……」
「それって、ただ単純に年老いて来――――」

と、当麻の言葉を遮るように紫さんは光弾やレーザーを放った
見る限りでは手加減なしだ

「だから思い出せるまで待っていてくれるかしら？」

「「「分かりました」」」

チルノ以外の残った三人で綺麗にハモツた
前から思っていたがこの人の前では完全に禁句だな……

「さて……次の世界へ行く準備もしないといけないし……仕事が多
くて嫌になるわね」

「何か手伝いましょうか、紫さん？」

そこまで多いのなら手伝いたくもなる

紫さんがいなければ俺たちは何もできないしな

単純な資料とかのの整理でも良いから手伝おうと俺は思ったが、紫
さんは微笑みながら首を横に振った

「良いの、貴方達が今できる事は身体をゆっくり休めて次の世界に備える事、それが貴方達の役目、分かった？」

「……………」

……役目、か

そう言われると責任重大だな

じゃあお言葉に甘えて休ませてもらいますよ

だけど……

これだけは言っておきたい

俺は教室を出る寸前に振り返る

「紫さん」

「何かしら？」

「身体は壊さないようにして下さいね」

「……私を誰だと思ってるの発言かしら？」

「……そうですね」

顔は反対方向で見えなかったけど……紫さんは笑っていたはずだ
その情報、移動手段、サポート……全ての事をやってくれているこ
の人に今できる俺の……

いや、俺達の恩返しは……

さつさと世界を救う事、かな

第三十四章 集合（後書き）

くシャインとツカサのあとがき劇場く

「……で、言い訳はあるか、作者？」

一つもござらんwww

「……そうか」

まあ、怒っても何も変わらないって、人生ラブ&ピース！

「ハア……で、前書きは一体何なんだ？」

あ、アレ？

この小説しばらく救済するっていうこと

「へー………え？」

だから事実上の休み！

ツカサ君、お疲れ！

「ちょっと待てよ作者！」

な、何！？

「今、執筆止めたら……！」

心配するな、受験が終われば戻って………

「読者に申し訳ないだろうが！」

そっち！？

「当たり前だ！　こんな駄文でもお気に入り登録してくれた方々に
謝れ！」

うう……

でもいっぱいいっぱいなんだよ！

親から執筆するなって言われるし……

最近テストの点とか課題とがヤバイし……

「……ちゃんと帰ってくるのか？」

さっき言ったけど、それに関しては問題ない
絶対に帰ってくる

俺、この受験が終わったら続きを書くんだ……

「死亡フラグウウウウウウ！？」

そんな訳で本当に申し訳ないですが一時休載します

まあ、キリの良いところでまだ良かったよwwww

「ま、確かに……」

そんな訳で次回予告（仮）タイム！

「なんだそりゃー……！？」

その通りの事だよ

執筆する（予定）の台詞をちよいとだけ書いておくのさ！

「もう、好きにしてくれ……」

でわ、あとがき自体はここまで

しばらくp出来ないのでもどかしいかもしれませんがシャインは必ず帰ってきます

それまで忘れないでいてくれれば嬉しいです

では、またいつか……

ここから先は次回予告！

ネタバレは無い……はずだ！

と、どうか今後の予定っぽい事

後、セリフオンリー

見たくない人は下にスクロールせずにゆっくり回れ右して行ってね！

「何、この生物！？ 妖気も何も感じない！？」

「ハートレス……！」

「はーとれす……何だい、それは？」

「話は後だ！ 手伝ってくれ二人とも！」

「また会ったな」

「……オレは会いたくは無かったがな」

「そう拒絶するな……また始めようではないか、戦いを……！」

「今度は不覚を取らない……完全に貴様をデリートする……！」

「なんで！ どうしてだよ！」

「貴方は……それで大丈夫だと思っているのかしら？」

「……………！」

「貴方にはまだやるべき事があるわ、だからお願い……………！」

「もーいーくつねーるーとーツーカーサーくーるー？ ……暇、シ

エルさーん、なんか暇潰せるもの無い？」

「……予備のパソコンがあるからそれでも使って」

「よっしゃー！ 今日こそマイン〇イーパークリアするよー！」

「……………」

「あり？ シエルさん、なんか勝手に起動してるんだけど……」

「え？ ちょ、ちょっと見せて」

「ほら〜バクったのかー？」

「これは……………！」

次回以降、物語はさらに交錯していく……………！

see you next time……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6992m/>

カオス・オブ・ヴィーナス

2011年10月7日14時33分発行